【著者】

赤松中学
あかまつ・ちゅうがく

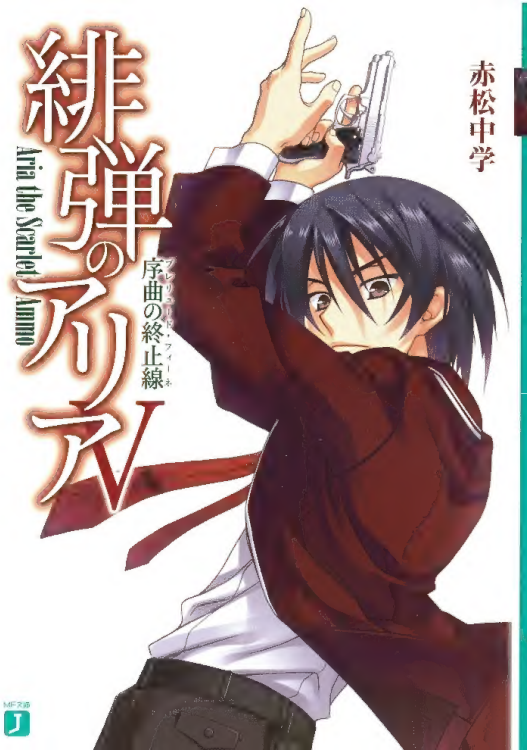
生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説「緋弾のアリア」は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぶらばん！』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ(ムシカゴグラフィクス)



MF文庫J

緋弾のアリアV

赤松中学

ISBN978-4-8401-3126-1
C0193 ¥580E

9784840131261

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

1920193005806

緋弾のアリアV　序曲の終止線（プレリュード・フィーネ）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジの前に、犯罪組織『イ・ウー』のリーダーである『教授（プロフェッサー）』がついに姿を現した。しかし、その人物はアリアにとって、かけがえのない大切な「あの人」で――。キンジに銃を向けるアリア、避けられない運命、二人の前に立ちはだかるのは全てを予知する力――『条理予知（ダンケル）』。それはまだ始まりの終わり、舞い戻る日常、新たなる敵――。大スケールアクション＆ラブコメディー第5弾!!

MF文庫J 赤松中学の本

- **アストロノト！ 1～3** [イラスト：bomi]
- **緋弾のアリア** [イラスト：こぶいち]
- **緋弾のアリアII** 燃える銀氷 [イラスト：こぶいち]
- **緋弾のアリアIII** 蜂蜜色の罠 [イラスト：こぶいち]
- **緋弾のアリアIV** 堕ちた緋弾 [イラスト：こぶいち]
- **緋弾のアリアV** 序曲の終止線 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアV

Aria the Scarlet Ammo

序曲の終止線（プレリュード・フィーネ）

赤松中学

「お前のパートナーは、俺だ。シャーロックじゃない。だから奪い返す」
「――2回目ね、あんたと戦るのは」

Shirayuki Hotogi

Riko Mine

Kanzaki·H·Aria

Reki.

P11 貫通弾1（ピアス） 時空を超える男（シャーロック）

P74 貫通弾2（ピアス） 序曲の終止線（プレリュード・フィーネ）

P141 再装填1（リロード）
粉雪、白雪の妹

P187 再装填2（リロード）
マルセイユ・ルーレット

P243 再装填3（リロード）
グッバイ・アリア

P282 Go For The NEXT!
ハロー・レキ

Contents

貫通弾1　時空を超える男

「カナ！　――カナ！」
叫ぶ俺の腕の中で、カナの力が失われていくのが分かる。
その左胸からの流血は、止まる気配すらない。
ああ、認めたくない。
認めたくない。
だが、カナは――心臓を撃たれたのだ！
武偵高の防弾制服は、たとえライフル弾でも防ぐ。
しかし、カナの狙撃に使われたのは恐らくＡ－ＴＮＫ弾。
理論上作成が可能とされ、開発が国際的に禁じられた装甲貫通弾に違いない。
「……キンジ……、これを――」
震える男声で――ヒステリアモードが解けたらしい――目つきを鋭くしたカナ、いや、兄さんが背に隠していた何かを渡してきた。
（これは、アリアの……！）
白銀と漆黒のガバメントと、弾倉。

兄さんはおそらく、パトラが隠し持っていたものを見つけていたのだろう。
それを受け取った俺が振り向くと、アリアはアンベリール号の舳先に立ち尽くしていた。
「伏せろアリア！　俺達は攻撃されてるんだ！　撃たれたいのか！」
俺はカナを抱えたまま屈みつつ、さらにアリアの細い腕を強引に引き下げる。
「……！」
ぺたん、とその場に尻もちをついたアリアの視線は……シャーロックの方に向けつつも、驚愕のあまり焦点を結んでいなかった。ほとんど放心状態だ。
それはそうだろう。兄さんを撃ったのは、アリアが『完璧な人』と心の底から敬愛し、写真まで肌身離さず持ち歩いていた……シャーロック・ホームズ――
――アリアの曾祖父、その人だったのだから！
探偵科の教科書によれば１８５４年生まれのシャーロックが……今なお生存していて、しかもイ・ウーのリーダーだったなんて。
ついていけるわけがない。そんな展開になんて。アリアの、心が。
俺は――へたり込んだアリアのホルスターに拳銃を押し込むと、デッキの落下防止柵を遮蔽物にしながら海を睨み付けた。
イ・ウー。
アリアの母親に無実の罪を着せた、無法者たちの組織。

どこの国にも手出しできなかった、超人を造り出す機関。
そいつが今、俺たちの前に浮上している。
――なるほど。こいつはどこの国にも手出しできなかったワケだ
イ・ウーの正体は、広大な海に潜む……原子力潜水艦だったのだから！
俺の脳裏を、4月のハイジャック事件がよぎる。
あの時、相模湾上空を飛んでいた俺達のＡＮＡ６００便は、どこからともなく飛来した対空ミサイルに撃たれた。あれも、イ・ウーによる攻撃だったのだ――海からの！
「……！」
その時、俺の目がそれを捉えた。
捉えた時には、もう遅かった。
こっちに正面を向いたイ・ウーから、俺たちのアンベリール号めがけて――
浅い海中に、2つの白い航跡が迫ってきている。
あれは――魚雷――!?
「……えっ……？」
それを見たアリアが、理解できないというような声を上げた時――2つの爆音と共に、船底から突き上げるような激震がアンベリール号を襲った。
水柱が上がり、飛沫の豪雨がデッキに降り注ぐ。

「きゃあああっ！」
背後で、白雪の悲鳴が響く。
「――白雪！」
振り返ると、白雪は今の衝撃で横倒しになったパトラの黄金柩にしがみつくようにしてなんとか姿勢を保っていた。
「わ、私は大丈夫！　今のは……!?」
「一瞬見えただけだが……恐らくＭｋ　60対艦魚雷だ！　イ・ウーが撃ちやがった！」
叫びながら、ヒステリアモードの続いていた俺は被害状況を確認する。
元々パトラが自沈させようと船底を中途半端に爆破していたアンベリール号は、今ので完全にトドメを刺されたらしい。
辛うじて浮いていた船体は目に見えて沈没しつつあり、さらに下層デッキからは火炎と黒煙が上がり始めている。
致命的な浸水に、火災――もうダメだ。この船から避難しなければ。
かつて見たアンベリール号の構造図を思い出しながらの俺が、
「白雪、船尾側に救命ボートがあるハズだ！　それを下ろせー」
と命じると、白雪はうなずいてデッキの後部へと駆けていった
次の瞬間――がつんっ！

白雪が離れた黄金柩から、パトラがフタを蹴り開けて飛び出してきた
そしてビキニみたいな下着姿のまま転げ出ると、おかっぱの髪を振り乱して駆けてくる
――おっ、おい！」
「キンイチ！」
拳銃を抜こうとした俺を無視して、パトラは獣のような動きで兄さんに飛びついた。
そして黄金のサンダルを失った裸足で、うーん！　と俺を押し退ける。
「キンイチ、ああ、キンイチ……！」
涙目のパトラが兄さんの左胸に空いた銃創を押さえると、その手が青白く光り始める。
その光景から直感的に分かるが、アリアの銃創も治していたパトラは――やはり、人の傷を治す秘術を持っているらしい。
だが、その必死な表情から察するに、魔力の源となるピラミッド無しで兄さんの致命傷を治せるかどうかは分からないぞ。
――とはいえ、今はパトラを再び拘束したりしてる場合じゃなさそうだ
アンベリール号の舳先には灯が立ちこめ、その向こうではイ・ウーが微速前進で迫ってきている。その後部に突き出た艦橋から――シャーロック・ホームズが甲板に降り立ち、全長３００ｍはある原子力潜水艦を歩いて渡ってきているのだ。
（……来る……！　ヤツが……！）

やるしかない――のか

イ・ウーのリーダー、1世紀前のイギリスの英雄・シャーロック・ホームズ

ヤツの立つ伊・Uの艦名は60年前の日独の潜水艦コードネーム　艦体は30年前のロシア

――旧・ソ連から盗んだ原潜、搭載する魚雷は現代の米軍が使うMk－60。

なるほど。教科書に書いてあった通りだ、シャーロック・ホームズ卿。

あんたは「世界を股にかける男」――

いや、『時空を股にかける男』、ってとこか

ごすん……という低い音と共に、どうやら海面下でイ・ウーと接舷したらしいアンベリール号がまた大きく揺れた。

どうするつもりだ。シャーロック・ホームズ。

真っ正面から乗り移ってくるつもりなのか

だが、アンベリール号の舳先は火災を起こしている

（この炎の壁を、どうやって乗り越えるつもりだ――？）

そう思った俺の眼前を、ちら……と、何か白い物が風に乗って横切った。

炎にきらめくそれは雪石のように、角度によって輝きを変えながら宙を舞う

（……雪……？）

いや、違う。
ばらばらとその数を急速に増やしていく微細な氷は　ダイヤモンドダスト
銀氷の魔女・ジャンヌが使っていた魔術の氷が、黒煙と火炎を貫くようにして飛散してきているのだ。
俺がそれに気づいたのと同時に、煙と炎のカーテンが銀氷の渦に押し退けられる。
そして、キラ、キラ……と炎に煌めく氷霞をその身にまといながら……
彼は、現れた。

――シャーロック・ホームズ。

誰もが認める世界最高の、そして最強の名探偵、
古めかしいデザインのスーツで正装したその身体は、大柄だ。１８０はある。歳は――
どういうわけか、20歳ほどに見える。
髪はオールバックで整えており、鼻は高く、顔つきは端正だが……その印象は教科書で見た写真よりも頑健で、手強そうな雰囲気を漂わせているな。
コツ、コツ、と黒い革靴を鳴らして歩くシャーロックの背後の海面には、いつの間にか海水を凍結させて作ったらしい巨大な流氷群が艀のように浮いていた。

その流氷からは、アンペリール号の舳先まで架けられた黄金の階段がサラサラと砂金に戻っていくのが見え……砂金と銀氷が混じり合い、煌めいて彼の背景を舞っている。

その光景を見て、ヒステリアモードの俺は気づく

連鎖的に、この男のことが、気に分かっていく。

（…　そうか、そういう事か……！）

シャーロックは兄さんを兄さんの技――『不可視の銃弾』で斃した　さらにジャンヌの氷の魔法、パトラの錬金術まで使い、竜悼公・ブラドのように百年以上の時を生きている。

そのブラドやジャンヌが言っていた。

イ・ウーとは、人賦の才を持つ超人たちが集い、能力をコピーし合う場所なのだと

天才たちによる、際限なき能力の共有。

その果てには、彼ら全員の能力を兼ね備えた完成形が存在するハズだ

その『完成形』は、一番強いに決まっている。最強の存在と畏怖されるだろう

つまり、それが奴らのリーダー――シャーロック・ホームズなのだ――！

「――もう逢える頃と、推理していたよ」

シャーロックの第一声に、俺の全細胞が硬直した

なんだ――

この、雰囲気は。

カリスマとでも言うのだろうか。

この男の前には誰もがひれ伏してしまいそうな、そんな格の違いが、伝わってくる。たった、一言で。

「――卓越した推理は、予知に近づいていく。僕はそれを『条理予知』と呼んでいるがね。つまり僕はこれを全て、予め知っていたのだ。だからカナ君……いや、遠山金一君。君の胸の内も――僕には推理できていた」

試験の答え合わせをするような態度で、シャーロックは瀕死の兄さんにそう告げる。

兄さんは声にならない声で何かを言ってから――ガフッ、と喀血した。

探偵科で習った読唇術で読み取ったその言葉は、『そうかよ』――

「さて、遠山キンジ君。君も僕の事は知っているだろう。いや、こう思う事は決して傲慢ではないことを理解してほしい。なにせ僕という男は、いやというほど書籍や映画で取り上げられているのだからね。でも、可笑しいことに――僕は君に、こう言わなければならないのだ。今ここには、僕を紹介してくれる人が一人もいないようだからね」

癖なのか回りくどい言い方をしたシャーロックは、そこで一拍おいてから――

「――初めまして。僕は、シャーロック・ホームズだ」

名乗った。
そうだろう。
そうだろうな。これは本物だ。ニセ者じゃない。ヒステリアモードの直感も、そう告げている。俳優や高性能なロボットだなんて甘いオチは期待できそうにないぞ。
「アリア君」
自分を呼んだシャーロックに、呆然としていたアリアはビクッと身体を伸ばした。
そして、血族同士の眼と眼が合い
その一瞬で、一万語の情報がやりとりされたかのようなムードが流れる。
「時代は移ってゆくけれど、君はいつまでも同じだ。ホームズ家の淑女に伝わる髪型を、君はきちんと守ってくれているんだね。それは初め、僕が君の曾お婆さんに命じたのだ。いつか君が現れることを、推理していたからね」
アリアのツインテールを見ながら、シャーロックは
武装した俺たちの間に、まるで生徒に接する先生のような気安さで近づいてきた。
対し、俺の本能がベレッタの銃口を僅かに上げようとする。
「――用心しないといけないよ。鋭い刃物を弄んでいると、いつかはその手に怪我をすることになるものだからね」
シャーロックが、俺の方を見ずに、しかし明らかに俺へ向けて――警告した。

それだけで、俺の手はまた金縛りに遭ったかのように止まってしまう。
――なんだ。
なんなんだ、この男は。
これが、本物の――『偉人』か。
俺たちのような子孫じゃない、オリジナル、なのか。
「アリア君。君は美しい、そして強い。ホームズ一族で最も優れた才能を秘めた、天与の少女――それが君だ。なのに、ホームズ家の落ちこぼれ、欠陥品と呼ばれ……その能力を一族に認められない日々は、さぞかし辛いものだったろうね。だが、僕は君の名誉を回復させることができる。僕は――君を、僕の後継者として迎えに来たんだ」
「……あ……」
完全に言葉を失っていたアリアが、小さく、声を上げた。
抗うような声ではない。
再び語りかけられた事でようやく現実が認識できたような、そんな、か弱い声だ。
「おいで、アリア君。君の都合さえ良ければ、おいで。悪くても、おいで」
シャーロックが、長いコートの裾をなびかせて手を差し出す。
体をこわばらせるアリアは、普段は勝ち気なその目に何か脆弱なものを露呈させている。
「おいで。そうすれば、きみの母親は助かる」

続けられた言葉に、アリアは眦を切らんばかりに赤紫色の瞳を見開いた。
明らかに今までの――ただ愕然としていただけの表情とは違う。
今の一言で、アリアの心が一気に傾いたのが分かる。シャーロックの、方へ。
シャーロックは、『推理した通りの反応だね』とでも言うように愉快そうな顔をし
「さあ、アリア君」
古いソシアルダンスのような手つきで、アリアを抱き寄せた。
「――とかく、好機は逸して後で悔やむことになりやすいものだからね」
そしてそのまま、ひょい、と、お姫様抱っこしてしまう。
「あっ……！」
アリアは喘ぐような声を上げたが、抵抗――しなかった。
ただ、なされるがままだった。
いたわるように、アリアの背の古い弾痕を服の上から撫でたシャーロックは――くるり、
ターンして、抱き上げたアリアに眼前の原子力潜水艦を見せつけるようにする。
「行こう。君のイ・ウーだ」
シャーロックの眼前では、もうダイヤモンドダストの力で火災が収まっていて……
イ・ウーの威容が、再び鮮明に見えている。
「――キンジ……！」

ヤツの腕の中から振り返ったアリアは、混乱とも怯えともつかない表情をしている。
だが、今の状況を拒んではいない。
唐突に訪れた運命の転機を、受け入れようとしている。シャーロックのきうがままに。
「アリア君。君たちは、まだ学生だったね。ではこれから『復習』の時間といこう」
その言葉を最後に、シャーロックはアンベリール号の舳先から小川でも飛び越えるかのような気安さで跳んだ。
そして、ふわり。
長いコートの裾を一瞬だけ紙飛行機のように広げて、イ・ウーの前方に漂う流氷群へと軟着陸していく。
とても人間には飛び移れないような高さと距離を、たった一足で――
（あ……あれは……！）
今の、コートの不自然な動き。
あれは理子が髪を動かすのと同じタイプの、超能力……！
ヤツも、あれを使えるのか。
いや、それよりも――アリアが。
アリアが、イ・ウーへ連れ去られようとしている。
パトラの時も攫われたアリアだが、今回のこれはそれとは意味が違う。もっと深刻だ。

さっきシャーロックがアリアを抱き上げた時、アリアは逃げようと思えば逃げられた
少なくとも、逃げようと躁掻く事ぐらいはできただろう
だが、アリアはそうしなかった。
逃げなかったのだ。
心の底から尊敬しているシャーロック・ホームズに賞賛され、後継者にすると言われ、
そして……無実の罪で囚われている母親、神崎かなえさんを助けるとまで言われて……
逆らう理由を失ってしまったんだ　きっと。
だが、アリア。
——行くな。
そっちに行くな。
俺には分かる。なんとなくだが、分かる。
そいつは——シャーロックは、危険だ！
「アリア！」
シャーロックが遠ざかって金縛りの解けた俺は、沈没まであとわずかのアンベリール号
……その舳先からようやく叫び、叫ぶことで再認識したこの状況に歯ぎしりする。
俺は仲間を、パートナーを、奪われたのだ。目の前で、
追わなければ

だが、ここからイ・ウーの前に広がる流氷まで飛び移ることはできない。
どうすればいいんだ……！
「アリアァァ――――ッ！」
もう一度、ただ叫ぶことしかできない俺が絶叫した時。
――ドクンッ――！
身体の中心・中央に、灼け付くような感覚が巡った。
これは――ヒステリアモード……？　いや。俺は既にヒステリアモードだったはずだ。
違う。何かが違う。今回のこれは、いつもとは、何かが……！
「……シャー…ロック……バカめ。心臓を…撃ち抜いた程度で、もう、義を制したつもりか……ソ」
背後から聞こえてきた兄さんの声に、俺は振り返った。
そこでは服を引き裂くように脱ぎ捨て、暗殺者のような漆黒の全身防弾アンダーウェア姿になった兄さんが立ち上がろうとしている。
胸からの流血は治まりかけているものの、止まってはいない。
「た、立つなキンイチ！　立ってはだめぢゃ！　まだ傷は癒えておらぬ！」
その兄さんを、パトラがしがみつくようにして止めようとしている。
「これでいい――これ以上、治すな」

強く舌った兄さんは、長い後ろ髪を振り乱すように、気に解いて――身軽になるためか、そこに隠していた大鎌を背後に投棄した。

その、鋭い目つきに――

「……！」

俺は息を呑む

兄さんは、いつの間にか　再び、ヒステリアモードになっている……!?

どうやったんだ？　カナとしての自分を失い、性的興奮なんかに頼れるわけもないこの状況で、どうやって……なったんだ

その疑問に答えるように、兄さんは口元の血を拭いながら俺の横に立つと

「キンジ、覚えておけ、HSS――ヒステリアモードには、成熟や状況に応じた派生系がある」今の俺は、ヒステリア・アゴニザンテ――」

なん……だって？

ヒステリアモードの、派生系……!?

「別名を、死に際のヒステリア」瀕死の重傷を負った男は、死ぬ前に子孫を残そうとする本能があり――これは、その本能を利用して発現させるヒステリアモードなのだ」

知らなかった……そんな奥の手が、俺たちのヒステリアモードに隠されていたなんて。

でも、でも。それじゃあ、兄さん。

それは　―命と引き替えのヒステリアモードって事じゃないか！

「兄さん、やめろ……そんな、そんなにまでして戦うな！」

「止めるなキンジ。これは好機なのだ。この客船は日本船籍。その船上では日本の法律が適用される。ヤツはそこで未成年者略取の罪を犯した――これはシャーロックを合法的に現行犯逮捕できる、唯一無二の好機だッ」

「でも……！」

「覚えておけ。好機の一瞬は、無為な一生にも勝る……！」

兄さん。

そんな、破れた心臓で。

文字通り、最期の力を振り絞りながら。

あんたはそれでも立ち向かうのか。

自分の信じた、『義』のために……！

「聞け、キンジ。さっきのお前の叫び声　―あれで俺は確信した。今のお前のヒステリアモードも、もはや通常のものではない」

何……だって？

「通常のヒステリアモードは、ヒステリア・ノルマーレ。女を守るヒステリアモードだしかし今のお前は、ヒステリア・ベルセ――女を奪うヒステリアモードに変化しつつある。

目の前で……女を、他の男に奪われた事でな」

……！

「気をつけろ……ベルセは通常のヒステリアモードに、自分以外の男に対する憎悪や嫉妬といった悪感情が加わって発現する危険な物だ。女に対しても荒々しく、時には力尽くでその全てを奪おうとさえする。戦闘能力はヒステリア・ノルマーレの1・7倍にまで増大するが、思考が攻撃・辺倒になる――いわば、諸刃の剣。その状態は不安定に明滅し――制御は不可能ではないが、初めてでは困難だろう……キンジ、残念だがこれ以上の警告をしている時間はなさそうだ。船体があと1m沈んだところで跳ぶぞ――合わせろ……！」

驚きの連続に目を見開いていた俺は――

兄さんのセリフ、その最後の一言に、さらに目を見開いた。

「兄、さん……!?」

何年も前……俺は兄さんに『一緒に戦いたい』とせがんでいた時期がある。

だが、兄さんが俺とパートナーを組んでくれたことは一度もなかった。

それは、実力差がありすぎて足手まといだと判断されたから。

だから先月アリアを殺害しようと持ちかけてきた時も、兄さんは俺を誘き寄せ役か何かに使うつもりだったはずなのだ。

だが、今、兄さんはハッキリと言った。

合わせろ、と。

「――シャーロックは、俺1人では倒せない　お互い1人でも無理だ　だが、2人なら……ヒステリアモード2人掛かりでなら、可能性が、ある！」

武偵と武偵がパートナーを組むには、双方の合意が求められる。

これは武偵法にも記載されている、武偵の大原則だ。

兄さんは今、初めて――俺を信頼し、共に戦う合意の意志を明示してくれたのだ

――報いたい……！

その信頼には、報いたい。たとえそれが、最初で最後なのだとしても

そう思うと俺は、あれだけ竦んでいた全身に新たな力が漲るのを感じていた

アンベリール号は間もなく、一番近い流氷まで飛べそうな高さにまで沈みつつある

出エジプト記14章21節――主は海を退かせ、海を陸地とされ、水は分かれた！か」

兄さんが呟いた聖書の一節のように、イ・ウーはまるで海水をかき分けて洋上に現れた広大な道のように見えた。

その道を通って、今、アリアが連れ去られようとしている。

「……行くぞキンジ！　まずはアリアを救助し　」

絶対に仲間を見捨てない兄さんが、流氷へ飛び移る構えを見せる

「――シャーロック・ホームズを、逮捕する！　続けッ！」

叫んで、兄さんは超人的な跳躍力で飛翔した。
兄さんの名を泣き叫ぶパトラの声を背に――俺も跳ぶ。
ヒステリアモードの、今身全霊で――！

兄さんと俺は、イ・ウーへと続く流氷に飛び移った。
俺たちの足元から、降り積もった氷の結晶がスキーのように巻き上がる。
（シャーロック……！）
視界の向こうには、アリアを抱えてイ・ウーの甲板を歩くシャーロックの背が見える。
遠い。かなり離されてしまっている。
周囲にはダイヤモンドダストの吹雪が吹き荒れ、足元は銀氷の雪原と化している。
……ギシ……ギシッ……！
足元から、巨大な流氷同士が触れ合って軋む音が響き渡る。
なんて――魔力の規模だ、シャーロック・ホームズ……！
あっという間に霜の降りてきたベレッタを手に、俺は歯ぎしりした。
――恐れるなキンジ！　こんな氷はサーカス芸に過ぎんッ！
僅かな弱気すら許さないという感じに、兄さんが一喝してくる。
俺たちには拳銃がある！　完全被甲の弾丸が、秒速３００ｍの亜音速で目標を撃破する

拳銃こそが、人類が編み出した至高の近接戦器。そしてその拳銃をこの世で最も有効に使いこなせるのが、ヒステリアモードなのだ！」

叫んで、兄さんが疾風のように駆け出した。

その胸と背から流れ出た鮮血の量が、刻一刻と増しているのが見える。

（――兄さん――――！）

俺は弱気を振り払い、その背に続いた。もう、無心になって。

微細な刃物のようなダイヤモンドダストをかき分け、顔面や指先に傷を作りながら――駆ける！

（アリア！）

吹雪を突っ切り、流氷を渡り切り――

俺と兄さんは、イ・ウーの黒い甲板上へと到達した。

シャーロックはアリアを抱いて、甲板から突き出た建物のような艦橋へと歩いている。

「――シャーロック！」

叫んだ兄さんの前方、身体の中心・中央でマズルフラッシュが一閃した。

『不可視の銃弾』――――！

ギインッ！

シャーロックの背後10メートルほどの距離で、その銃弾が火花を上げて弾かれる。
あれは――『銃弾撃ち』――
俺たち遠山兄弟の銃技を、シャーロックが使った。
それ自体に驚きはしなかった。兄さんがイ・ウーにいた以上、シャーロックがその技を使えるのは想像できた事だ。
だが、今の『銃弾撃ち』は銃が全く見えなかった。
つまりヤツは『銃弾撃ち』を『不可視の銃弾』で――1つだけでも極めて高度な集中力を要する技を、2つ同時にやってのけたのだ。しかも、こっちに背を向けたままで。
凄い。超能力だけじゃない。銃技でも……俺たちの上を行くというのか。アイソは。
――だが！　だが恐れはしないぞ。俺たちは2人だ。
ヒステリアモードを、ナメるな――！
「キンジー」
「――分かってる！」
兄弟の息はピッタリ合う。言葉は要らない。
俺には兄さんが何を命じたか、以心伝心していた。
閃光と発砲音に続いて、兄さんの2弾目がシャーロックめがけて翔ける

それが再び、ヤツの背後で火花を散らして弾き返された時
（――これで、どうだッ！）
烈火を噴いた俺のベレッタが、その銃弾を更に弾いてシャーロックに向けた。
N字を描いて宙を駆けた弾丸は――
――ギインッ！
と、三度目の火花を、空中に散らす。
ふ、防ぎやがった……M字状に……！
愕然とする俺に、シャーロックは――半分だけ振り向いて、微笑した。
そしてアリアを抱いたままの右腕を少し上げ、チッチノチ、と人差し指を左右に振る。
「――ソ！」
俺の頭の中で、何かがキレた。
それとほぼ同時に、パパパパッ！　と兄さんの前方で閃光が4つ連なる。
今度は4連撃の『不可視の銃弾（インヴィジブル・ファンショット）』――！
加えて兄さんは前もって宙に6発バラ撒いていた銃弾を空中でリボルバーに再装填し、同時に6連射した。
さらに、隠し持っていたもう一丁のコルト・ピースメーカーの6連射も加える。
もはや神業とも言える16連撃の『不可視の銃弾』が、同時にシャーロックを襲った。

しかし――ギギギギンッ！

その全てが、空中で火花と金属音を上げる。

全弾、防御されたのだ　――同じ16連撃の、『銃弾撃ち』で！

「うおおおおッ！」

ヒステリアモードの反射神経は、俺の思考よりも先に長弾倉を挿し替えていた。

フルオートに切り替えたベレッタで、宙に散った無数の銃弾を兄さんと共に弾き返す。

『銃弾撃ち』だけでなく、ヤツが発砲した光源――銃口の位置を狙う新技・『鏡撃ち』も織り交ぜてやるが、その攻撃も全て、シャーロックの銃弾で防がれていく。

――ビリヤード、ビリヤード、ミラー、ビリヤード――！

見る間に、イ・ウーの甲板上では32発　64発――１００発を超える拳銃弾が激突し合い、無数の火花を二次元的に展開させていく。

名付けるなら、『冪乗弾幕戦』――！

史上初の『銃弾の弾き合い』による射撃の応酬戦だ。

更にこの間、俺たちは黒金の甲板をシャーロックめがけて駆けていた。

詰まっていく敵との距離。累乗数的に増えていく空中の銃弾。それを視覚的に処理しなければならない時間が、コンマゼロ1秒ずつ縮まっていく。まさに一瞬の油断が命取り視界は、銃弾のハリケーン、その暴風域、ど真ん中に、俺たちはいるのだ。

なんて戦いだ……！　これがイ・ウー――俺たちが今、いる場所か。
全力のヒステリアモード、その上を行くというヒステリア・ベルセでさえ限界になりそうだ。
その人ならざるレベルの銃撃戦――そして初めて見る阿修羅のような兄さんの姿に、アリアが、目を丸くしているのが見える。
悪かったな、アリア。こっちの兄さんを、秘密にしていてだが、その事を謝るのは後にさせてもらうぞ。
それより先に――
（今、そこまで、行くッ！）
叩きつけるような俺の想いを感じたのか、シャーロックは体を捻るようにしながら跳び上がった。7mはある艦橋まで、たった一足で。
兄さんと俺の発砲が、同時に止まる。
反転したシャーロックの腕には、アリアがこっち向きに抱かれている。
今撃つと、アリアに――当たる！
「――!?」
そのシャーロックの動作に、俺は眉を寄せた。
シャーロックが、アリアの両手をそっと動かして耳を塞がせたのだ。

ヤツのスーツのネクタイが、ビリビリと破けていく。シャツのボタンが弾け飛んでいく。まるでバルーンのように――ヤツの胸部が、膨らんで……いる……？

「――！」

あれは！

竜怪公・ブラドが横浜で見せた――『ワラキアの魔笛』――！

イェアアア

ヒステリアモードは――この、戦の命綱なんだ！

……そして、大音響がピークを越えて弱まり始めたのが分かり……俺は急いで、自分の血流を確かめる。

血の流れは……よし……大丈夫だ！　ヒステリアモードは解けてない。

ブラド戦で一度経験していたおかげで、防御が間に合った。

シャーロックの『ワラキアの魔笛』――乗り切ったぞ！

だが、振り向いた俺は気づく。

（……！）

兄さんが、耳を塞いでいない。

両耳から血を流し、シャーロックに向けた手を鈎爪のように曲げて立ち止まっている。

兄さんは――『ワラキアの魔笛』を喰らった事がなかったのだ。

不意を突かれた一撃に、何の防御もできなかった兄さんは――パトラに敢えて不完全な治療しかさせなかった胸の貫通銃創からも、再び鮮血を激しく溢れさせている。

そして――分かる。

兄さんは、最後のヒステリアモードを、解かれてしまっている！

「兄さ……！」

慌てて振り向いた俺を、

「キ……キンジー！　――避けろッ！」
兄さんが、飛びかかるように突き飛ばしてきた。
（――っ？）
俺が、目を見開いた刹那。
さっき俺の心臓があった位置、今、兄さんの心臓がある位置を――ビシュッ!!
弾丸が――
血の尾を引いて、通過していった――
「……！」
ぶつかるようにして倒れてきた兄さんを、俺は必死に支える。
ああ……！
兄さんは、予測していたのだ。
兄さんの負傷に気を取られた俺が撃たれ、斃されてしまうことを。
そして、ヒステリアモードを失った兄さんは『銃弾撃ち』での防御を放棄し　――自分の体を、俺を守るための犠牲にした……！
再び心臓を撃ち抜かれて、それでもピースメーカーを艦橋に向ける兄さんだが――
もう、そこにシャーロックの姿は無かった。
「……キンジ……追え……！　ヤツは、艦内に……に、逃がすな……ッ！」

俺に肩を貸されながらの兄さんが、赤黒い血を吐きながら命令してくる。
「兄さん……！　あんたを置いてなんか……！」
という俺の言葉を遮るように、兄さんは――笑った。
「フッ……お、お前ごときに、心配されるとは……俺も、ヤキが回ったな……」
そして、長髪の内側に隠し持っていた9ミリ径の銃弾を――2発、手渡してくる。
「『銃弾撃ち』で撃ち落とされない戦闘で、使え……！」
ハーフムーン・クリップから外した、その白と黒に着色された銃弾は――
（……武偵弾……！）
初めて見るが、刻印から見て間違いない。D・A・L（Detective Armed Lethal）――通称、武偵弾だ。
武偵弾とは、発、発が多様な特殊機能を秘めた、強化弾　銃弾職人にしか作れないため高価で希少な、超、流の武偵にしか流通しない必殺兵器だ。
「キンジ、行け　攻めろッ……！　俺達はここまで来た、来て、しまったのだ……！」
ゴホッ！　と兄さんは血を吐きながら、俺の袖を掴む。
「俺は初めて、お前に理屈の通らん事をぎっているのかもしれん……この原潜に、たった1丁のベレッタで、たった1本のナイフで挑め、と……！　だが、キンジ――人生には、理屈を超えた戦いをせねばならない時がある……！　今が、その時だ！」
兄さんは、半ばムリヤリ俺をイ・ウーの艦橋に正対させた。

それでも振り返ろうとする俺の頭に、活を入れるように……
「――振り返るなー」
ガスッ！
先祖代々石頭の遠山家が最後に使う隠し技――頭突きで、活を入れてくる。
「キンジ……！　もう、振り返るな……！　行け……！」
兄さんが――命じている。
命じて……任務を、俺に託そうとしている。
俺は――目を閉じた。振り返るな。そう、兄さんに命じられた事を守るように。
「兄さん――」
そして再び目を開き、イ・ウーを睨み付ける。
行け！　そう、兄さんに、命じられたことを守るために。
「――死んだら、あんたの弟をやめるからなッ！」
俺の叫びに、兄さんが小さく笑うのが聞こえた。
「それなら、キンジ。お前は――ずっと、俺の弟だ」
艦橋の側面にあった梯子をよじ登り、開け放たれていた耐圧扉に飛び込み、ベレッタを構えて螺旋状の階段を駆け降りた俺は……

イ・ウー――

その表玄関ともいえる、劇場のように広大なホールの光景に目を奪われた。

なんだ……これは……

おそらく最下層から最上層までのデッキをブチ抜きで作ったと思われる高い天井から、磨き上げられた大然石の床を、巨大なシャンデリアが照らし出している。

その床には……暴君竜ティラノサウルス、剣竜ステゴサウルス、角竜トリケラトプス、首長竜プレシオサウルスといった恐竜の全身骨格標本が聳えている。

周囲の壁には天井まで届く巨大な木製の棚に、人間よりも巨大なオオシャコ貝や海亀の甲殻、ジュゴンやイルカ、ライオン、虎、狼、そして図鑑でしか見た事のない数多の絶滅動物の剥製が――恐らく、学術的な意味を持って――並べられている。

これが、潜水艦の中だっていうのか。

信じられない。ここの装飾だけでも、１００億か２００億の価値はあるだろう。

まるで、博物館か美術館のような……いや、これは、宮殿。海の魔宮だ。

（……？）

ホールに降り立った俺は化石の脚に身を隠しながら移動しつつ、眉を寄せる。

誰も……いない。イ・ウーのメンバーによる迎撃がない。

ここはヤツらの拠点だというのに。

しかし、細かい事を考えているヒマはない。不在なら不在で好都合だと、改めてホールの壁面を見回すと――一つの扉が、自動的に開いていくのが見えた――来い、って事か。

アリアはどこだ

扉の向こうにあった螺旋階段を駆け下り、生きたシーラカンスや色とりどりの熱帯魚を入れた水槽が並べられた暗い部屋を抜ける。その先は、太陽灯で眩しく照らされた植物園だった。孔雀が歩き極彩色の鳥が飛び交うそこも駆け抜け、金・銀や宝石を含む世界中の鉱石を陳列した広大な標本庫も突っ切る。

アリアは、どこだ。

長い布のタペストリーや革表紙の本が並ぶ広大な書庫、黄金のピアノと蓄音機の並んだ音楽ホール、中世の武器やら甲冑やらが集められた小ホール、金の延べ棒と各国の紙幣が山積みにされた金庫……ありとあらゆる部屋を、俺は駆け抜けていく。

だが、数々の部屋はこれだけ多彩なのに――なぜか同じ匂いをグルグル回っているような錯覚に襲われる。もう何分も全力疾走している。息が切れてきた。

アリアは――どこだッ！

とうとう息が上がり、上を敷き詰められた部屋で膝を突いた俺は――

出口の見あたらないそのホールで、途方に暮れるように周囲を見回した。

（……？）

そこはまたしても広く、奇妙な部屋で――

正面の壁には巨大な油彩の肖像画がかけられ、それぞれの絵の前に石碑、十字架、六芒星の碑などが一つずつ並べられている。

一番左に掛けられている肖像画は古い軍服を着た凛々しい日本人で、『大日本帝國海軍超弩師団長　初代伊U潜水艦長　昭和拾玖年捌月』の添え書きが読み取れた。右隣には、逆ナチの徽章を付けたドイツ軍人の肖像画がある。

肖像画は右へ行くにつれ新しいものになっていき、次第にアフリカ系の女性、車椅子の中国人、雄々しい髭のアラブ人など、多様さを増していく。

ここは、恐らく……歴代のイ・ウー艦長の、墓地だ。

その考えを裏付けるように、一番右にはシャーロックの肖像画が　描きかけのまま、飾られてあった。

――なるほど。何となくだが、イ・ウーの来歴が分かった気がするぞ。

イ・ウーは初め、戦争のために作られたのだ。超人兵士を育成し、敵国に勝つために。

肖像画の日付から見て、創設されたのは第一次世界大戦中の事だったのだろう。初代と二代目の艦長が日本人とドイツ人……という事は、枢軸国の共同計画。イ・ウーでは日本

語・ドイツ語が共通語だとジャンヌが言っていたのも、その名残だったのか。
イ・ウーは戦後、潜水艦という特長を活かして逃亡し――独自の価値観に基づいた秘密結社になった。代替わりしていく軍団長を『教授（プロフェッサー）』と呼び替え、古くなった潜水艦を乗り替え、今――シャーロックが、その結社を乗っ取っているのだ――
そんな……戦争の亡霊みたいな組織に……！
（仲間（アイツ）を、奪われてたまるかよッ！）
俺が再び両脚（りょうあし）に力を込めて立ち上がると、シャーロックの肖像画の裏側から……
微（かす）かな、何かの物音がした。
その音から、ヒステリアモードの耳が絵の向こう側に空間があることを感じ取る。
肖像画に歩み寄った俺は、バタフライ・ナイフを開き――ザクッ、ビリビリ……ッ！　と、キャンバスを引き裂いた。
肩のフラッシュライトで照らした絵の向こう側には……隠し通路と、そこに繋（つな）がる下（くだ）りのエスカレーターが見える。
何となく分かる。
俺は近づいている。
――アリアと、シャーロックに……！

隠し通路を抜けて辿り着いたそこは……教会、だった。

イ・ウーの内部に、大きな聖堂があったのだ。

大理石の床には見渡す限りラテン語の文字がビッシリと彫り込まれてあり、椅子は無い。

石柱や天井画の様子から見て、これは　－カトリック・ネオゴシック様式の聖堂だろう。

一瞬、我を失いそうになるほど美しい空間だ。イギリスではプロテスタントが主流のはずだが、これは現艦長のシャーロックも改修をためらっただろうな。

何かの儀式の準備だろうか。壁際や側廊には生花を生けた白磁器の壺が飾られていて、その美しさを一際高めている。まさに、聖なる場所というムードだ。

奥の後陣には、この空間で唯一の光源……複雑なステンドグラスが、高く聳えている。

そしてその下に――

「……アリア！」

アリアが、こちら側に背を向けて膝をついていた。

懺悔の祈りを捧げるような姿勢をしていたアリアは、俺の声に振り返って立ち上がる。

「……キンジ！」

ピンクブロンドのツインテールをなびかせたアリアに、俺は駆け寄る。

そして、その制服の小さな両肩を両手で掴んで引き寄せた。

――よかった。傷つけられてはいないようだな。

「どうして来たの、キンジ……」
「理由がいるのか」
身長差のせいで見上げるようにしてきたアリアに一言だけ応え、俺は周囲を見回した。
が、シャーロックの姿は無い。
「シャーロックは……紳士ぶってるつもりなのか。人質のお前をこんな所に放すなんてな。だが、合流できたのは好都合だ。一旦移動して、態勢を――」
と言いかけた俺から、つっ――と。
アリアが一歩、退いた。
「……どうした、アリア」
「帰って」
……？
……帰って……？
聞き間違いかと思って眉を寄せた俺から、さらに一歩退いたアリアは――
「キンジ、帰って。今ならきっと、まだ逃げられるわ」
片手を自分の胸の前でゆるく握り、そう繰り返した。
「帰れ……って何だ。お前はどうするんだ」
「あたしは、ここに残る。これから……ここで、曾お爺さまと暮らすの」

なん……だって？

イ・ウーで、シャーロックと暮らす？

「おい……！　なんでだよ……！」

俺がアリアの方に踏み出そうとすると――

アリアは、さらに後ずさった。

「……あんたには分からないでしょうね。今の、あたしの気持ちなんか……」

とうとう、その赤紫色の瞳にハッキリと拒絶の色を込めながら――

「あたし、あんたに……ホームズ家でのこと、全然話してなかったもんね。あのねキンジ、貴族には……一族が果たすべき役割を、正しく果たすことが求められるものなの。そうでなければ、存在することが許されない。まるで、いないように扱われる――」

アリアが、壊れ気味の薄笑いを浮かべる。

「あたしは卓越した推理力を誇るホームズ家で、たった一人、その能力を持ってなかった。だから欠陥品って呼ばれて――バカにされて、ママ以外のみんなから無視されてきたのよ。あんたもなんとなく勘付いてたんでしょう？　あたしは……あたしはっ、ホームズ家にはいないものとして扱われてきたのよ！　子供の頃から！」

聖堂に響いた甲高い声に、俺は……

一学期の初め、俺につきまとうアリアの素性を理子に調べさせた時のことを思い出す。

『アリアは「H」家の人たちとはうまくいってないらしい』

あれは、そういうことだったのか。

ホームズ家の欠陥品、アリア――

「それでもあたしはずっと、曾お爺さまの存在を心の支えにしてきたの。世間では名探偵という一面だけが持ち上げられてるけど、彼は、武偵の始祖でもあるわ、だからあたしは曾お爺さまの半分でも名誉を得ようと思って――武偵になった」

キリスト像に背が触れそうなくらいに後退したアリアが、制服の胸ポケットを押さえる。そこに収めた武偵手帳――その中のシャーロックの写真を、示すように。

「あたしにとって、曾お爺さまは神様みたいな人よ。信仰の対象といっても構わないわ。その彼が、まだ生きていて……あたしの前に、現れてくれた。その気持ちが分かる？　その曾お爺さまが、あたしを認めてくれた！　ホームズ一族のできそこないって呼ばれたあたしを、後継者とまで呼んでくれた！　あんたに……あたしの、この気持ちが分かる？　――分かるわけないわ！」

さっき……

シャーロックに囚われたアリアが無抵抗だった辺りから、なんとなくイヤな予感はしていたが……どうやら、それは正しかったようだな。

俺は心の中で舌打ちした。

シャーロック・ホームズは――アリアにとっての、カリスマなのだ。かつての俺にとっての、兄さんのような。

シャーロックが言うこと、することは、アリアにとって何でも正しい。

何を言われても従うし、何をされても受け止める。そういう、絶対的な存在――

だが……

だがな、アリア。

「アリア、冷静になって考えろ。かなえさんに無実の罪を着せたのはイ・ウーなんだぞ。シャーロックは、そのリーダーだったんだ」

母親の名を出されたアリアは、胸が締め付けられるような顔をして――

それでも、眉を吊り上げてこっちを睨んでくる。

「ママの事も……もう解決するのよ。曾お爺さまはイ・ウーをあたしに下さると言ったわ。そうなれば、ママは助かるの。ここにはママの冤罪を晴らす、あらゆる証拠が揃ってる。なぜイ・ウーがママを陥れたのか――その理由を知るためにも、あたしはここに残るの。きっと、筋縄じゃいかない裏があるのよ。この事件には……！」

「アリア……それじゃあお前、本末転倒じゃねえか！　イ・ウーはお前の敵だぞ！　その員に、お前がなるなんて――」

「じゃあ何!?」

命切り声を上げて犬歯を剥いたアリアは、イ・ウー全体を示すように両腕を広げた。
「じゃああんたは、このイ・ウーを力尽くで東京までしょっぴけるとでも思ってるの？　それは不可能なのよ！　曾お爺さまが、この艦のリーダーだった時点で！」
「アリア……！」
「この際だからハッキリ言っておくけどね　シャーロック・ホームズを甘く見てはダメよ　曾お爺さまは、ただの天才じゃないわ　強い　強いの。歴史上、最も強い人間なのよ！　たとえ今、あんたが裏人格の方のあんただったとしても、かないっこないの　キンジ……分かって……あんたじゃ、ムリなのよ！」
テコでも動かなさそうなアリアに　―俺は、一つ、長い瞬きをした。
……ああ、そうかよ
シャーロックは、絶対の存在。母親の事も、これで解決する
本気でそう思い込んで、そんな事を言ってんなら――
俺も、もう歯に衣着せずにぶつけてもらうぞ。
思ってることを、洗いざらい、全部……！
「『ムリ、疲れた、面倒くさい』　俺と会った日に、アリア。お前言ったよな」
「……？」
「『この3つは人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる、良くない言葉』だって」

「……」

「いいかアリア、それなら俺もハッキリ言ってやる。こいつらなんざ、ただの海賊だ！　お前の曾爺さんは長生きしすぎて、ボケて、その大将なんかをやってんだよ！」

叫んだ俺に、アリアは――

「……曾お爺さまを……侮辱してはダメっ……！」

もういっぱいいっぱい、といったカンジに月をきつく閉じた。

ああ――あの時と、逆になっちまったな、アリア。

先月、お前を半殺しにしたカナを俺が庇って――ケンカになった時と。

俺は見逃さないぞ、イ・ウーを。武偵として……！」

「いっ、今さら！武偵ぶらないで！」

アリアは見開いた赤紫色の瞳と長い睫毛を震わせ、怒りに任せて叫び返してくる。

「あんた元々、イヤがってたくせに！　武偵なんか辞めたいって言ってたくせに！　もう、とっとと帰って――武偵なんか、辞めちゃいなさいよ！　あんたこの間、あたしの背中に傷痕があるのを見たんでしょう？　あれは撃たれたのよ、13歳の時に、何者かに突然！

あれはきっと武偵としてのホームズ家に恨みを持つ犯罪者の犯行で――その時の弾丸は手術でも摘出できない位置に埋まっちゃって、今もまだあたしの体内にあるわ！　そういう危険な目に家族や子供までが遭う――この世で最も危険な仕事なのよ、武偵は！

だからキンジ、もう帰って、武偵なんか辞めて……あたしのことなんか、忘れて……っ。あたしはもう、これでいいの。もう、これで……！」

その眼から熱い涙をこぼし始めたアリアを――

俺は、ただ、まっすぐ見つめていた。

「……お前の言うとおり、俺は武偵なんか辞めたいさ」

「……」

「だが不本意ながらとはいえ――今はまだ、武偵だ。お前と俺は武偵と武偵。そしてパートナー同士だ。武偵にとって、パートナーの失策は自分の失策でもある。お前が敵に寝返ったのを見て、ハイそうですかって帰るワケにはいかねえんだよ」

普段のヒステリアモードなら……俺は……

こんな、泣いてるアリアをさらに追い詰めるような事は言わないだろう。

これは……兄さんが警告した、ヒステリア・ベルセの攻撃的な血の影響なのかもな。

「――もう、パートナーなんかいらないわ！」

アリアが、聖堂にアニメ声を響かせる。

「あんた　――ずっと、あたしのパートナーやるの嫌がってたくせに！　何よいまさら！　ムリヤリ、あたしのこと、パートナーだなんて……！」

「お前もムリヤリだったろ。俺をパートナーにした時は」

俺は退かない。拒絶されればされるほど――
ヒステリア・ベルセの血らしきものが、濃くなっていくのが分かる。
腹の奥の方から、獰猛な感情が湧いてくる。アリアに対して。
「――武偵と武偵がパートナーとして行動をする際には、双方の合意が求められる　だが今の俺たちにはそれがない。だから　-俺はお前の合意を取り付けるぞ。力尽くでもな」
「……力尽く……ですって？　あたしを、力尽くで……どうするつもり」
「奪う」
「……！」
「お前のパートナーは、俺だ。シャーロックじゃない。だから奪い返す」
頭に血が上ったのか、かあああノ、と顔を赤くしたアリアは――
「……こう……なる予感、少し、してたわ」
眉を吊り上げて、その両手を制服の短いスカートに伸ばした。
「……だから、口で説得しようと思ったのよ　あんたを傷つけたくなかった」
「ハッ――冗談はよせ、アリア。俺が、お前に負ける前提かよ」
俺はアリアに笑ってみせる。
「その辺、お前には教育が必要そうだな――おちびさん　イ・ウーで超人になるお勉強の前によ」

溜息をつくフリをしながら、俺は……
ベルセの血流が体の真芯に集まりきらないよう、制御を試みていた。
これから何が起きようと、アリアを不必要に傷つけることがないように――と。
そして、その制御は……うまくいきそうな気がする。初めての体験だからか、ベルセの血はどこか戸惑うようで……今回は何とか抑えが効きそうなのだ。半分ぐらいは
「――い、言ったわね……？　あたしを侮辱した。もう、取り消せないわよ」
「取り消さないさ」
ああ――アリア。
俺たちが普通の高校生の男子と女子だったら、この日ゲンカでおしまいだったろうなだが、武偵高の生徒は違う。
その続きがあるんだ。
「風穴あけるわよ、今度こそ、本当に」
「ナメるな。風穴あけるのは、こっちだ」
――ああ、普通じゃない。
自分もベレッタに手を伸ばしつつ、俺は心の中で呟いた。
ウンザリするほど普通じゃないんだよ。武偵高は。
武偵高でのケンカじゃ、拳銃が出る。

俺とアリアの間でもそれは例外じゃない。最近なれ合い気味になって忘れかけてたが、初めて会った時から……俺たちはこうだったんだ。『武偵殺し』のチャリジャックの後、お前は俺に体育倉庫で犯罪容疑をかけて――いきなり撃ちかかってきたんだからな。

それにしても、皮肉な話だよ。

あの時はお前が俺を追い回してて……今は俺がお前を追ってる、なんてな。

「――2回目ね、あんたと戦るのは」

同じ事を思い出していたらしいアリアが、俺を睨み付けてくる。

「あの時は逃げたけど、今日は逃げないぜ」

俺も、睨み返す。

武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ――か。

これも皮肉な事だが、その本当の意味が……仲間割れして、初めて分かった気がするよ。

仲間っていうのは、ただ相手の言うことを聞いてやるだけの関係じゃ成り立たない。

仲間が道を誤りそうな時には、ぶん殴ってでも止めてやることが必要なんだ。

そしてその時、ぶん殴り返されてやることも。

「先に抜けよ、アリア」

――アリア。

俺はお前を守る。

守るために、倒す。
そういう守り方も、あるんだ。
「あんたが先に抜きなさい」
「レディーファーストだ。抜け」
俺が言うと同時に――
――ガガンッ！
アリアが遠慮無しにスカートを翻し、月にも留まらぬ速さで発砲してきた！
その小さな手に握られているのは、さっきアンベリール号で俺が渡した二丁拳銃。
白銀と漆黒の、ガバメント。
「――――」
俺は2連射モードに切り替えたベレッタの『銃弾撃ち』で応戦する。
ガバメントの.45ACP弾は、ベレッタの9ミリパラベラム弾より運動エネルギーで勝る。
その力で押し切られる計算になるから、拳銃破壊技の『鏡撃ち』で、気に決着、というワケにはいかないのだ。だから初弾は『銃弾撃ち』で弾いて防御する。
俺たちの間から四方に弾け飛んだ銃弾が、室内に飾られていた花を飛び散らせた。
――ダッ！
その花びらが宙を舞う中を、アリアが駆ける。

中距離の拳銃戦では、相手の利き腕を外側に開かせた方が有利になる　その定石通り、両利きのアリアは右利きの俺の右側に走った。

ばんっ！　とアリアが側宙を切り、上下逆様になった状態からの射撃で攪乱してくる、俺は跳躍して弾丸を躱し、回転受け身を取り、反撃しようと銃口を向けるが――

着地したアリアはそのままスライディングするような姿勢で発砲し、さらに両肘を振り上げ、背中で床を滑るようにしながらも撃ってくる。

回避と同時に攻撃してくるアリアの動きは完全に我流で、非常に変則的だ

次にどこから撃ってくるのか、全く分からない

戦りにくいぞ――最悪に。

だが……飛び散る花びらの中を舞うように駆けるアリアを見て、俺は気づく。

アイツの動きを予測するヒントがある。

――髪だ。

あの長いツインテールが、アリアの動きを追って空中に線を描いているのだ　新体操の選手が使う、リボンのように

そのおかげで、アリアの運動パターンが読める

さっき聞いたが、あれはシャーロックが子孫に指定した髪型だとか。爺さん、あんたは何でわざわざあんな戦闘に不利な髪型を命じたんだ、趣味か。

聖堂を、周しつつ攻撃してくるアリアに対し、その動きが読めるようになってきた俺の反撃が精度を増していく。アリアの表情に『バレたか』という色が混ざるのも見える。

そしてとうとう、俺の銃弾がアリアのガバメントを掠め始めた。

見切ったぞ、アリア。お前の動き。

悪いが、やはりヒステリアモードは天下無双だ。決着は——時間の問題だろう。

ステンドグラスを背にしたアリアは、とうとう走るのをやめて俺と撃ち合いを始めた華麗な片手突きバク転で躱された俺の銃弾が、ステンドグラスを一部分破壊する。

防戦一方になったアリアがそれでも動き回るのを追って、俺の銃口が閃光を連ねる。

バリンッ！　バリンッ！　と、ステンドグラスが一部、また一部割れていく。

そして、大理石の祭壇の裏に隠れたアリアが……おとなしくなった。

「惜しかったわね、キンジ」

アニメ声で言われて……

俺は、ようやく気づく。

周囲が、赤く——緋色に、なっている。

照明の色が変わっているのだ。いつの間にか。

（ステンドグラス——）

ハッ、と俺が見た色とりどりのガラスは……

赤い部分だけを残して割られていた、俺の、銃弾に。
アリアはチョコマカと逃げ回りながら、俺の射撃を誘導していたのだ　こうなるように。
――しまった
と舌打ちした瞬間、ダッ！
アリアが祭壇の陰から真横に飛び出した　また、右に
だが、俺の眼はその動きをすぐには追えない
アリアのツインテールに注目しても、その髪は赤い光の中で保護色になっている
見えないわけじゃないが、さっきほど明瞭には見えない
さらに、今まで曲線的な動きを見せていたアリアは　――突然、L字にターンし　今度は一直線に飛びかかってきた。
マズい――！
（――近接拳銃戦――！）
アリア
さすが、お前はSランク武偵だな　戦いながら自分に有利な環境を作り、こっちの感覚を狂わせて、最後は自分の一番得意な零距離戦に持ち込んできやがった。
などと感心する暇もなく、俺とアリアは――
バッ！　バババッ！

一気に詰まった距離から、銃弾を放ち合った。
近接拳銃戦は、銃を使った格闘技。防弾服の着用を前提に、手足による打撃技に零距離射撃を併用する格闘戦だ。
同時に身体を捻り、踊るように初弾を躱し合った俺たちは――
お互いの腕が交錯し合うような間合いまで、一気に接近した
俺の腕をアリアが肘で弾き、アリアの手を俺の掌底が弾き、互いの銃口を自分から逸らさせる。逸らされながらも閃くマズルフラッシュが、光の短剣のように閃ぎ合う。
一丁拳銃の達人を相手に、ベレッタ一丁の俺は――
（……チッ……！）
圧され始めた。ヒステリアモード、なのに。
とっさにバタフライ・ナイフを左手で開いて防御範囲を広げたが、それも付け焼き刃にしかならなさそうだ。
「――キンジ！　どうして!?」
その場で片脚バック宙を切ったアリアが、俺の顎を蹴りにかかった。
ストラップシューズの爪先が、上体を反らして躱した俺の鼻先を掠める。
拳銃を持ったまま片手で着地したアリアが、その手を軸に回転する芸当を見せながら、その回転を活かして俺の頭部に2連蹴りを叩き込んでくる。

「キンジ！　どうしてあたしをバカにするのー」
さらにアリアは着地とほぼ同時に跳びかかってきて、よろめいた俺の右肩に小さな肩をぶつけながら、そこを支点にして――ぐるり。
広げた両脚を振り子のようにして側転を切り、俺の背後に降り立った。
ふわ。
硝煙のニオイに混じる、クチナシのような香り
そのアリアの香りに、初めて――言いようのない、恐怖感が湧く。
――双剣双銃のアリア――
なんて身軽で、三次元的な戦い方をする奴なんだ。
「――！」
背後を取られた俺が振り返ると、アリアは腕を水平にクロスさせるような形にして――俺に銃口を向けていた。
その指は今まさに、トリガーを引こうとしている。
反撃が　－
（――間に合わない――）
ヒステリアモードの反射神経が、それを直感で悟った。
拳銃を突き出すまでなら間に合うだろうが――

トリガーを引いて発砲する、刹那の時間が足りない。
どうする。
あの大口径弾を2発まとめてブチ当てられれば、俺は確実に戦闘不能に陥るだろう。
だが、そうはいかない。今、この瞬間に、発砲抜きで――
なんとかするんだ！
――ツー――
――ガチィッ！
という音が俺たちの中間2箇所から上がった。
アリアが……撃ってこない。
いや、撃てないのだ、
俺は……
ベレッタの銃口を、白銀のガバメントの銃口に突きつけていた。
漆黒のガバメントの銃口には、ナイフの先端を突き刺すように当てている
どっちも、撃てば――アリアの銃が自損する。まあ、それは俺も同じだけどな。
この形になった以上、2人は2人とも動けない。
こいつは将棋やチェスで言えば、『千日手』みたいな状態。どっちも、次の一手が打てないのだ。たとえ千日経っても。

つまり、引き分け。

ほんの少しでも素早く対応しなければならなかった俺は、右手の重いベレッタを左側、軽い左手のバタフライ・ナイフをより移動させて右側に突き出していた。

俺の両腕は交差するようにクロスされ――同じくクロスしたアリアの両腕と、合わせて4本の腕がXXの形を描いて――静止、している。

「どうして……あたしをバカにするの、キンジ」

アリアが、俺を上目遣いに睨んできた。

「あんたの弾丸は――あたしの銃ばっかり、狙ってた……！」

辱めを受けたような表情をするアリアに、俺は苦笑いを浮かべた。

そう――ベルセを何とか制御し、概ねヒステリアモードだった俺は……女性に対して、やっぱり、乱暴にはなりきれない。

それが女性のためになるのなら、こうやって戦うこともできるのだが――できるだけ傷つけたくはないんだ。たとえ自分が傷つけられようとも

俺は、そういう男なんだよ。結局のところはな。

だからここで俺が取る次の行動は――

こう、だろうな。

と、俺は――ベレッタのトリガーから指を外した。

「……？」

引き金から離れた俺の人差し指を見て、アリアが眉を寄せる。

「撃てよ」

ベレッタの銃口を下げ、左手のバタフライ・ナイフも……下げる。

むき出しになったガバメントの銃口が、再び、俺に向けられる形になった。

「もういい。撃つなら、撃てよ。頭でも、どこでもな」

俺は……がしゃん、ちゃきん、と武器を2つとも足元に捨てる。

これは――

「今の戦いは引き分けだった。俺は話し合いでも戦いでも、お前を奪い返すことができなかった。だから、もう打つ手が無い。お前は無法者の一味になって、武偵だった神崎・H・アリアは……いなくなる」

これは、優しさなのかもしれないな。

「そして、武偵憲章1条。『仲間を信じ、仲間を助けよ』。お前を助けきれなかった俺も、武偵憲章を守れなかった。つまり、もう武偵としての資格がない。俺とお前のチームは、全滅したんだ。たった今」

これは、女のために何もかもを投げ打つヒステリアモードが俺に命じた……行きすぎた優しさなのかもしれないな。

でも――いいんだ

「撃てよアリア。どうせ俺には逃げ道なんかないんだ　無法者どもに殺されるぐらいなら、お前に殺られた方がいい」

「こ、殺されないわ……そうよ……あんたもここで、あたしたちと一緒に――」

「――それ以上言うな、アリア　俺は犯罪者の一味になるつもりは無い　仇々、正義の味方」なんかをやってきた酔狂なご先祖様たちに、あの世でボコられたくはないからな」

いいんだ、アリア。

「いいんだアリア　お互い行く気がない方向に相手を引っ張り合ったって、埒が明かないだから、どっちかが消えるしかない。そして俺は――どうしても、お前を、撃てなかったそれが：　どうしてなのかは、言えないけどな」

ヒステリアモードの事を伏せる俺の言葉を

どう解釈したのか、アリアは……かぁ……とまた赤くなった

「だから、お前が撃て。俺を斃して、後は好きにしろよ　でも……いつか思い出してくれ今身全霊を使って、お前を連れ戻そうとした武偵がいたことを　そして、帰れ　無法者の世界から、あの日常に――武偵高に帰ってくれ」

噛みしめるように言うと、アリアはその言葉に胸を抉られるように顔を歪めた

そして――じわ　：と、その赤紫色の眼に、また熱い涙を浮かべ始める。

やめろアリア。
そんな顔……見せないでくれ。
決心が鈍る。
「――撃てよアリア！」
叫んだ俺に、アリアは――
びくっ、と銃口を震わせた。
「……どうして……」
そして、その大きな目から――心を破られたような涙を、こぼして――
「どうして……そんな……できないことを言うの……！」
拳銃を両方とも俺から逸らし、平たい胸に抱きしめた。
「あたしは、曾お爺さまに銃を向けることは、できない……！」
ぽた、ぽた、と涙を落とすアリアは、だだっ子のように首を左右に振り――
「でも、あんたを……パートナーを撃つことも、できないっ、できないよ……！」
肉親とパートナーの板挟みになって、もう本当にどうすればいいのか分からなくなったのか……
顔を真上に上げて、何度か、こらえようとしてから――
「……うあぁー……

とうとう泣き声を上げて、飛び込んできた。
さっきまで銃口を向けていた、俺の胸に。
「アリア……」
俺はそれを、そっと抱き留める。
そして、しばらくそのまま……抱きしめてやった。
その小さな背の震えが、収まるまで。
「……アリア。一つ、告白させてくれ」
ツインテールの頭に俺が告げると、きゅう、とアリアが泣き顔を上げてくる。
「俺は――お前を『殺せ』と命じられた事があるんだ。カナに」
「……っ」
「イ・ウーを殲滅するために、な。さっき見ただろ、カナは二重人格の片側みたいなもので……本当は俺の、兄さんなんだ。兄さんは俺の、たった一人の家族なんだよ。あの時は俺も、肉親とパートナーの板挟みになって泣いたよ、今のお前と同じようにな」
アリアの頬に伝う涙を指で拭ってやりながら、俺は言葉を続けた。
「俺も、兄さんを神様みたいに思っていた。あの人はいつも正しくて、強い人だったから。兄さんには絶対勝てないと絶望して、どうしようもないと思った事もある。でも――道はあった　俺はその道を辿って、途中で兄さんに銃を向けながらも……今、ここにいるんだ

――お前の、隣に」

最後の一言は余計かも、と思ったが……

ついヒステリアモードに言わされてしまったな。

だが、その一言はアリアに強い効き目があったらしく、

「……カナより、あたしを……」

かぁ……と、赤くなってるな。

いつもの赤面癖が、今回は俺に抱かれながらのせいかもしれないが――耳や首どころか胸の前で握った手まで、うっすら広がってしまっている。

これじゃあ全身くまなく、爪先までピンクに染めてるんじゃないだろうか。

「……キンジは……血の繋がった肉親より……あ、あたしを……選んでくれたの……？」

そのアリアの表情から、さっきまでの強い拒絶の色が失せていき――

いつもの、あの……ちっこかわいいアリアの顔に戻っていく。

「わ、悪いかよ」

ちょっと視線を逸らしてそう言うと、アリアはぶんぶんと頭を左右に振った。

そして、また不安げに俺を見上げてくる。

お人形さんみたいな美少女顔に至近距離から見上げられると、お、俺も照れるな。

「でももう、あんたはあたしを信じてくれない。あたしは……裏切り者よ。キンジに……

銃を向けた」

「いつも向けてるだろ」

恥ずかしさまぎれに冗談めかして言うと、アリアは……。

黙った。

黙って、ただ、涙の膜をかけた瞳で弱々しく俺を見上げてくる。

なんだよ……お、俺に……何か言えってのかよ。

ズルイよな。こういう時、女って生き物は。

「……戻ってこい」

「……ん」

「俺は……その、いつもお前を信じてるよ。前言ったろ。『生涯、お前を信じる』って」

いつだったか勢いに任せて言ってしまったセリフを繰り返すと――

アリアは、きゅん……と、自分の左胸を押さえるような仕草をした。

電熱器みたいに真っ赤になって、まるで心臓の音が聞こえてきそうな勢いだな。

ていうか、ドキン、ドキン、って本当に聞こえてきたぞ。

そこまでドキドキなのかよ。

いや、これは俺の心音か　なんで聞こえてくるんだ。紛らわしい

そっ……それに、パートナーと仲間割れしてこれ以上内申点を下げられても困るしな」

と、さすがに恥ずかしくなってきた俺はアリアのちっちゃい肩を両側から両手で掴み、少しだけ離す。

「あとは……お前が、自分で自分を信じられるかどうかだ。少なくともさっきのお前は、自分で自分を信じられてなかった。だから――止めたんだ」

「あたしが、あたしを……」

「いいかアリア。お前の母親――かなえさんは絶対助ける。でも、お前がさっき取ろうとした道は間違ってた。あんなやり方、かなえさんが望んでるわけないだろ」

また母親の事を持ち出すのはちょっと狡いかとも思ったが、ここはトドメが必要だろう。と思った俺のセリフは――

たしかに、アリアにとって決め手の一言になったようだった。

その愛らしい顔に、凛々しい使命感の色が戻ってくるのが分かる

「さっきお前はこれで解決だなんて言ってたが、違う。安易な道に逃げかけていただけだ。――もう、逃げるな。さっきも言ったけどな、逃げ道なんてどこにもない。ここから先、道は一本だけだ。シャーロック・ホームズを逮捕して、イ・ウーを制圧する。それこそが武偵のやり方だろ」

「でも……キンジ、でも、あたしは……曾お爺さまに、銃を向けることは……」

「いいんだアリア。俺にもカナの事があったから、お前の気持ちは分かってるつもりだ。

だから、お前はシャーロックに銃を向けるほどの事はしなくていい」
そこまで尊敬する人物を相手にしたら、マトモに戦えないだろうしな。
「……キンジ……」
――ヤツを無傷で逮捕する手も、考えてはある。だが……それにはお前の協力が必要になるんだ。だから、ほんの少しだけでいい。俺に力を貸してくれるな？」
確かめるように言った俺は、ヒステリアモードを心の中で言い訳にしつつ――
ダメ押しの一言を、続けた。
「俺には、お前が必要なんだ」
アリアは……
わあぁ、という口をして、魔法にかけられたような顔をした。
そして数瞬、茫然自失してから――
ほとんど全身、コチコチに固まったまま――こ、く、り。
小さく、ぎこちなく……しかし確かに……
うなずいてくれた。

貫通弾2　序曲の終止線（プレリュード・フィナーレ）

その後、急に素直になったアリアから聞いたところによると……

シャーロックはアリアに聖堂に残るよう言い残し、奥の扉から姿を消したのだという。

その奥の扉を抜けると、その先には鋼鉄の隔壁があり……アリアが前に立つと、それが自動ドアのように上下・左右・ナナメに何枚も開いていく。

通路の床は排水溝にかけられるような格子組みの耐蝕鋼に変わり、左右の壁では電子盤がアクセスランプをチカチカさせていて……近未来的なムードになってきたな

そして、ラジオハザード　放射性物質に対する注意喚起の――マークが描かれた厚い隔壁が、警戒する間も無く開き……

その向こうに広がっていた光景に、俺とアリアは言葉を失った。

今までで一番広大なそのホールの奥には、歴史の教科書で見たパルテノン神殿のように数本の巨大な柱が並んでいた。

いや、あれは柱じゃない。

ＩＣＢＭ。

Intercontinental ballistic missile

世界のどこからでも発射でき、どこにでも届く　――大陸間弾道ミサイル。その、上部だ。

下の部分は、耐蝕鋼の床に空けられた深穴に収まっている。
数は　8本。
考えたくないが……弾頭の性質次第では……どんな大国でも、1日で壊滅させることができるぞ
（本気、かよ……ッ）
いくつか修羅場を超えてきたつもりの俺でも、この光景には背筋が凍りつく
なんでなの……」
だが、隣から上がったアリアの声は——俺とは違う事に驚いているようだった
……？」
俺が振り向くと、アリアはキョロキョロと室内全体を見回していた
そして改めて俺の顔を見て、赤紫色の瞳を大きく見開く
「……あたし、この部屋を見たことがある……！」
ワケの分からないことを言い出したアリアに、俺は眉を寄せる
驚きの連続に錯乱状態になっているのかと疑ったが、そうではなさそうだ
アリアの視線は、混乱した人間のそれじゃない　ただ、ただ、驚いている
落ち着けアリア、そんなハズはない、それは既視感ってヤツだ」
「違うわ、確かに……見たことがあるの　そして……あたし、ここであんたと会ったこと

がある……！」

「……ありえん。少なくとも俺はこんなところに来たことはないんだからな」

俺がそう片付けた時 ――

ブツ、ブツ、という雑音混じりの、音楽……？　が、聞こえてきた

音量が上がっていくと、それは歌劇……モーツァルトの『魔笛』だと分かる。

「音楽の世界には、和やかな調和と甘美な陶酔がある」

落ち着いた声と共に、机のようなＩＣＢＭの陰から……

世界最高・最強の名探偵、シャーロック・ホームズが姿を現した

「それは僕らの繰り広げる戦いという混沌と、美しい対照を描くものだよ　そして、このレコードが終わる頃には――戦いのほうも、終わっているのだろうね」

シャーロックはアンプに繋いだ蓄音機を足元に置くと、コツ、コツ

耐蝕鋼の床を踏み鳴らして、俺たちの方へ数歩だけ歩み寄ってくる

「はは。いよいよ解決編、という顔をしているね。だがそれは早計というものだよ　僕はこの一つの記号――『序曲の終止線』に過ぎないのだから」

「序曲……？」

「そう。この戦いはキンジ君とアリア君が奏でる協奏曲の――序曲に過ぎない　僕のこの発言の意味は、じきに分かる事だろう。さて、ところで」

シャーロックは話題を変えるように古風なパイプを取り出し、マッチで火を点けた。
同士討ち――カナ君がイ・ウーに仕掛けようとしていた罠の味は、いかがだったかな」
その言葉に、俺とアリアは横目を見合わせた。
どうやら、さっきの俺たちの銃撃戦の仕掛け人はシャーロックだったらしい。
まあ、なんとなくそんな気もしていたが……何が狙いだったんだ。
俺たちの銃弾数を減らさせるのが目的だったのなら、してやられたって事になるな。
さっき確認したが、アリアの.45ACP弾は残り数発しかない。
俺はもっと深刻で、持てるだけ携行してきたハズの通常弾が……パトラ戦、幂乗弾幕戦、近接拳銃戦と来て、残り1発しかないのだ。
「曾お爺さま……」
勇気を振り絞るような足つきで、一歩――
アリアが、シャーロックの方に歩いた。
「あ、あたしは……私は、曾お爺さまを尊敬しています。だから、この銃を向けることはできません。あなたに、命じられでもしない限り」
丁寧な言葉遣いでそう言うと、アリアは足元に自分の銃を置く。2丁とも。
「私は恐らくあなたの思惑通り……あなたに立ち向かおうとするパートナーを、この銃で追い返そうとしました。でも、止めることはできなかった」

自分の胸に手を当てて、アリアは小さな声で――しかし明瞭に、続ける。

「彼は私がやっと見つけ出した、世界にたった一人のパートナーなんです。曾お爺さま、どうかお許し下さい。私は……彼に協力しようと思います。それは……あなたに敵対する行動を取るという意味なんです。どうか、お許し下さい」

そう宣言したアリアに……

「いいんだよ、アリア君」

シャーロックは、なぜか満足げな笑みを返していた。

「――君は今、僕の存在を心の中で乗り越えた。そして1人の特別な男性を理由に、僕と敵対することさえ決意した。それは君の心の中で、僕よりもキンジ君の方が大きな存在になったという意味なのだ。まだ、愛の量は僅差のようだがね」

何やら、俺とアリアにとって不得意分野っぽい話を始めたシャーロックだが……

「君たちは子供だが、男と女だ、女心は僕の不得意な分野ではあるが――敢えて語るなら、女というものは、どんなに男から酷くされてもとことんまで男を憎みきれるものじゃない。たとえそれが銃を向け合うような事態であったとしてもね。『雨降って地固まる』という諺の通り――君たちは戦いを経て、より強く結びついたことだろう」

どうやら……

ヤツが俺たちを同士討ちさせたのは、弾切れなどという姑息な狙いでじゃなさそうだな

もっと不可解で、複雑な狙いがありそうだ。
その真の狙いまでは分からないが……まあ、一つだけよく分かったことがある。
「――つまり、何もかも自分の推理通り事が運んでるって言いたいのか。シャーロック」
なぜか赤面して固まっているアリアの横から、俺がシャーロックを睨み付けると……
「ははっ。こんなのは推理の初歩だよ、君」
シャーロックは俺たちを掌の上で弄んでいるような顔で、嘲笑うように言った。
「じゃあ、これも推理できたか」
俺は瞬時にベレッタを抜く。
そして銃口を、アリアの側頭部に突きつける。
――さっき、アリアと言い合わせた通りに。
「……」
シャーロックは……
黙って、パイプをくわえ直した。
「君。それは、人質を取ったつもりかい？」
俺は銃口をそのままに、アリアの背後に回る。
「シャーロック。お前の目当てはアリアなんだろう。それに、アリアがいなくなれば――イ・ウーは仲間割れを起こすって兄さんに聞いたんでね」

「でも、君は撃たない」
「こっとくが、俺はもうヤケクソだぜ」
喋りつつ俺は、アリアのツインテールと耳の間からシャーロックの方向を盗み見たよし。
こっちを向いている。
そうさ　分かってる　こんな子供騙し以下の作戦で、アイツが折れるとは思ってない
俺がアリアを人質に取るフリをしたのは……ただ、こっちに注目させるためなんだ
「そういえばシャーロック　あんたにプレゼントがあるんだ」
俺は、さらに相手の注意がこっちに向くように少し声を大きくした
「――兄さんからのな！」
叫んで、ピンッ――！
と、白い銃弾を投げる。
――閃光拳銃弾。
兄さんが俺に託した武偵弾の一つ
手投げでも使える、目くらましの閃光弾だ――！

――カッ――！！

俺たちとシャーロックの中間で、そいつが小さな太陽になった。
相手は世界最強の名探偵、シャーロック・ホームズ。
真っ正面から戦ったって、勝ち目はないだろう。
だから、無力化するんだ。
超小型化されているとはいえ、威力は通常の閃光弾と同じ――いや、それ以上ある。
この閃光を直視した人間は例外なく、数分間は確実に目が見えなくなるんだ！
「キンジ……い、今よ！」
というアニメ声に、腕で目を覆っていた俺が顔を上げると……
アリアが、体を竦ませるようにしゃがんでいた。
「あ、アリア……!?　お前　――目を――隠さなかったのか!?」
「あんたはあたしの背後で隠せても……あたしが目を隠したら、曾お爺さまにバレる！」
と振り向いたアリアの目は、俺ではない中空を見上げていた。
――失明している、のだ。一時的にとはいえ。
「キンジ、早く曾お爺さまを！　あたしは見た、曾お爺さまは閃光を直視してたわ！」
そう叫ばれて――
俺はアリアから借りていた超偵用の手錠を手に、駆け……ようとした所で、足を止めた。

止めざるを、えなかった。
シャーロックが、立っていたのだ——平然と
「うん　今のは知恵を回した方だと思うよ　人質を取るフリをして、実際には——閃光を使う作戦だったんだね　しかし、君たちは推理不足だったようだ」
悠然と語るシャーロックに、俺は愕然とする
効かなかった……のか？
どうしてだ。
僕は盲目なのだよ。60年ほど前、毒殺されかけた時からね、
「……！」
「でも、それを知る者はいない　なぜなら僕は目が見えるように振る舞っていたし、実際視覚に頼る君たちよりも、自分の周囲で何が起きているのかよく分かっているのだからね。初めの頃は推理力が助けてくれたものだが、今は音や気流で分かるんだよ。たとえばいま、君の心拍数が驚きのために上がっていることも——手に取るように、分かる。
や、られ、た……
全てが、ムダになった。
立てた作戦も　兄さんがくれた武偵弾も　捨て身のアリアも……！
「……ッ……！」

俺の中で、何かがキレる音がした。
体の中で、黒雲が湧くように――
今まで抑えていた、ヒステリア・ベルセの血が濃くなっていくのが分かる。
狭まっていく視野が、指向性レーダーのようにシャーロックに集中していく。
――ああ、そうかよ。
あんたは歴史上の大人物。時空を超える名探偵。小細工は通用しねえってことだな。
「キンジ……逃げなさい！　曾お爺さまは、あたしが説得を……！」
「――できる相手だと思ってんのか。アリア、引っ込んでろ」
俺はアリアの前に出た。ヒステリア・ベルセの獰猛さを――解放しながら。
解放？　いや、違うな。
溢れ出てきているんだ。俺の意思とはもう、関係なく。
「シャーロック」
「何だい」
「ここいらで決めるか」
「何をだい」
「探偵と武偵――どっちが強いか」
俺は右のベレッタを抜いて、仁王立ちした。

アリアの前で、シャーロックの前に立ちふさがるように
アリア。お前が自ら視力を失ったことで――少し、気が楽になったぜ、
お前が尊敬しているアイツを、俺がブチのめすところを見せずに済むワケだからな。
「……キンジ君、僕は150年以上、世界中で凶悪かつ強靱な怪人たちを数多仕留めてきた。一方の君は、たかだか17年を平和な島国で生きてきた子供だ　その未熟な君が――僕と、決闘しようというのかね」
俺は左手のバタフライ・ナイフも開いて、シャーロックを睨み付けた。
「ああ、俺は確かに、偉大な名探偵様から見りゃ未熟者だろうさ　武偵としてもEランクの落ちこぼれだしな　だけどな！　自分のパートナーに手え出したヤツを放っておけるほど、腐っちゃいねえつもりだぜ」
「そんなにアリア君が大事なのだね、いや、それは大変結構なことだよ」
からかうような表情をしながら、シャーロックはコートを脱ぐ
「僕は強者として君に警告したが、君はそれを受け入れなかった　理解できているね？」
レコードの歌劇、『魔笛』をBGMに――
シャーロックは、手にしていた太めの金属製ステッキを持ち上げた
拳銃では……ない。
「いいのか、銃じゃなくて、俺は仲寄り相手でも油断しない性格だぜ」

言って俺は、最後の9ミリパラベラム弾と――
兄さんからもらった黒い武偵弾の入った弾倉を確認し、ベレッタに差し直した。
使用うぜ。こっちは。
銃も、後で1度だけ使わせてもらうよ。そしてそれは僕の『緋色の研究』にピリオドを打つ、極めて重要な1発になると推理している」
『緋色の研究』？　それが何だかは分からないが……ナメやがって。
俺なんか、緒戦はそのステッキ1本で十分ってことかよ。
おいで。君の言う通り、決闘に敬老精神なんかは不要なのだ。遠慮はいらないよ」
遠慮してるのはそっちじゃねえか。
だが、お前が銃を後回しにするんなら好都合だ。
それどころかコイツは、千載一遇のチャンスになる。
「心配するなシャーロック。俺は武偵だ。武偵の任務は――無法者を狩ること」
言って、俺は　ベレッタでシャーロックに狙いを付けた。
「――任務は、遂行するッ！」
ガウンッ！
1発目の銃弾が、シャーロックに迫り　ギインッ！
シャーロックは当たり前のようにステッキを突きだして、それを防いだ。

金属音が上がり、その先端にぶつかった銃弾が天井へ飛んでいく

「シャーロック！」

続けて俺は、2発目――兄さんがくれた黒い銃弾を発砲した

シャーロックが再びそれをステッキで突いた時――一瞬、眉を寄せるのが見えて――

――ドウウウウッ!!

最後の武偵弾――

炸裂弾が、紅蓮の炎で室内を照らし上げた

「――――!!」

俺は両腕で顔を覆い、爆風から身を守る

アリアが俺の背後で、驚きに小さな悲鳴を上げている

……す……すげえ……！

初めて使ったぞ、こんなの

まるで、強襲科で見学させられた対戦車擲弾みたいな威力じゃねえか！

それを、シャーロックは……マトモに喰らった

ヤツは俺という情報源から、この威力を推理できなかったのだ。

なぜなら、この武偵弾にここまでの威力がある事を――俺自身が知らなかったから。
だから分からなかったのだ。この一撃で、自分が斃されてしまう事を
シャーロックさんよ。
あんたの敗因は、推理に頼りすぎた事みたいだな。
（あっけねえ……もんだったぜ）
俺はアリアとの戦いで切っていた口から、ペッ、と血を一叶きして息をついた。
シャーロック・ホームズは希代の名探偵。このぐらいで死ぬタマじゃ無いと信じたいが
……ことによると、やっちまったかもしれないな。9条破り。
と、俺がシャーロックの様子を窺おうとした時――
「――――!?」
ビリッ、という――
電流のような悪寒が、全身を走った。
濛々と上がった煙の中に……
――いる。
ヤツが。
それも……最初に会った時と同じ、いや、それ以上の圧倒的な存在感が甦っている
（ど、どういうことだ……!?）

あの感じ……あの気配は……

あれは、ヒステリアモード……!?

「――ここまでが『復習』だよ、キンジ君」

格納庫の奥から、何かの噴射音と共に白くて重たい煙が流れ込んできていた。

炸裂弾で生じた黒煙が、それに押し流されるようにして払われていく。

白黒の渦を巻く煙の中に立つシャーロック・ホームズは――間違いない。

なっている。ヒステリアモードに。

どう――やったんだ。

いや、『復習』というヤツの言葉からも推測できる通り――シャーロックが、竜悴公・ブラドのようにヒステリアモードの遺伝子をコピーしていたとしても不思議はない。

だが、どうやってなったんだ！　この状況で！

と心の中で叫んだ俺の脳裏に、さっきの兄さんの姿がよぎる。

（――ヒステリア・アゴニザンテ――）

死に際の、ヒステリアモード。

……なるほど……！

ヤツはそもそも、そうは見えなかったが――寿命が近づいていた。

最初っから、死に際だったんだ。

そこにトドメを刺すような俺の武偵弾を受けて、完全に目覚めさせたのだ。俺たち遠山家の男に伝わるヒステリアモード。その派生系を。

「ここからは……これから君たちが闘うであろう難敵の技を、『予習』させてあげよう。なにしろ僕は、古い仇敵と同じ名前――『教授』と呼ばれているのだからね、ここでは」

武偵弾で破けたジャケットとシャツを、シャーロックが脱ぎ捨てると――

露わになったその上半身は、恐ろしく筋肉質だった。

それもブラドのように鈍重な、膨れ上がった筋肉ではない。超一流のアスリートがそうなるように、完璧に引き絞られた体をしている。そしてその肌は、古い傷痕だらけだ。

……ズズ……ズズズ……

俺たちの足元が、振動している。

見れば、シャーロックの背後――巨大な柱のようなＩＣＢＭが、その下部――ロケット噴射口から、白煙を吹き出し始めているようだ。

今すぐ発射されそうな雰囲気ではないが、その準備をしてるらしい。

何だかマズいことが起きてるな。いっぺんに。

そう思いながら俺は――

――笑って、いる……格子状の床下から流れ込む熱風に、前髪を暴れさせつつ。

武偵業界で狂戦士と通称される、死を恐れぬ無謀な武偵のように。

相手はシャーロック・ホームズ、全力の兄さんさえも退けた、明らかに今までで最強の敵だ　そいつが更に、ヒステリアモードになった　勝てるワケがない。

事態を冷静に捉える普段のヒステリアモードだったら、俺はここで一時撤退するだろうアリアを守るために。

だが、いま俺の体内ではヒステリア・ベルセの血が濃くなってきている

彼我の戦力比較だとか、そういう理屈はどうでもいい気がする。

ただ、ただ――戦いたいんだ、アイツと。一対一で

そしてブチのめして、思い知らせてやる

二度と俺のパートナーに手を出すんじゃねえ、ってな……

――バキィイインッ！

白い煙を背に、シャーロックは工業機械のような音を上げて割れかけのステノキを床に叩きつけた。

ステノキは粉々になり　―中から、仕込まれていた一振りの刀が現れる。

偉かに反ったその刃が、ぎらり、と　一目で名剣と分かる眩い輝きを放つ

強襲科の副読本で見た事がある　使い込まれて細身になってはいるが、あの直刀に近い形状は……多分、スクラマ・サクス。

日本刀でいえば古刀が打たれていた時代にヨーロッパで造られた、強靱な片刃剣だ

「……いい、刀だな」
「――銘は聞かないほうがいい。これは女王陛下から借り受けた大英帝国の至宝。それに刃向かったとあっては、後々、君の　族が誹りを受けるおそれがあるからね」
「名前なんて興味ねえよ。どうせエクスカリバーとかラグナロクとか、そういうのだろ」
と、俺がゲームに出てくる名剣の名前を適当にほうと……
シャーロックは、ちょっと驚いたように眉を上げた。
どうして分かったんだい。とでも言うように
「ははっ、凄い推理力だ。君には名探偵の素質がある。僕が保証しよう」
「……あんたも適当な男だな。実は」
もう銃弾の無い俺は、チャキソ　と、バタフライ・ナイフを開いた。
ＩＣＢＭの噴射炎で下側から照らされる室内が、次第に明るさを増していく。
「もう、時間もあまりないようだ。1分で終わらせよう」
シャーロックが、足元に流れる熱い白煙を踏み越えるようにして歩いてくる。
「気が合うな。こっちも、そのつもりだ」
俺も、シャーロックに近づいていく。
そして――残り、５ｍほどに近づいた俺とシャーロックは――
バッ！　とお互い同時に駆け、激突した。

甲高い音を上げて切り結んだ刀とナイフから、火花が上がり――バチイイイッ！
前触れ無しに眼前に現れた雷球に吹っ飛ばされて、俺は、真後ろに転がった
雷、か……！
まあ、想像の範囲内だな。ヤツが、『予習』とかぬかした時点で。
ヒステリア・ベルセの反射神経でバックステップしたが、こいつはシビレたな
だが、まだいけるぞ――！　と両手をバネのようにして跳ね起きると、いつの間にか俺
を――煙だけではない、濃霧が囲んでいた。
「――？」
ピシッ！　という衝撃と共に、当たり前のように何かが防弾ベストと俺の右肩を貫いて
いく。鋭い痛みに傷口を押さえるが――今のは、銃撃じゃない。
傷口が……濡れている。
これはおそらく、水　高圧で、水の矢が俺の肩を撃ち抜いていったのだ
害に加えて、霧と水も使いやがるのか。
シャーロック。お前、探偵やめてサーカスでも開け。
胸の中で毒突いた俺の足元を、シュッ！　という音が通り抜けていった。
ヒステリアモードで躱したつもりだったが、右足に――激痛が走る。
前のめりに倒れながら膝を押さえると、そこには薄い刃物で切られたような傷が、文字

に開いていた。
――今の斬撃には重量感が無かった。鎌鼬、みたいなものだろう。風の――技か。
雷に倒され、霧に視界を塞がれ、水と風に腕と足をやられ、動きが鈍った俺が……よろ……と立ち上がったところに――
――ブンッ！
霧をかき分けて飛び込んできたシャーロックが、宝石のように煌めくスクラマ・サクスを振るってきた！
切っ先が、俺の左胸に迫る――
――ギイイインッ！
激しい火花を上げながら、俺は何とかナイフで切り結ぶ。
だが、ヤツの片刃剣は特殊な金属で出来ているのか、見た目以上に重量がある。
「――！」
撥ね返されたナイフの柄を白分の胸にブチ当てつつ、俺は車に撥ねられたように真横へ吹っ飛んだ。
そして霧と煙を散らしながら、鋼鉄の壁に叩きつけられる。
喉まで上がってきた血を抑えようとしたが――咳き込むように、吐血した。き、キツいな、これは――どうやら、肋骨をやられたみたいだぞ。

衝撃に歪む視界では、シャーロックが追撃をかけにきている。
剣の構えは片手平突き、狙いはまた、俺の左胸　！
「ソ！」
寸前で――躱す！
――ガスンノソソソー
洋剣が、俺の防弾・防刃ベストを紙キレのように貫いた。
「キンジぃっ！」
アリアの悲鳴に――
俺は……〝大丈夫だ〟と強がった笑顔を見せてやる
シャーロックの剣は俺の防弾ベスト――
その脇を貫き、背後の壁に深々と突き刺さっていた。
フェンシングの達人の――しかも、ヒステリアモードの――突きを脇の下で躱すなんて、
ヒステリア・ベルセじゃなきゃ絶対できなかったろうな、
まあ、刃が自分の脇腹にくっついてるのが分かるぐらい、ギリギリだったけどな
ベストごと壁に縫い付けられる形になった俺は――
「よく考えてみりゃ、あんたにこの服は無意味だったな！」
と、防弾ベストを一気に脱いだ。

すかさず、ナイフを振り上げるが――
シャーロックは、その俺の拳を踏み台にして大きく宙返りした。
そして……ふわり。
まるで体重がないかのように飛翔して、華麗に、俺から数m離れた位置に着地する。
ヤツの剣は……壁に刺さったままだ。捨てやがった。
今の一瞬で剣を捨てる判断ができる切り替えの早さは――さすがだな。
俺だったら、剣を抜き戻すかどうか考える一瞬で喉笛をカッ切られていただろう。

――O zitt're nicht, mein lieber Sohn...!――

その時、室内に流れるモーツァルトの『魔笛』が……
――独唱曲――
超絶技巧と呼ばれる顫動音を贅沢に使う、華麗なソプラノ・パートに入った。
「どう……やっている？」
表情が硬いのは、シャーロックの方だった。
「このオペラが独唱曲になる頃には――君を沈黙させているつもりだったのだがね。君は僕が推理したよりも長い時間を戦い抜いた　おそらく、HSSのトを行く反射神経で、

それが僕の推理、『条理予知』さえも狂わせているのだよ」

……そうか。

シャーロックはヒステリア・ノルマーレとアゴニザンテまでは知っていても、ヒステリア・ベルセを知らないらしい。

「つまり僕は生まれて初めて、推理をし損じたのだ。君は、賞賛されるべき男だ」

俺は……あんたに認められるほどの人間じゃないさ」

肩をすくめるようにして言いながら、俺は剣を失ったシャーロックを前に――

ただの、高校生だよ。ちょっと偏差値低めで、荒っぽい学校のな」

くるっ……

ちゃき。

と、バタフライ・ナイフを掌の中で回して、閉じた。

「……なぜ、武器を収めるのかね」

「――待っててくれたんだろ、さっき」

さっき俺が、霧の中で水鉄砲と鎌鼬にやられて転倒した時

あんたが俺を仕留めるチャンスは、あったんだ。何回も。

でも、あんたは……俺が立ち上がるまで、攻めてこなかった。

待っててくれたんだろ。立ち上がるのを。

「これで、貸し借りなしだ」
冷静に考えれば、こんな余裕をかませる立場じゃないんだがな。
だが今はベルセで強気なこともあるし、敵に借りを作りたくないってのも本音だ。
俺が閉じたナイフをポケットにしまうと、シャーロックは、ちょっと恥ずかしそうに赤くなった。
あれ。
どこかで見たことあるな。あの表情。
……ああ。
アリアと、似てるんだ。
俺にからかわれたときの――アリアと。
そう思った俺は、少しだけ口の端が緩むのを感じていた。
「否定されたが、繰り返し言おう。君は大した快男児だよ。僕がこんな気分になったのは、ライヘンバッハ以来のことだ」
「バッハじゃなくてモーツァルトだろ、これは」
流れる独唱曲に耳を傾けて俺が答えると、シャーロックは小さく吹き出した。
なんだよ。
何か面白いこと言ったか？　俺。言ってないだろ。

どうも……たまに俺の発言が不意にアリアを笑わせるように、なんだか分からない所がツボったらしいな。

「キンジ君。戦いの最中に言うのは不適切かもしれないが――僕は君が気に入った。君のフェアプレー精神に敬意を表して、ここから君と素手でボクシングでもしたいところだが……申し訳ない、この独唱曲は、最後の講義――『緋色の研究』についての講義を始める時報なのだよ。紳士たるもの、時間にルーズであってはいけないからね」

（……緋色の研究……？）

再び出されたその謎の言葉に、俺は眉を寄せる。

対し、静かに瞼を閉じたシャーロックの……周囲に、ボンヤリと……

……な、何だ……あれは……？

――光が、見え始めた。

見間違いではない。ヤツの体が、光り始めたのだ。

シャーロックが、何かの能力を解放しようとしている。

光は、みるみる内に勢いを増していく。

そして――緋色に……変色していく……

「――僕がイ・ウーを統率できたのは、この力があったからだ」

まるでそれは、シャーロックを覆うオーラのような光。

そして俺は　あの光を、見たことがある
パトラ戦でアリアが見せた緋色の発光。
これは、あれと：　全く同じ現象だ
「だが、僕はこの力を不用意には使わなかった。『緋色の研究』――緋弾の研究が未完成だったからだね」
語りながらシャーロックがついに抜いた銃は　アダムズ1872・マークⅢ
かつての大英帝国陸軍が使用していた、45口径ダブルアクション拳銃だ。
「……あの、『緋弾』を……撃てるのか、お前も」
君が言っているのは、恐らく違う現象のことだろう　アリア君かつて指先から撃ったはずの光球――それは、緋弾ではない　古の倭詞で『緋天・緋陽門』という、緋弾の力を用いた、つの現象に過ぎないのだ」
言いながら、シャーロックは拳銃の弾倉から――ちゃき、
一発きりしか入れてなかったと思われる銃弾を、取り出した。
「これが、『緋弾』だ」
その弾頭は――血のような、薔薇のような、炎のような――緋色をしている
「この弾丸が、緋弾なのだよ　いや、形は何でも構わない。日本では緋々色金と呼ばれる……要は、金属なのだからね。峰・理子・リュパン4世が持っていた十字架を覚えている

だろう。あれも、この弾と同族異種の金属を極微量に含むイロカネ合金だ。イロカネとは……あらゆる超能力がまるで児戯に思えるような、至大なる超常の力を人間に与える物質いわば、『超常世界の核物質』なのだ」

言われて、俺は理子の青い一字架を思い出す。

そういえば理子は、あの金属を持っている時だけ髪を手のように動かす力を使えた

あの現象とシャーロックの話から類推するに――あの十字架や今シャーロックが持っている緋色の弾丸は、ただの人間を強力な超能力者に変える触媒的な金属らしい

……だが……俺の背後でたじろいでいるこのアリアは、そんなものを持ってないぞ。

なのに、なぜ――あの緋色の光を撃てたというんだ

「――世界は今、新たな戦いの中にある　イロカネの存在、その力が次第に明らかになり……極秘裡にその研究が進められているのだ　僕の、『緋色の研究』のようにね

イロカネを保有する結社はイ・ウーだけではない。アジア大陸の北方には『ウルス』、南方には香港の『幇幣』、僕の祖国・イギリスでは世界一有名なあの結社も動いている。イタリアの非公式機関を陰からサポート・監視するバチカンのように、国家がイロカネの研究を支援・監視するケースも枚挙に暇がないほどだ　アメリカではホワイトハウスが、日本でも宮内庁が君の高校に星伽の――いや、これは少々口が滑ったかな。

そして、僕のように高純度で質量の大きいイロカネを持つ者たちは、互いのイロカネを

狙いつつも――その余りに甚大な超常の力に、お互い手出しができない状態にある」
そう言ってシャーロックは緋色の弾を銃に籠め直し、
「だが、この弾を使用するのは少し後にして――もう一つ、お見せしよう」
と、今度は右手の人差し指をこっちに突き出してきた。
「これだろう？　君が見た現象は」
シャーロックの身体を覆っていた緋色の光が、今度は……指先へと集まっていく。
まるで、燃えさかる太陽のような……あれは……！
（お……同じだ……！　あの時と……！）
これも、アリアがパトラを光弾で撃った時と全く同じ光景だ。
あの艦砲射撃みたいな技を――シャーロックも、使えるのか。
マズい……！
マズいぞ！
「……キンジ……何……何が起きているの……？」
まだ目がよく見えないらしく、アリアは前方をただ見つめている。
俺は震え出した足で、とにかくシャーロックからアリアを守るような位置に立った。
だが……パトラ戦でアリアが放ったあの光は、巨大なピラミッドの上層部を跡形残らず消し去る破壊力を持っていた。この防弾ベストすら着ていない体を盾にしたところで――

1枚のクノキーで銃弾を防ごうってぐらい、無意味なことだろう。
史に不運な事に――俺は、ヒステリア・ベルセの血流が通常のヒステリアモードに戻りつつある事を感じていた。兄さんが言った通り、ベルセの血は不安定で……波のように、来たり引いたりするものらしい。
アリアと戦った時とは逆に、自分の意志で呼び起こそうともしてみたが　できない。ベルセは抑えることはできても引き出すことができないのだ。
ごくり、と生唾を飲んだ俺の背後から――
「……？」
緋色の光が……
もう一つ、発せられ始めた。
振り返ると今度は、アリアの――体から。
「アリア……！」
俺の眼前で、光はアリアの右手の人差し指に集まっていき――
シャーロックのそれよりは小さいが、もう一つの太陽のように輝き始める。
「な……なに……これ……」
光の明暗はなんとか分かるらしく、アリアは自分の右手に顔を向けていた。
「アリア君。それは『共鳴現象』だ。質量の多いイロカネ同士は、片方が覚醒すると

共鳴する音叉のように、もう片方も目を覚ます性質がある。その際は、イロカネを用いた現象も共鳴するのだ。今、僕と君の人差し指が光っているようにね」

　言いながら、シャーロックは――

　緋色の光を蓄えた指で、俺たちに狙いをつけた。

「アリア君。僕はこの光弾、『緋天』を君たちに撃つ。僕が知る限り、それを止める方法は同じ『緋天』を衝突させることのみだ。実験したことは無いが、日本の古文書には……それによって緋天同士は静止し、その後に『暦鏡』なるものが発生するとある」

「曾……お爺さま……？」

　視覚が戻らぬままのアリアは、何をすればいいのか分からないという顔をしている。

「さっき君は……『あなたに命じられない限り』、僕を撃たないと言ったね。ならば――ここで命じよう、僕を、撃ちなさい。その光で」

「……曾お爺さま、を……」

　混乱しながらも、剣呑な雰囲気だけは分かるのだろう。

　アリアの額には汗が滲み、その表情に緊張が漲っていく。

「そうだ。緋弾に心を奪われないよう――静かに、落ち着いて　指先に力を集め、保つようなイメージをするのだよ。キンジ君……君は、アリア君の目になってあげなさい」

「だ、誰がお前の言うことなんか信用するかッ。お前は撃たない、アリアはお前の　――」

『ほっとくが、俺はもうヤケクソだぜ』

さっきの俺のセリフを　―理子の変声術だろう――俺の声で、シャーロックが言った

そして、いつだったかのアリアと似た仕草でウィンクしたシャーロックを見て……

俺は数秒間、黙って、考えた

あの光を喰らったら、俺たちは新幹線にでも撥ねられたように粉々になるのだろう

かつてアリアが放った光の速度から考えて、この距離でヤツの光弾――『緋人』を躱すことは難しい　いや、俺だけならともかく、目の見えないアリアは絶対躱せない

シャーロックがアリアを殺すとは考えにくいが、状況だけを見れば……

絶体絶命、ってヤツだ

「よく……分からねえな　あれもこれも、まあ、分かりたくもない事ばっかりだけどな」

仕方なく、吐き捨てるように言った俺は……

「ただ、一つだけ分かる。要するにお前は王手をかけてきた。そして俺たちも、まだ1手打てる。そういう事なんだろ、シャーロック」

「ご名答だ、キンジ君。どうかそのHSSの優れた理解力と状況判断能力で、これからもずっと――アリア君を助け続けてあげてくれたまえ」

そう思うんなら、HSSとか不用意に言うなよ。

アリアがヒステリアモードの事に勘付いたらマズいだろ

と、俺は口をへの字に曲げながら……アリアの手を取った。
「……キ、キンジ……？」
「――俺なりに、この状況を説明してやるよ。俺たちはシャーロックに……戦艦の主砲を向けられたような状態だ。これは完全に物の喩えってワケじゃない、あいつの超能力は、本当に艦砲射撃並の威力があるんだ。そして、アリア。お前も……どういうわけか、同じ大砲を持ってるらしい――その指にな」
俺はそっと掴んだアリアの手を、シャーロックに向けさせる。
「アリア……たぶん、こうだぜ」
光る指先に触れて、人差し指を伸ばさせてやるが……熱くは、ないな。
まだ目が完全には見えず、狙いをつけられないアリアの右手を――
俺は、後ろから抱くようにして両手でそっと支えてやった。
狙いは、シャーロックの指先。
その、緋色の光……！
「キンジ……」
アリアが、怯えるように俺の方を向こうとする。
「大丈夫だ。お前はパトラと戦った時、無意識の内に一度この力を使ってるんだ」
そう言って俺は、その震える右手を両手でしっかり握ってやる。

「あとは、何の助けにもならないかもしれないけど……俺が、ついててやるよ。何がどうなろうと、最後までな」

そう言うと……アリアの震えは少し収まったようだった。

小さな手の指先に集う光が、強まっていく　シャーロックのものと同じぐらいにまで。

その光景を見たシャーロックは、緋色の光の向こうで――微笑んでいた。

「良いパートナーを見つけたね。アリア君」

まるで、試験に合格した生徒を見る先生のように。

「かつて僕にワトソン君がいたように、ホームズ家の人間には相棒が必要だ。人牛の最期に……2人が支え合う象徴的な姿を前にできて、僕は……」

シャーロックは、人差し指をさらに突き出すようにし

「――幸せだよ」

――パアッ……

光を、放った。

それに呼応するようにして、パッ――！　と、アリアの光も指先を離れる。

「……！」

光と光は俺たちとシャーロックの中間で衝突し……今回は　空中で、静止した。
恐ろしいほど、静かに。
そして、融合……
して、いく。

「僕には、自分の死期が推理できていた」
シャーロックの声が、光の向こうから聞こえてくる
「どんなに引き延ばしても、２００９年の――今日、この日までしか保たないと。だからそれまでに緋弾を子孫の誰かへ『継承』する必要があったのだ。元々、緋弾は『ホームズ家で研究するように』と女王陛下から拝領したものだからね」
強まった緋色の光の中で、俺はアリアの目が悪化しないようにと頭を抱いてやった。
だが……
一旦強まった2つの光はすぐ、まるでお互い打ち消し合うように急速に収まっていく。
「しかし、その後の研究で分かった事だが……緋弾の継承には難しい条件が3つあった
1つは、緋弾を覚醒させられる人格に限りがあること。情熱的でプライドが高く、僕は自分がそうとは思わないが……どこか、子供っぽい性格をしていなければならないらしい。しかしホームズ一族は皆、そうではなかったのだ。だから僕は、条件に合う子孫が現れるのを待ち続けなければならなかった。そして現れたのが――アリア君。君だ。

2つ目の条件は……君たちの今後の関係のために詳細は伏せるが……緋弾を覚醒させるには、アリア君が女性として心理的に成長する必要があった事だ」

語るシャーロックの手前で、緋色だった光球が透明になっていく

「3つ目の条件として――継承者は能力を覚醒させるまで、最低でも3年のあいだ緋弾と共にあり続ける必要があった。抱卵する鳥のように、片時も肌身離さずに――」

融合していく2つの光は、形を変えていき……

……直径2メートルほどの、レンズのような形に変わっていく。

「これは簡単なようで、最も難しい条件だった。なぜなら緋弾は他のイロカネ保有者たちから狙われていて、覚醒した者でなければ守る事ができない状況だったのだからね

だから、今日までは覚醒した僕が、緋弾を保有し――

――今日からは、覚醒したアリア君が緋弾を保有する。

これを成立させるために、僕は今日までこの緋弾を持ち続け、さらに3年前の君に渡さなければならなかったのだ。これは僕にとっても、生涯最大の難問の一つだった。だが、その難問を解決してくれたのも――また、緋弾だったのだよ」

俺の視界に見えるシャーロックの姿が、ぼやけていく。

宙に浮かぶ光のレンズの中に、何かが浮かび上がってきている。

何か……映像のような、ものが。

レンズの中に映っているのは――いや、あれは映像じゃない。
実体を持った何かが、レンズの中に出現してきているのだ。
人の、形をした、何かが……
「キンジ……何が起きているの……あれは……誰……!?」
少しだけ目が見えるようになってきているのか、アリアは眉を寄せてレンズを見ていた。
だが、俺は何も答えられない。
レンズの中に存在し始めたものに……
言葉を、失ってしまったからだ。
これだ……！　これが、日本の占文書にある『暦鏡』――時空のレンズだ。実物を前にするのは、僕も初めてだよ」
僅かに興奮の色を含むシャーロックの声が、ほとんど耳に入ってこない。
それほどまでに俺を愕然とさせた、レンズの中にいるものは――
中にいる、人間は――
あれは……！
（――アリア――？）
いま俺が抱きかかえているアリアとは別に、もう1人のアリアがそこにいるのだ！
だが……あのアリアは、髪の色が違う。

ピンクブロンドではなく、金糸のような亜麻色のツインテールを煌めかせている。
目の色も違う。赤紫色ではなく、サファイアのような紺碧の瞳をしてる。
でも、あれは確かにアリアなのだ。長い間パートナーを組んできた俺には分かる。あの仕草や表情は、アリア以外の誰でもない……！
背中の開いた白いサニードレスを着たアリアは、ここからは見えないレンズ外の誰かと楽しげに喋っているようだった。こっちには、まるで気づいていない様子だ。
「アリア君。君は13歳の時――母親の誕生日パーティーで銃撃されたことがあるね」
と告げたシャーロックの言葉に、俺はハッと気づく。
アリアは今でも小柄だから、見た目がそんなに変わっていない。
だが、なんとなく分かる。
レンズの中のアリアは、ここにいるアリアより何となく子供っぽいのだ。
信じがたい事だが……あれは、おそらく……
過去の、アリア……！
'う……撃たれました、何者かに。でも、それが今、何だと……」
シャーロックの声のする方に、アリアが応えている。
「――撃ったのは僕だ」
「！」

俺の腕の中のアリアが、驚きに全身を強張らせるのが分かった
「いや、これから撃つのだ　これはどちらの表現も正しい」
言ってシャーロックは、チャキッ――
左手に構えた拳銃、アダムズ・マークⅢの撃鉄を起こした。
「緋弾の力を以てすれば、過去への扉を開く事さえもできる　僕は3年前の君に、今から、緋弾を継承する」
シャーロック――〝時空を超える男〟が、左手の銃をレンズの中のアリアに向ける
あまりの展開に、俺はもう……俺の目の前で何が起きているのか、今く分からなくなるだが、それでも、本能的に――
「や……やめろ！」
駆け出す！
シャーロックを、止めようと
あのアリアを、撃たせまいと。
過去のアリアを収めたレンズに向けて、俺は駆けた
「なに、心配には及ばないよ　僕は銃の名手でもあるんだ」
とうシャーロックに、レンズの中のアリアはまだ気づいていない。今くの無防備だ
「アリア！」

ムダだと分かっていたが、叫ばずにはいられなかった。

「アリア！　――避けろッ！」

その声が――

聞こえたのだろうか。

レンズの中のアリアが、きょと、とその蒼い目を丸くする。

そして……こっちを向き、俺と、目が合う。

そのむき出しの背が、シャーロックの方に向けられている。

『――あたし、ここであんたと会ったことがある　』

この格納庫に入った時にアリアが言ったセリフが、俺の頭をよぎった時――

パァ――ン……！

乾いた音が、上がった。

レンズの中のアリア、その背中の左側をシャーロックが撃ち……

間近から『緋弾』を撃ち込まれ、驚愕の表情で倒れてきた過去のアリアは――

レンズごと薄れ……

フェードアウトする映画のように、消えて、いった。

「……！」

アリアに伸ばした手が空を切り、俺は前のめりにつんのめって――鋼鉄の床に、倒れる。

ああ……

そうか……それで、アリアは――

――あの、緋色の光を使うことができたのか。

アリアは……13歳の時に銃撃された際の弾が、まだ体内にあると言っていた。

それはシャーロックが、緋弾の力で過去への扉を開き、今、撃ち込んだ……

――『緋弾』、だったのだ……！

「アリア君――2つ、ことわっておこう。緋弾の副作用についてだ。緋弾には延命の作用があり、共に在る者の肉体的な成長を遅らせる。あれから君は、体格があまり変わらなくなったことだろう。それと文献によれば、成長期の人体にイロカネを埋め込むと――体の色が変わるらしいのだ。皮膚の色までは変わらないようだが、髪と、瞳が、美しい緋色に近づいていく。今の――君のようにね」

講義でもするかのようなシャーロックの声を……

過去のアリアを守れなかった俺は、倒れたまま、ただ聞いていた。

「以上で、僕の『緋色の研究』に関する講義は終わりだ。緋弾について僕が解明できた事は……これで、全てだよ」

アリアの方を見ながら……延命の力があるという緋弾を失ったせいか、いきなり何歳か歳を取ったように見えるシャーロックが言った。

「キ……キンジ……キンジ？　大丈夫!?」

アリアは目を擦りながら、よたよた、とこっちに駆けてくる。

俺が撃たれたのかと思って寄り添ってきたアリアは、その日が少し見えるようになってきているらしい。だが　――ギリギリ、過去の自分が撃たれたところは見ずに済んだようだ　何が起きたのか、まだよく分からないという顔をしている。

「アリア君、キンジ君。『緋色の研究』は……君たちに引き継ぐ。イロカネ保有者同士の戦いは、まだお互いを牽制しあう段階にある。しばらくは、その膠着状態が続くだろう。だが戦いはこれから本格化し、君たちはそれに巻き込まれていくかもしれない。その時はどうか、悪意ある者から緋弾を守り続けてくれたまえ――世界の、ために」

まるで授業を終えた先生のような口ぶりで、シャーロックが語りかけてくる。

俺はその姿を……睨み上げた。

世界……だって？

もうやめろ。

これ以上――これ以上、余計なことを言うな。

これ以上、アリアの運命を――弄ぶな！

「ふざけんな……！」

もう今は35歳ぐらいに――教科書に載っていたぐらいの歳に　――見えるシャーロックを前に、俺は立ち上がった。

その時、体内にあのドス黒い――ヒステリア・ベルセの血が再び巡り始める。

「シャーロック、お前は……そんな危険な戦いにアリアを巻き込ませるつもりなのか！　自分の……血の繋がった、曾孫を……！」

――兄さんが言っていた。ヒステリア・ベルセとは、通常のヒステリアモードに、自分以外の男に対する衝動的な怒りや憎悪といった感情を重ねることで発現するものだと。なるほど。今が、ちょうどそんな気分だよ。

許せねえ。絶対に。アリアを道具のように使い、その運命を弄ぶ、この男だけは――！

「キンジ君。君は、世界におけるアリア君の重要性が分かっていない。1世紀前の世界に僕が必要だったように、彼女は、現代の世界に必要な重要人物なのだ」

「――違うソー」

俺はアリアのように犬歯を剥いて、言い切った。

――言い切ってやる。ここは。

「こいつはただの高校生だ！　俺は、それをよく知ってる……！」

俺はアリアを後ろに退かせるように、手で押し下げた。

「コイツは――たとえ体の中に何を抱えてようと、ただの高校生だ！　クレーンゲームに夢中になって、ももまん食い散らかして、テレビ見てバカ笑いしてる……ただの、高校生なんだ！　分かってねえのは、シャーロック――お前の方だ！」

「……認めたくない気持ちは分からないでもない。君は彼女のパートナーなのだからね。だが、キンジ君。この世に悪魔はいないにしても、悪魔の手先のような人間はいくらでもいるのだ。この広い世界には、君の想像も及ばぬような悪意を持つ者がイロカネを――」

「俺は、世界なんてものに興味はねえー　悪意も善意も知ったことか！」

半ば意地になって叫ぶと――

シャーロックは黙って、静かにその目を閉じた。

そして……

「……それが、世界の選択か……」

そう呟いて、こっちに背を向けた。

まるでもう、自分は部外者だとばかりのように。

「……それなら、平穏に生きるといい。君は、そういう選択もできるのだよ。その意志を貫くためにアリア君を守り続けて――平穏無事に、緋弾を次の世代に継承しなさい。全て、君たちが決めていいんだ。そしてその意志は通るだろう。

なぜなら君たちはもう、十分強いのだから。

いいかいキンジ君、意志を通したければ、まず強くなければいけない。力無き意志は、力有る意志に押し切られる。だから僕は君たちの『強さ』を急造するために、イ・ウーのメンバーを使ったのだよ。君たちがギリギリ死なないような相手を段階的にぶつけていく、武力の急騰という手法を用いてね」

……シャーロック……

何もかも……！

あれもこれも、全部、お前が描いた絵だったって事かよ……！

俺は歯ぎしりしてから、改めてヤツを睨み付けた。

とうとう俺の全身に、ヒステリア・ベルセの血が回りきる。

知らないぜ。ここからは。もう――どうなっても。

どうなってもいい、気分なんだ。

「……武偵憲章3条――『強くあれ。但し、その前に正しくあれ』」

「……？」

「強くなければ意志が通らない。それは正しいさ。だが、正しくなければ意志を通してはならない。それが武偵のルールだ。お前は、その逆をやってる。天才の頭脳と強大な力で、自分の自己中にアリアを巻き込もうとしてるんだ」

「――そうかもしれない。でも、僕にはそれができた」

「そうはさせねえって言ってんだよ、この俺がな」
「それなら、さっきも言ったように　そうしなければいい」
禅問答のような言葉を残して、シャーロックは――壁に突き立ったままの剣を、ズノ、ズズズッ――キンッー　と抜き、それを手に……コツ、コツ、と歩き出した。
そして、白煙を噴き続けるＩＣＢＭの一本へと去っていく。
それを待っていたかのように、格納庫の天井ではハッチが開いていった。
ハッチからは――
空が、見える。
「待て。それで終われるか。こっちを向け」
一層強まる噴射炎と流れ込む外気で乱れていく気流の中――
俺は、シャーロックを呼び止めた
「何だい」
さっきより若干低くなった声で、シャーロノクが背中越しに応える
「俺は、キレたぜ」
――チャキソ――
掌の中で――バタフライ・ナイフを、開く。
「どんな理由があろうと、お前はアリアを撃った。自分の曾孫を、背後からな」

「そうだ。しかし、だからどうするというのだね。君は、僕に、勝てない」
「勝てないだろうな。だが、一発はお返ししてやる。武偵は義理堅いんでな、パートナーが一発もらったら、一発返すのが決まりだ」
「できるつもりかね」
「できる。『桜花』――絶対に躱せない、撃でな」
「……僕にも――推理できないものがある。どうやら君のその非論理的な行動は、それが遠因なのかもしれないな」
「何だそれ」
「若い男女の、恋心だよ」
――っ……！
自分の背後でアリアがどんな顔をしてるのか、想像したくもなくて――
俺は、再び駆けた。
もう、がむしゃらに。
俺には一発の銃弾も残ってない。体だってズタボロだ。
だが、一撃入れる。絶対に。
それだけを考えて……このナイフを振るえッ！
（この距離なら――出来る……！）

昔、やり方だけを考案した自損技、『桜花』。散った桜の花が、一度と元の枝に戻れないように、一度使うと、二度目は無い　相打ち狙いの技。
シャーロックは推理の神。それを超すには、シャーロックどころか兄さんでも知らないこの隠し技を出すしかないだろう。
俺はまず最大速で敵に駆けて、時速36㎞を造り出した
――この桜吹雪――散らせるものならソー――
ヒステリアモードの反射神経は、爪先で時速１００㎞、膝で２００㎞、腰と背で３００㎞、肩と肘で５００㎞、手首で更に１００㎞の瞬発的な速度を生み出すことができる
それらを――ほんの　瞬でいい、全く同時に動かせば――
合わせて時速、１２３６㎞――
超音速の一撃に、なるんだ！
「散らしてみやがれッ！」

――パァァァァァァァァァンッ!!

俺のバタフライ・ナイフから、銃声にも似た衝撃音が上がった
兄さんが大鎌でやったのと同じように、ナイフの先端速度が音速を超え――

ナイフの背から、桜吹雪のような円錐水蒸気が放たれる。
同時に、超音速による衝撃波で引き裂かれた俺の右腕から鮮血が飛び散った。
――まるで、血にまみれた桜の花びらが散るように――
「うおおおおソッソ！」
これは右腕を犠牲にする、最大最後の一撃。
人間には躱せない。絶対に。
それは、剣を手に振り返ったシャーロックも見抜いたようだった。躱さない。
その代わり、刃めがけて左拳を突き出してきた。

――バチイィッッノ!!

そう。シャーロックは、躱さなかった。
受け止めたのだ　自分が最も得意とする技――格闘技――で
――真剣白刃取り――その、片手版。
かつてジャンヌ戦で俺が見せたのと同じ、人差し指と中指による白刃取りだ。
「惜しかったね、キンジ君――」
さっきのアリアと同じセリフを言ったシャーロックが、反撃の一閃を振るってきた。

こっちの左胸に迫ったその剣を、俺も――バチイッ！　と音を立てて止める。
同じく、人差し指と中指による――片手白刃取りで。
「惜しくねえよ」
残念だったな、シャーロック。
その白刃取りは、あんたの曾孫が俺に教えてくれてるんだよ。何ヶ月か前の、殺人的な特訓でな。
――俺とシャーロックは、互いの刃を互いの手で止め合う形になった。
これはさっきのアリアとの戦いと同じ、千日手。
俺とシャーロックは今、どちらも動けない状態になったのだ。
そこで俺は右腕に走る激痛を無視しながら――深く、深く、息を吸い込んだ。
「――そう来ることは――」
そして、大きく頭を後ろに反らす。
「分かってたんだからなッ！」
「――！」
最後の最後に、シャーロックが驚愕で顔を上げるのが見えた。
ざまあ見やがれ。
そうだ。

さっきアリアと同じ姿勢になった時には、できなかったけどな。
先祖代々石頭の遠山家に伝わる、本当の隠し技は――これなんだよソー

――ガスッッッッッッ!!

俺の頭突きが、シャーロックの――世界最高の頭脳に、炸裂した。
……!!
世界最強の名探偵は、ぐら、と、真後ろに頭を倒し……
右手の刀、左手のナイフを放しながら、ゆっくり、ゆっくり、倒れて行く
シャーロック　恨むんなら、男に生まれた自分を恨むんだな
お前がもし女だったら、こんなに思いっきり叩き込むことはできなかったよ。
ずしん……と、シャーロックの背が鋼鉄の床に叩きつけられた時　同時に、格納庫に流れていた『魔笛』のレコードが終了した。
俺は――深く、息をつく。
走って、撃って、斬って、最後には頭突きまで使い……文字通り五体全部を使い切って、なんとか、倒せたな。
世界最高の、男を

「……アリア」

心を落ち着けてヒステリア・ベルセを制御しながら、俺はシャーロックから視線を外し――俺たちの戦いを呆然と見守っていたアリアに、振り返った

アリアは……俺に駆け寄ってくると、ズタボロになった右腕に触れてくる

「キンジ……腕……こんなに傷が……」

「アリアが傷つくより、ずっといいさ」

初めて会った時も、似たような事を言ったな。同じ、このヒステリアモードで。

そんな事を思いながら、俺は稲妻形の傷が何本も走った右腕を左手で隠した。

アリアは「バカ……！」と小さく言うと、俺の胸に顔を埋め……

超偵用の手錠を取り出し、倒れたシャーロックの元にひざまずき――もう、目は見えるらしい――一瞬、ためらってから……

「曾お爺さま……いいえ、敢えてこう呼びます……シャーロック・ホームズ」

じゃきん。

その手首に、輪をかけた

「――あなたを、逮捕します……」

これにて……

一件落着、だな。

「素敵なプレゼントをありがとう。それは曾孫が僕を超えた証に、頂戴しよう」

――!?

頭上からかけられた――しわがれた声に、俺とアリアは慌てて顔を上げた。

そこには、ＩＣＢＭの１基――その先端に開け放たれた扉に掴まって――

さっきの頭突きで額から流血しつつも、笑顔で小さく手を振る――

とうとう白髪交じりになった、シャーロックの姿があったのだ！

「キンジ君。さっき君にもらった一撃は、僕にも推理できなかったよ。さっきまでの若い僕なら、とっさに推理できたろうけどね。まあ、歳には勝てないということかな」

――！

倒れている方のシャーロックに視線を戻すと、その右腕が――

ざあっ。

砂金になって、崩れ落ちる。

そして左手でアリアの手錠を放り上げ、頭上のシャーロックにパスした。

――しまった　！　詰めが、甘かった……！

シャーロックは、俺がアリアの方を向き、アリアが俺の傷に目を奪われたスキにパトラの技で作った砂金のダミーを置いて、ＩＣＢＭに飛び移っていたのだ！

「シャーロック、どこへ行くんだ……！　お前はもう、今日までしか生きられないんじゃ

ないのか……！」

「どこにも行かないよ。昔から言うだろう？　『老兵は死なず。ただ、消え去るのみ』と。さあ、卒業式の時間だ。化火で彩ろう　ー」

シャーロックがＩＣＢＭの内側に入っていくのを見上げて、俺は気づく。

イ・ウーの奴らは海水気化魚雷を、オルクスという小型潜航艇に造り替えていた

それと同じように、このＩＣＢＭも、ミサイルを元にした　乗り物……！

「曾お爺さま――待って！」

俺の横から飛び出したアリアが、白煙をかき分けるようにしてＩＣＢＭに駆け寄る。

「行かないで……！　いや……いや……！　あなたのこと、ママのこと、もっともっと、話したい事が……！」

「アリア！　もう追うな！　あれはもう飛び立つ！　危険だ！」

後を追う俺の声に聞く耳を持たず、アリアは背中から小太刀を逆手で２本抜いた。

そしてラグビーのタックルダウンのようにジャンプし、ＩＣＢＭの表面に刀を突き立てる

「――アリア！」

「……曾お爺さまっ！」

がすっ……！　がすっ！

左右の刀を交互に突き刺しながら、アリアはロック・クライミングのようにＩＣＢＭを

よじ登っていく。

「――アリア君」

その遥か頭上から、閉じかけの扉に足をかけたシャーロックが語りかけた

「知い間だったが、楽しかったよ　なにか形見をあげたいところだが、申し訳ない　僕は……もう、君にあげられるものを何も持っていないのだ」

「……御お爺さま……」

「――だから、名前をあげよう、僕は『緋弾』という言葉を英訳した二つ名を持っている緋弾のシャーロック』――その名を、君に」

「名前……」

「さようなら　――緋弾のアリア――」

その言葉を最後に、シャーロックはハンチを閉じ

振動するＩＣＢＭが、ゆっくり、ゆっくりと　――

その巨体を、持ち上げ始めた

やッ――やばいぞ。

アリアはまた、ＩＣＢＭに張り付いたままだ。

それも、もう飛び降りれないような高さまで登ってしまっている。
（……クソっ！）
腕の痛みに歯を食いしばりながら、俺は砂金に戻った偽物のシャーロックが持っていた剣を拾い、自分のナイフ共々――ザクッー　と、ＩＣＢＭの壁面に突き立てる。
どうやら液体酸素と液体水素の燃料タンクが内蔵されているらしいＩＣＢＭの本体は、格子組み床の下方に見える噴射炎とは裏腹に冷たく、薄い氷が張り付いていた。
だが、人が乗るためにか過度には凍り付かないようになっている。
「アリア！　降りてこい！」
「――いやよー　曾お爺さまが、どこかへ行っちゃう……！」
「もうダメだー　降りろ！」
頭上から――水滴が、落ちてくる。これはアリアの涙か。それともＩＣＢＭから剥離し始めた氷が溶けたものか。
俺はアリア同様、ナイフと剣を手がかりにしてＩＣＢＭを登っていく。
右腕の裂傷から、どんどん血が流れ落ちていく。
耐えろ……耐えるんだ、キンジ……！　意識を、保て……！
ズズ……ズズズズ……と、ＩＣＢＭの巨体が浮き上がり始めた。
飛び立ちつつあるのだ。空へ。

このままだと、本当に戻れなくなるぞ！
そう思った時――ＩＣＢＭは俺とアリアを張り付かせたままイ・ウーの背から、外へと、せり出していく……！
「……！」
ここで手を離せば、まだ助かる。甲板に叩きつけられて重傷で済むだろう。
だが――アリアが……！　シャーロックがどこか死出の旅に向かおうとしていることを察して、我を失っているのだ。
あいつだけ行かせるワケにはいかない。
（――アリア！　あの……バカっ！）
絶対に、引き戻してやる。
あの世だかどこだか知らねえが……そっちに　一連れて行かせはしない！
甲板の発射口から撃ち出されたＩＣＢＭは、みるみるうちに加速していく。
まっすぐ、まっすぐ、天を目指して。
僅かに見下ろしたイ・ウーが、もう掌で隠せてしまいそうな高度で
俺は、もう少しでその細い足を掴めそうな位置までアリアに迫り……
（うっ……！）
そこで、身動きが取れなくなった。

なんて……スピードだ！
この推力、尋常じゃない。
ジェットコースターなんてレベルじゃない
風圧で呼吸ができなくなる。突き刺したナイフと剣を離さないようにするので精一杯だ。
それはアリアも同じらしく、もう、ただ刀に掴まってひたすら耐えている状態だった。
ピンク色のツインテールが、風に引きちぎられそうになびいている。
速度だけじゃない。
ＩＣＢＭは高度も、みるみるうちに上げている。もう、イ・ウーが……みえない……！
「――――！」
ボンッ――――！
という音と共に、ＩＣＢＭは雲に突っ込んだ。
一気に、視界が真っ白になる。顔面に微細な氷の粒がぶつかり、もう目が開けられない。
雲を突き抜けて飛び出た青空は凍てつくように寒く、空気が乾燥しきっていた。
薄く開けた目には、雲の間に白い二日月が見えて――俺たちはそれを飛び越えるようにさらに加速し、高空へと連れ去られていく。
地平線が、丸く弧を描いて見え始めている。あれは　―地球の丸み――
（ど、どこまで昇る……！　もう、限界……だ……！）

空気すら薄れ行く高々度の世界で、俺は――氷の張り付いた自分のまつ毛の向こうに、まるで白龍が天に昇るような雲の航跡を見た。1、2、3――7つ。

（……あ……あれ、は……！）

あれは、ロケット雲だ。イ・ウーから発射されたのであろう俺たち以外のＩＣＢＭが、いま、全て空を駆けている。四方八方に向けて。

あれは、乗り物――つまり、誰かが乗っているのだろう。

そう、イ・ウーの残党が――！

それに気づいた時、がきんっ！

シャーロックの刀と、続けて俺のバタフライ・ナイフが、ＩＣＢＭから外れた。

（あっ――）

と思った時には、もう、投げ出されていた。

アリアの刀も同様に限界を迎え、ＩＣＢＭから抜けてしまう光景を最後に――

俺は背を下に向けて、転落していた。

ほんの数秒ほどで、上昇するＩＣＢＭは視界から遠ざかり――みるみるうちに、小さくなり――ただ、その噴射炎だけが星のように見えるのみとなった。

その星から、かわりにアリアが落ちてくるのが見える。

　空から女の子が降ってくると思うか？　――

青空を背にしたアリアは空中で身をよじるようにして、ＩＣＢＭに背を向け――
俺の方に、手を伸ばした。
同時に落下する２人の距離は、目測で30ｍほどある。
俺は背中を下に向け、空気抵抗を増して減速する。
アリアは頭を下に向け、加速してくる。
２人の距離が、縮んでいく。

　――それは不思議で特別なことが起きるプロローグ　――

アリアが、降下しながら近づいてくる。
その右手を、俺へ向けて必死に伸ばしている。
俺も血まみれの右腕を伸ばし、空中での姿勢を保とうと必死にバランスを取る。
空中をダイブしながら、手と手を、あと１ｍの距離で伸ばし合う――

届け……届けー

あと、50センチ――！

あと30、もう少し……あと、10センチ――触れる――あと少し――！

「……キン……ジ……！」

「……ア……リア……！」

手と手が、繋がった。

ぐっ！　と俺はアリアを空中で引き寄せ、アリアは空を滑るようにして俺に近づき――上下互い違いの状態で、思いっきりしがみついてくる。

あの始業式の朝、チャリジャックの時に初めて抱き合ったのと同じ姿勢で。

次の瞬間、ぼふんっ！　俺たちは流れ雲に穴をあけるようにして突っ込んだ。

――現実のそれは危険で、面倒なことに決まってるんだ――

ぱっ――と、再び視界が開ける。

雲に揉まれて姿勢の変わった俺とアリアは、頭を下にして抱き合い、遠い海面めがけて落ちていた。当たり前の事だが、この高さからじゃ……もう助からない。

人間が自由落下すると、速度はだいたい時速２００kmぐらいで安定する。

その速度で叩きつけられると、水面はコンクリートのように堅くなるのだ。

だが俺、遠山キンジは

こいつのためになら、この身を危険に晒してやろうと思う。

おそらく、世界中の男たち……世界中の、主人公たちと同じように――！

「キンジ……！」

落下しながらのアリアが、俺の耳元で語る。

「こんなことに付き合わせて――ごめんね」

「ハッ――なにを、今さら」

俺の声は、もうヤケクソ気味だ。

「ありがとう。ありがとう、あたしのパートナー」あたしは、あんたを誇りに思う――

改まった顔で言ったアリアは、その赤紫色の瞳でまっすぐ俺を見つめていた。

「曾お爺さまが言った通り……これは『序曲の終止線』。終わりで、始まり。今、探偵の時代は終わって――これからはあたしたち、武偵の時代が始まるのよ。

そして――武偵憲章10条――諦めるな。武偵は決して、諦めるな。

キンジ、正直に言うわ、あたしはイ・ウーで……何度も諦めかけた。あんたと戦う前は、

もう何もかも諦めかけていたの。でも、あんたが前を向かせてくれたから、あんたが諦めなかったから……あたしたちは、今！　まだ！　生きてる!!」

言うとアリアは俺の体をひときわ強く抱き　――

眼下の海面が、もうあと10秒ほどで衝突しそうな距離に迫ってきた時……！

「曾お爺さまはきっと、この瞬間が来る事も推理してたんだわ。だからホームズ家の女に、代々この髪型をさせた――」

赤紫色の目を閉じ、何か、集中するような表情をした。

「……理子にできるんなら、きっと、あたしにも……！」

すると……その、ツインテールが。

風圧のせいではなく――大きく、大きく、翼のように広がっていき――

「……ばさっ……！

――！」

俺たちの姿勢が、ぐんっ……！　と、アリアのツインテールがはらんだ風圧に引かれるようにして反転した。

両脚が下を向き、落下速度がみるみるうちに和らいでいく。

アリアが、その長いツインテールを――理子のように自らの意思で動かし、翼のように広げたのだ。

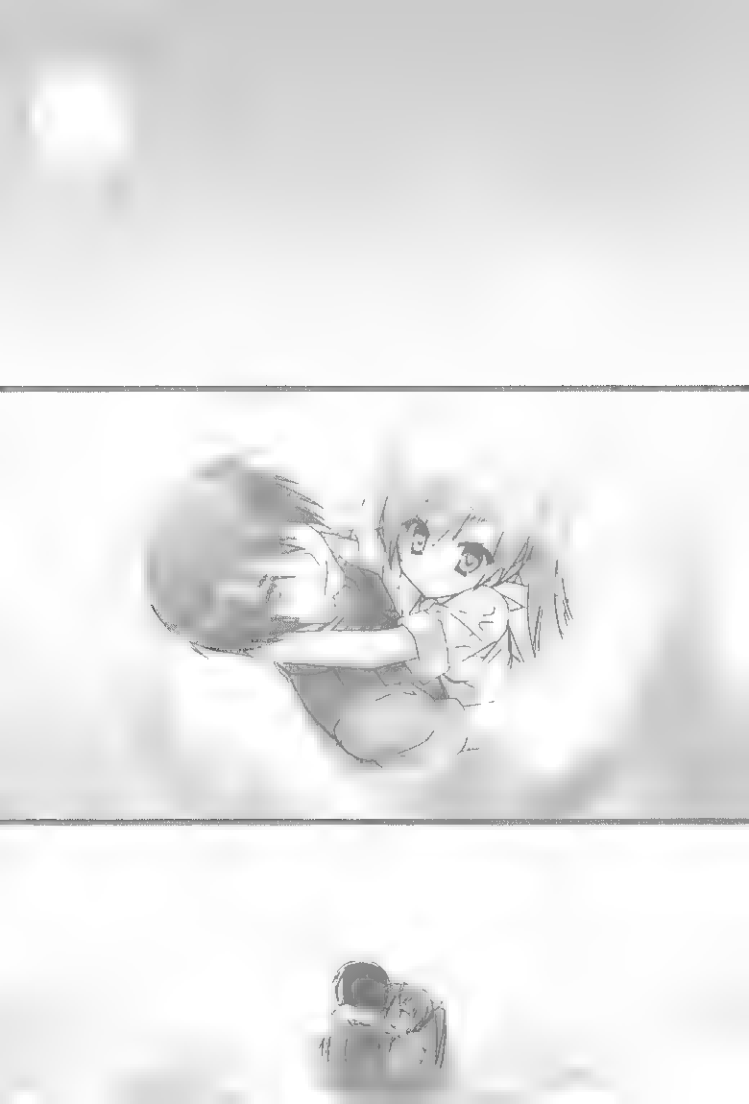
シャーロックに撃ち込まれた緋弾は、理子の十字架と同族の金属だという。
それを聞いていたアリアは、彼女の技をいま使っているのだ。
見様見真似の、ぶっつけ本番で。
「……アリア……！」
すごい……！　この能力が、ではない。
アリアの機転と度胸、そして――勝負強さが、だ。
絶体絶命の状況から、九死に一生を得る道を思いつくひらめき。
今まで一度もやったことがない方法に賭ける、度胸。
そしてそれを実現する、勝負強さ。
はは――アリア
そうこなくちゃ困るぜ。お前は俺の――相棒なんだからな！
「あ、あんまり見ないで　なんかこれ……すごく、恥ずかしい……！」
ばさぁ――
と、まさに翼と化したアリアの髪が、再び風をはらみ。
よっぽど恥ずかしいのか、いつもの赤面顔をしたアリアが「んっ……！」とくぐもった声を上げ、ばさっ。ツインテールをもうひと羽ばたきさせると――
抱き合う俺たちはもう、ただの飛び込みぐらいの速度で降下していた。

見回せば眼下では、救命ボートから自分がこっちを呆気に取られたような顔をしていた
そのボートの縁にはパトラと、彼女に抱かれて半身を起こしている兄さん　よかった、
命を取り留めたらしい――も、驚いた表情でこっちを見上げていた
「き、キンジ　やっぱりあたしにもあんたが必要だわっ　ぶ、武偵憲章1条！
着水を間近にして
アリアのアニメ声が急に、ちょっとマヌケな震え声になった
「1条……＝仲間を信じ、仲間を助けよ＝……か？」
「そ、そうよっ。だからキンジ」
ざぶん
「と、とりあえず浮き輪になりなさい！」
俺とアリアは無事、着水し――
コアラみたいにしがみついてきたアリアに苦笑いしつつ、少し潜った海中から上を見る
と――
そこには、きらきらときらめく太陽が、銀の針のように輝いていた
空でアリアが言った通り……これは、終わりではなかった

イ・ウー事件を機に、アリアは新たな強敵や仲間と出会い――今まで以上に過激な日常へと飛び込んでいくことになる。そして残念なことに、パートナーの俺もなそう。俺たちは、これから思い知ることになるのだ。

――ここまでは『緋弾のアリア』の、ほんのプロローグに過ぎなかったことを。

The End of JUST a Prologue."



再装填1　粉雪、白雪の妹

……チュン、チュン……

窓から聞こえる雀の声に、俺は武偵病院のベッドで目を覚ます。

パジャマみたいな病院着で上体を起こし、稲妻のような疵痕が残った右腕でリモコンを操作してテレビをつけた。文字放送の画面で、今日が――8月22日だと分かる。

あの悪夢のような戦いから、もう1ヶ月近くも経ったわけだ。

（……今日、退院か……）

寝ぼけた頭でニュースを見ながら、あれからの事を思い出す。

イ・ウーから生還した俺たちは、白雪が浮かべていた救命ボートに拾われ……数時間後、救助に来た車輌科秘蔵の水上飛行機に乗せてもらった。

武藤が運転する機体は1日がかりで台場沖まで帰って、半ば眠るように気を失っていた俺はそのまま救護科に隣接する武偵病院に運び込まれたそうだ。

イ・ウーがその後どうなったのかは……知らないし、知りたくもない。

――もう、あの組織の事は考えたくない。

どうせヤツらはリーダーを失い、バラバラになったのだから――！

あの後、俺の病室には政府関係者を名乗る黒服男が武偵高の先生と一緒にやってきて、イ・ウーの話を根掘り葉掘り聞いてきた　そして「事後処理は我々が行うから今回の事は永久に他言無用」と言い残して去っている。多分、彼は法務省の武装検事だろう。

それと、兄さんとパトラは――まあ予想していた通り　――東京から姿を消した。

どこに行ったのかは知らないが、願わくば仲良く平和に暮らしていて欲しいところだ。

そして、俺は……

反省しきり、だな。イ・ウーの件については。

パートナーのためとはいえ、本気を出しすぎた

（ダメだぜキンジ、このまま流されてたら……）

ヒステリアモードが覚めて冷静になってからは、自分が冒した危険の数々にゾッとした。

今回みたいな事をやってたら、本当に命が幾つあっても足りないぞ。

もう――本気は出さない。ヒステリアモードも自重する。そうやって、今度こそ平和な日常を享受する『平凡な高校生』に一歩ずつ近づいていくんだ。

――その、思いと共に

俺は退院し、新たな日常への一歩を踏み出すのだった。

今、アリアはイ・ウー関連で出突っ張りだ。冤罪で囚われている母親の裁判に向けて、

証拠集めやら弁護士との打ち合わせやらで多忙を極めているらしい。
とはいえ、見舞いにも来なかったのはいかがなものか、いや、俺のヒステリアモードを引き起こしやすいアイツが来ないのは良い事なんだが――ちょっと、冷たいよな。
で、その隙に動き出したのが……
「キンちゃん、ご退院おめでとうございます！」
俺の幼なじみ――白雪だった
病院のロビーを出ると、制服姿の白雪が90度ぐらいの深ーいお辞儀で俺をお出迎えした。
顔を上げると、その黒い瞳がうるうる…　と、嬉し泣きなのか潤んでるぞ。
「あ、ああ。ありがとな、白雪」
入院中、白雪は本当に俺によくしてくれた。
ほぼ毎日つきっきりで看病してくれただけでなく、自分でも本格的な漢方薬を材料から作ってくれたり、一般科目の宿題を手伝ってくれたりと、本当に献身的だったのだ。
まあ……ウェストや脚の長さを計らせた覚えもないのに俺の体型と1ミリの狂いもない制服を新調していたり、気がついたら俺の携帯からアリアのアドレスが削除されてたりと、なんだか空恐ろしい事象も色々起きたんだが……その辺は追及しないでおこう。
……そういえば白雪が作ってくれてた漢方薬の材料、あれ、小香港の紙袋に入ってたな。
お前、台場まで一人で行ってこれたのか？」

星伽神社の箱入り娘・白雪は、学校と神社以外への外出を実家に禁じられている
昔は武偵高から出るモノレールにすら乗るのをためらっていたものだが、最近はその辺、少しは成長したのかな。

「う、うん。最初はちょっと不安だったけど、ちゃんとお買い物できたよ。だって、私はキンちゃん専属の看護婦さんだもん。キンちゃんのためなら、何でも平気なの」

ものすごーく幸せそうに言った白雪は、思わず笑顔になってしまうのを隠すように両手でほっぺたを押さえた。

……専属の看護婦さん、って。

そんな契約した記憶は微塵もないんだが……まあ（どうでも）いいや。

ちなみに白雪には、『俺はイ・ウーや緋弾の事については何も聞きたくないから、何も喋るな』と言ってある。俺が入院したての頃はあれこれ説明をしたそうな顔をしていたが、今はあの戦いの事はきちんと避けて会話してくれている。

俺はそんな白雪と、学期に向けた話なんかをしつつ、武偵高の校舎の間を歩いていった。

そして……ふと教務科の掲示板が目に入り、足が止まる

「……!?」

お……おい!?

俺は貼られていた赤字の『警告！』の紙に飛びつき、目をゴシゴシ擦り、もう一度見る

み、見間違いじゃない。こ、これは……！
愕然とする俺に気づいた白雪も、掲示板を見て……「！」と目をまんまるにしてる。

『　8　20時点での単位不足者　遠山金次　専門科目（探偵科）　1単位不足　』

ちょっ……おまっ……なんだよこれ！
俺、ちゃんとカジノ警備しただろ！
と思って詳細を見ると、『カジノ・ピラミディオン台場の警備任務は、営業を円滑に継続させるには至らなかったため評価を半減（端数は切り上げ）する』とある。
お、おいおい……！
残り……1単位、夏休み中に取らないと……留年、しゃねえか……！
「き、ききキンちゃん！　た、たた単位が！　たたたんたんたん！」
俺以上にパニクっている様子の白雪は、しばらくオロオロアタフタしてから……
ぴらっ！　と武偵手帳を開いた。
そして、さらさらさらっ。血相を変えて、ちっちゃな筆ペンで何やら書き込んでるな。
「……」
あんまり必死に書き込んでるので、ちょっと不安になり……覗き込むと　…

絶対必須！

←

単位を取る→一緒に進級→一緒に進学→一緒に武偵企業に就職→女→赤ちゃんを産む→
7～8人産む→全員キンちゃん様にソック

などと空恐ろしい人生計画がビッシリ書かれたページが一瞬見えたような気がしたが、字が達筆すぎてよく読めなかった。

繰り返すが、読めなかったことにする！　俺は何も見てないぞ！

……読めなかったことにする！　俺は何も見てないぞ！

ぐりぐりぐりぃー！　と筆ペンが折れそうな勢いで『単位』『絶対必須』という文字を花マルで囲んだ白雪は、ばしぃ！　と決意に満ちた表情で手帳を閉じ……

しゃきん！　いきなり背筋を正してこっちに向き直ってきた

な、なんだよ

「き、キンちゃん！　まだ夏休みは10日あるよ！　1単位、なんとかしよう！」

「あ、ああ　そうしないとマズそうだな」

冷や汗を拭う俺に、白雪は拳を握りしめて『えいえいおー』の仕草をする

「私、全力で協力します！　キンちゃんと入籍……あ、えと、進級するために！」
ピ……どうやったら入籍と進級を言い間違えられるんだ　1文字も合ってないぞ
だが、さっきのよく読めなかったメモ書きの事はどうあれ、この優等生さんが手伝ってくれるのは心強いな　なにせ、これはある意味イ・ウー戦以上の大ピンチなんだ。
掲示板を見渡すが、武偵高が斡旋する緊急任務は売り切れている
というわけで俺たちは情報科にこもり、夜までかかって民間の仕事を探してみたが……探偵科の単位になりそうな近所の仕事は、だいたいプロの武偵が請負済みだった。
（……マズいな、本格的に……）
俺と白雪は、引き続き自室のPCで検索してみようということで男子寮に帰った
――そこで、更なる問題が待ち受けているとも知らずに

「……？」
蛍光灯の下、部屋の前で俺たちを迎えた後ろ姿は――
五芒星の家紋が入った風呂敷包みを背負い、赤い唐傘を日傘にした、黒髪セミロングの……白雪……が、もう1人？
いや、白雪を小型化したような巫女装束の少女が、そこにいたのだ
「やはり、私の悪い予感は当たっていたのですね」

くるり。

振り返ったその少女は、俺をいきなり睨み付けてきた。

ぱっつん前髪も白雪と一緒だが、その下の月つきはもう少しキツめだな。

なんか俺たちの事を知ってるみたいだが……だ、誰だっけ。この子。

「粉雪!?」

引きまくりの俺の横から、白雪がビノクリした声を上げる。

「こな……ゆき？」

粉雪ちゃんか!? あの星伽神社にいた、白雪の――妹の！

俺は子供の頃の記憶を頼りに、6人もいる白雪の妹たちの顔を思い出していく。

霧雪、華雪、風雪……白雪の妹たちはみんな白雪とソックリなので、歳かさで見分けるしかなかったのだが――この粉雪だけは義理の妹で、顔つきや行動パターンが違った。

確か物凄いお姉ちゃんっ子で、いつも白雪にオンブお化けみたいについて歩いてたっけ。

「……粉雪か！　いやぁ、大きくなったな。白雪とは2つ違いだから、いま中3か？」

と、俺が親戚のオジサンみたいな発言をすると……

粉雪はその俺をスルーして、ぐぐい、と白雪の腕を抱いた。

「やっぱりお姉様は、私が『託』で予見した通り――この悪しき武偵高で、魔性の武偵・遠山様に誑かされていたのですね！」

――『乱』で。

その言葉に、俺は再会の驚きもそこそこに昔聞いた星伽の占いの話を思い出す

星伽巫女の占いには、意図的に何かを占う『占』と、突然予感が訪れる『乱』がある

たしか……『乱』は内容が自分の知りたい事とは限らない不便な術で、十代前半ぐらいまでの幼い巫女が使うものだったな、

キノー と俺を睨んだ粉雪は、次に白雪を至近距離から見上げて、

こんなに遅くまで男性と遊び歩くなんて、お姉様は不衛生です！ あ、あんなに清廉で星伽巫女の鑑とまで言われていたお姉様が……よりにもよって、男性と一 夜遅くに！」

ガミガミ！ と、叱り始めた

え、え、とタジタジしている白雪を横目に、俺は腕時計を見る

まだ、9時だぞ。

「いいだろまだ、外出したって……」

と、時計を見せるようにして言うと、

「な、なんていやらしい……！ 遠山様は不衛生です！

何がだよ！ とツッコむ暇さえくれず、粉雪はこっちをビシッと指さしてきた

「お姉様の門限は5時です！ そして8時には就寝です！ これは星伽の決まりです！」

5時って 今日日、小学生でもそんな時間には帰らないぞ

だが、これにもソッコむ暇を与えてくれず――粉雪は白雪のポケットからカードキーを出して、扉を開けてしまった。俺の部屋の
「さぁさ、お姉様、こんな堕落した男の妄言に聞く耳を持ってはなりません！　すぐ室内へ、そしてお湯あみです、御褥ですっ　何はさておき、お背中をお流しいたしますぅ～」
まごつくばかりの白雪を室内に押し込むと、粉雪は扉を閉じながら振り返って……
引きまくりの俺に、ベロを出してくる
「――日の刻参りしてやりますわ！」
俺にそう言い残すと、粉雪は、ばしん！
取っ手が歪むような勢いでドアを閉じ、がちゃん、と中からカギまでかけてくる
「あ、いや……ここ、俺の部屋なんだが……」
そしてそこには、自室から閉め出された哀れな男だけが残された

いや、まあ、俺もカードキーを持ってるから部屋には入れるのだが……
何やら2人して風呂に入るような事を言っていたので、俺は時間を潰すためコンビニでマンガ雑誌を立ち読みし、立ち読みしただけじゃ悪いので1冊買って寮へと帰る
なんか、昔もなかったか？　こういうこと　まあいいか
それにしても……性格はともかく、キレイになってたな　粉雪

俺の記憶の中の粉雪はほんの子供だったが、今は立派な美少女に成長していた　どちらかと言えば、ちょっとツンツンした……アリア系の
幼い頃から端正な顔つきをしてたから、成長して美人になるのは納得がいくけどな
ヒステリアモード爆弾を抱える俺的には、あまり嬉しくない事だよ
そして、その粉雪に叱られていた白雪……『星伽』と聞いて随分おとなしくしてたな
普段の白雪は俺に敵対しそうな相手には誰彼構わず襲いかかるから、俺はそれを止めるのに四苦八苦するものだが　……さっきの白雪は、まるで悪い事をしていたのを見つかって叱られる子供みたいに神妙にしてた
あれじゃあ、どっちが姉でどっちが妹か分からんぞ
というか、『星伽』の名の前では――白雪はまだ良い子ちゃんぶる癖が抜けてないんだろうな　まあ、白雪がいつも以上にお淑やかにしてくれてるのは有難い事だよ　保安上

部屋に帰ると……ぞっ　女2人が風呂に入ったせいか、室内がシャンプーやらリンスやらの匂いで女ぐさい　イヤだなあ
俺は犯罪集団のアジトに潜入するように、物陰からバスルームを確認するが……
よし、もう出た後らしいな。リビングに電気ついてるし。
ノゾキ見するようでイヤだったが、着替え中とかだったら一大事だ　まずは敵情を視察

すべしという武偵のセオリーに従い、俺はリビングルームの様子もこっそり偵察する。
……とりあえず、2人とも着替えは終わったようだ
それが星伽の普段着なのだろう――おそろいの巫女装束を着ているな
うちの狭いユニットバスに妹と一緒に入ったらしい白雪は、普段より一層お淑やかな感じで……つげの櫛で粉雪のぱっつん前髪をすいてやっていた
同じく正座した粉雪は、我が世の春という表情でウットリしている
一見、写真にでも撮っておきたいぐらいに美しい光景だな
「さっきは結局、粉雪に体中を洗ってもらってしまいましたね　小さい頃と逆に」
「いいえ、お礼には及びません　お姉様の御役に立てる事が、私の一番の幸せですからごちそうさまでした」
「ごちそう……？」
「あ、えっと……その、お姉様　私、毎日ごちそうを作りますから　――早く星伽に帰ってきて下さい　粉雪は、お姉様がいないと、いつも淋しくて淋しくて……」
慌てた様子で話題を変えた粉雪に、白雪はちょっと表情を困らせた。
「そして昔のように毎日一緒に祭祀や神楽や、あの喩えようも無いほどにお美しい舞いを手取り足取り教えて下さい　姉妹みんなで並んで膳をいただき、同じ臥所で眠り　ああ、そこでいろんな表情をされるお姉様のことを考えただけで粉雪はもう　：でっ、デジタル

ビデオカメラを購入してしまいますっ　何台もっ」
白魚みたいな指の子で両頬を押さえた粉雪は、キャーという顔をしてワケの分からないことを言い始めている。
よくは分からんが、大好きなお姉ちゃんを前にしてすっかり頭がお花畑モードらしい
「私だけではありません、他の妹たちも皆、お姉様に会いたがっているのです　幼い子はお姉様に会いたいあまり、夜中に泣き出すこともあるほどなのですから」
「そ、そうですか……
言われれば言われるほど、元々少し垂れ目気味の目をしゅんと伏せる白雪
そんな、白雪の切なげな表情に……
粉雪はすっかり朱色に染めていたほっぺたの上で円らな瞳を震わせ、口を半開きにして
激しく萌えたような顔になった　理子品で言うところの
まるで目の前にマタタビを置かれたネコみたいだな
声もなく唇を震わせているので読唇術で解析すると　アア、カワイイ、カワイイ、カワイイ　と何度も呟いてるぞ　年下に対して　なんだあれ　コワイな
粉雪の十指がわきわきと落ち着かない様子で動き始め、そのオシリからにょきにょきとオオカミのシッポみたいな物が生えてきたような錯覚がしたので　：
なんとなく白雪の身に危険が迫ってるような直感がした俺は、

「……お邪魔するぜ」
と、リビングルームに入った。
その途端、ギンッ！　と、ぱっつん前髪の下から粉雪がこっちを睨んできた。
明らかに、『ジャマすんな』という眼だ
そして、ついーん。
そっぽを向いた。
「――どうぞお入り下さい。ただし、入室を許可するのは特別ですからね」
「『特別』って……ここ、俺の部屋なんだが……」
「お姉様のご指示ですから、やむを得ずお入れするだけです」
「いやだから、ここは俺の……」
「男女、7歳にして部屋を同じくすべからず』です！」
ぷいっ。
と正座したまま俺に背を向けた粉雪を見て、白雪は俺の方に「ごめんね、キンちゃん」というカンジに手を合わせてきた。
そういえば思い出したが……星伽神社はかなり徹底した男子禁制の神社だった。なので巫女たちは、なぜか特例で入れてもらえる遠山家の男しか男性を目にする機会がない。
だから白雪を初めとする巫女の少女たちは、子供の頃の俺にも最初は怖々と接していた

記憶がある。しかしそこは子供向上なのですぐ打ち解けていったが、粉雪だけは最後まで俺や兄さんをビクビクと物陰から見ていて……笑顔を見せたことが一度も無かったな。

簡単に言えば、男嫌いなんだろう。女嫌いの俺と逆で。

その説を裏付けるように、テレビをつけた粉雪はチャカチャカとリモコンを操作し……女しか映っていないドラマにチャンネルを合わせていた。徹底してるなあ。

俺も、あのぐらいしっかり異性を避けるべきなんだろうか？

一方、白雪は台所から急須を持ってきて、

「キンちゃん、お煎餅があるよ。粉雪がお土産に持ってきてくれたの」

と、ガラスの座卓の横に正座した。

何か話したいことがあるような顔をしていたので、俺も一応そこにあぐらをかく。

白雪が入れた日本茶を飲みながら、うまい南部煎餅をバリボリと食べるが……背中から殺気を放つ粉雪のせいで、落ち着かないなあ。

「あのねキンちゃん。半日で0・3単位もらえるお仕事が見つかったよ」

ぱき、と小さく割った煎餅を品良く食べた白雪が、笑顔で言ってきた。

「――本当か？」

「うん　教務科に電話で確認したら、各科共通で単位として認められるんだって」

「そ、そんな美味しい仕事があったのか……どんな内容だ？」

「入学希望者の依頼を受けた形にして、粉雪に武偵高の『学園案内』をするの」
粉雪に、学園案内……
「粉雪。お前まさか、武偵高に進学するのか？」
「違います。私は武偵高なんか大ッ嫌いです。ここは、お姉様が星伽を出る原因になった場所ですから」
ドラマで流れているお買い物シーンをまっすぐ見ながら、背中で語る粉雪。
ってことは、粉雪に学園案内をするのは……ヤラセの依頼を受ける形になるわけか。
粉雪はそれっきり、デパートの映像に集中するように黙りこくる。
「キンちゃん、あのね」
テレビに釘付けになってる粉雪を横目に見つつ、白雪が俺に小声で囁いてきた。
「粉雪は、早伽の伝言を届けに来てね……ついでに、できそうなら私を武偵高から連れ帰ろうとしてるみたいなの。だから武偵高ってどんな所で、武偵ってどんなお仕事なのか……少なくとも悪い物じゃないって、あの子にも理解してもらった方が……ご、ごめんねキンちゃん。こんな私の事情も絡めちゃって」
と、白雪は済まなさそうに俺に手を合わせてくる。
ふむ……つまりこの話、白雪の役にも立てるってわけか。
白雪には入院中かなり世話になったからな。その借りを返せるんなら一石二鳥だ。

「……じゃあ、やらせてもらうぞ。粉雪。明日の午前中、付き合ってもらえるな？」
「はい　これは――お姉様のご命令ですから。私はお姉様のご命令には、何でも従います
お姉様のためになら何でも出来き、き、きき」
……？
きき？
「きき、キ……！」
急にバグった粉雪の方を見ると、その向こうのテレビドラマに男が映っている。
しかもなんか、女優とのキスシーンが流れてるな。
「――キー！」
ぶちぃいっ！　粉雪はリモコンが壊れんばかりの勢いでテレビを消すと、出血しそうなほど真っ赤にした顔でリモコンをぶん投げ、俺の顔面に命中させてきた。
「ふ、ふふふ、不衛生ですー　不衛生ですっ！　汚物は消毒です！」
意味不明な事をキーキー喚きながらの粉雪に何故かげしげし蹴られ……
俺は、今回請け負った仕事がちっとも美味しくないことを早くも痛感するのであった
――武偵高の施設は、なにげに充実している。
着工時は羽田空港の増設滑走路にする予定だった人工浮島はとにかく広いし、武偵庁や

武偵企業といった官民からの投資もあるからな。

あと、学科によっては色々な特典があるのもウリの一つだ。例えば車輌科では15歳から普通自動車免許を取れるし、情報科・通信科では最先端のPCや携帯が支給される。

というわけで武偵高を見学した中学生は、割とここを気に入ってくれるものなのだ。

しかし……

翌朝さっそく『学園案内』に連れ出した粉雪は、ずっと不機嫌だった。

超能力捜査研究科だけは白雪の所属学科ということで少し興味を持ってくれたが、他の学科ではムッツリしたまま。そもそも俺、男と一緒に歩くのが不愉快らしい。

俺だって、仕事じゃなけりゃイヤだよ。女の子と2人っきりで学校を歩き回るなんて明らかに武偵高の制服じゃないサマーセーターの制服を着てるから、目立ちまくりだしこんなんじゃ『たらしのキンジがまた女を替えた』とか、あらぬウワサを立てられるぞていうか……女子と2人だと、とにかく会話がもたないし。

というわけで俺は生徒会の仕事で不在にしている白雪のことを思い浮かべ、

（……そういや理子は、白雪を『ゆきちゃん』って呼んでたな。てことは粉雪と会ったら、あだ名付けに困るだろうな……『こなちゃん』とか、か？）

などと究極的にどうでもいい事を考えながら……

最後の学科――古巣の強襲科へと、粉雪を連れていった

ここは、層の汁意が必要だぞ。男子率、高いからな。

「粉雪。ここでは足元に気をつけろよ。慣れれば蹴散らして歩けるようになるが、いつも空薬莢がゴロゴロ落ちてるから……見学に来た生徒が、毎年何人も転ぶんだ」

と言いつつ、黒い体育館みたいな訓練施設に入ると――

――いきなり、ガノシー　ボカー　死ね！　死ね死ねー　と5人ぐらいの1年が軽装のA装備姿で殴り合っていた。

なにやら、アイドルの水着写真集を取り合ってケンカになっているらしい。

実に……体力以外に取り柄の無い強襲科らしい光景だな

「……」

ちら、と横目に見た粉雪は案の定、もみ合う男たちを見て思いっきり眉を寄せている。

心底、汚らわしいものを見たという顔だ。

「あ、あれは格闘訓練の一種だっ」

俺は慌てて粉雪の背中を押し、団子状態の後輩どもの横をすり抜けさせるのだった

今は夏休み中なので、棟内には人があまりいない。

おかげで各訓練室の紹介は、スムーズに進んだ。映画の撮影所みたいな実物大のモックアップ・セットが配置された突入訓練室で人型ターゲットを動かしてやり、射撃学室では

射撃理論や弾道理論について初歩的な説明をし、射撃訓練場ではターゲットを撃つ実演も見せてやった。

だが、粉雪は全てノー・リアクション、

終始、つまらなさそうな空気を流しまくっている。

というかむしろ、強襲科棟に入った時より機嫌が悪くなった気がするぞ。

「……以上で……学園見学は終了だ。他に見たいところはあるか？」

空薬莢を踏まないように廊下に出つつそう聞くと、粉雪はふるふると首を横に振った。

「いいえ。もう十分です」

そして、桜色の唇をへの字に曲げる

「――武偵高がいかに乱暴な場所か、よく分かりましたから」

「ら、乱暴って……探偵科とか情報科は、そこそこ平穏だったろ」

「いいえ。彼らも同じ穴のむじなです。そもそも、金銭のために武力を用いるという行為自体が卑しいものですし　清廉たるべきお姉様が、その様な場所にいるなんて――私には耐え難いことですっ」

と、粉雪は吐き捨てるように武偵の悪口を言う。

まあ……武偵がそういう偏見を持たれるのは、よくある事なんだけどな。

この学園見学には、星伽に帰りたくない白雪のため、粉雪に武偵高のイメージアップを

図るという裏の目的もあるんだ。これじゃあ、それが逆効果になってしまうぞ

普段は武偵高を嫌っている俺だが、ここは少しだけ弁護しておくか

「逆に考えてみろよ、粉雪。供給の逆には需要がある。金を払ってでも解決したい問題を抱えてる人間が、今の日本には増えてるんだ。通り魔や強殺、ストーカーや窃盗といった犯罪は増える一方だし、警察だって人手不足だろ。だから世の中には武偵が必要に――」

「逆に考えるべきは遠山様です！」

先牛の受け売りを語る俺に、粉雪が途中で言葉を割り込ませてくる。

「そんな問題に巻き込まれる愚行を犯す需要側にも、責任があるのです　少なくとも私は、そのような問題に絡むようなことは有り得ませんっ　危険な所には行かないし、不必要に金品を見せびらかしたりもしませんから」

「……不可抗力って事もあるだろ。ある種の犯罪者は、理屈では動かない」

ちょっと反論すると、粉雪はアーモンド形の眼を吊り上げて――

「そんな事はどうでもいいのですっ！　とにかく私は、武偵高が、武偵が、大っ嫌いなのです！　武偵高のせいで、お姉様は星伽から出て行ってしまい　私には分かります――武偵の遠山様に誑かされたせいで、帰ってこなくなってしまったのですから！」

――子供っぽく理屈をすっ飛ばして、俺を指さしてきた。

（あ、ああ……そういうことか）

……粉雪は、八つ当たりしてるのだ。
自分の大好きなお姉ちゃん――白雪が東京に出て行ってしまい、でも好きだから白雪に怒るわけにもいかず、怒りの矛先を武偵高・武偵といった『行き先』の方に向けている。
この理不尽さには、少々イラッと来るが……。
相手は依頼人様だし、お子様だ。子供が言うことに、々腹を立ててちゃ、男が下がる。
ここは、年上として譲っておいてやるか。
「まあ、白雪の事はともかく……武偵については、粉雪の言う通りだ。本当は誰も問題に巻き込まれないのが一番いい。といったところで――帰るぞ。忘れ物はないな？」
そう言ってやると、完全にケンカ腰だった粉雪は肩すかしを食らったような顔をして『逃げるつもりですか、かかってきなさい』という空気を流しまくりだったが……
俺は、相手にせずに背を向ける。
「出口は、こっちだ。繰り返すが足元に気をつけろよ、藁茨踏んで転ぶと、もういっぺん救護科（アンビュラス）を見学するハメになるからな」
「はい……では遠山様。お仕事が終わったようですので、お伝えしたいことがあります」
「なんだよ」
「実は昨夜、遠山様についての『託宣（タクセン）』が降りました。星伽の巫女の義務で、昼夜の内にお伝えしなければいけない事になっていますから――少々唐突ですが、今お伝えします」

ものすごく不機嫌そうな声で言う粉雪に、俺は振り返った。
「『託』……？　ああ、占いか。なんだよ。怖いことだったら言わなくていいぞ」
「いいえ。吉兆の一種です」
何か恥ずかしい話なのか、粉雪はちょっと視線を外しながら――
「遠山様は、求婚されます　今月中に」
きゅ……求婚？
プロポーズ……のことか？　い、いきなりだな　ていうか……
「だ、誰にだよ」
俺の脳内に、そういうトンチンカンな事をしかねん女子の顔が2～3名ほど浮かぶ。
「知りません。ただ、間違ってもお姉様ではありません。それは確実です」
脳内で顔が1つ消える。
「知りません……ってお前……無責任だな。いや、それ以前にだ、法律上、男は18歳以上じゃなきゃ結婚できねーんだよ。その『託』はハズレだ」
「……ハズレ？　わ、私をバカにするんですかっ！」
俺が鼻であしらうと、粉雪は早速さっきのヒステリーを再発させて詰め寄ってきた。
「私の『託』は、お姉様の『占』ほどではありませんが――的中するのです！　内閣総理大臣にも書状でご進言をしたことがある程なのですよ！　それをせっかくお教えしたのに

……疑う事、罷り成りませんよ！」

吊り目を刃物のようにして、粉雪はサマーセーターのヘソの辺りに手を入れた。

手つきから分かるが……何やら、短刀みたいなものの鞘を握ってるっぽいぞ。

どうやら星伽巫女にとっては、占いを疑われる事は非常にプライドに障ることらしい。

「お、おい粉雪、そんなに怒るなっ　ていうか足元――」

と俺が注意したのは、一瞬遅かった。

粉雪は落っこちていた50マグナム弾のでっかい空薬莢を踏んでしまい――

――きゃあ！――

思いっきり片脚を後ろに滑らせ、こっちにつんのめってきた。

――危ないッ――

とりあえずあの短刀で事故が起きないようにしないと　――！

と、俺は粉雪が服の下から出しかけていた守り刀の柄を右手で押さえ……どたんっ！

2人で身をよじるようにして、その場に倒れた。

勢い余った粉雪が下になる形にはなったが、俺は粉雪の腰を左腕で抱き、自分の石頭を先に床に落として……なんとか、依頼人にケガをさせずに済む。

クラクラする頭を押さえて上体を起こすと……

俺の手は粉雪がやっぱり隠し持っていた守り刀の、金蒔絵の鞘を掴んでいた。

「……！」

知刀は掴んで止めたので事故は起きなかったが、視界には――

べ、別の事故が起きてるぞ、これは……！

俺の手が――粉雪のサマーセーターとブラウスを知刀で引っ張り上げるようにして……

思いっきり、ひん金蒔絵いてしまっているのだ！

眼下には意外にも今風の、白地にパステルグリーンの刺繍が浮き立がった下着が丸見えになってしまっている。

「！」

俺は慌てて目を閉じ、立ち上がって粉雪から体を離す。

おっ、落ち着けキンジ……ヒスるなよ……

ヒステリアモードは自重するって決めたばかりだろ　ていうか、こんな無垢な中学生の前であのモードになったら　彼女に、一生消えないトラウマを植え付けかねんぞ！

俺は何度も大きく深呼吸して、心を落ち着かせていく

だ……大丈夫……らしい

どうやら、相手が3つも年下だったおかげで九死に一生を得たようだ。

俺には年下趣味はない　平賀さんでヒスり辛いのと同じ原理だ

……

自分の下が異様におとなしくしているので、薄目を開けて様子を確かめると……
粉雪は、ぴきーん。
転んだ時の姿勢のまま、完全に固まっていた。
目をカッ開いて、まばたきすらしてないぞ。
その黒い瞳は完全に光を失い、モヤがかかったように濁っている。
蝋人形になったみたいに動かないので……声を掛けづらい。
なのでしばらく静観していると……びく、
うぉ。動いた。
びく、びくびくっ！
AEDで電気ショックでも与えられたかのように、粉雪が体を震わせている。
だが、そのカッ開いた目は虚空を見つめたままだ。
こ……怖っ！
「……あー、えーっとだな……言っておくが、俺はお前の刀を押さえるためにだな……」
言い訳は、できるうちにしておけ。
父さんの格言を思い出した俺は、そのうすら寒い光景に後ずさりつつも話しかけてみる。
「――！」
粉雪は、ばんっ！

両脚を高く上げたかと思うと、そのまま両膝を抱えてクルッと後転した
そして、ごろごろごろーっ！　逃げるアルマジロ（？）のように廊下の遥か向こう側まで転がっていく。とにかく俺から距離を取りたかったらしい
ごすっ！　とここまで聞こえる音を上げて廊下の端っこの壁に後頭部をぶつけた粉雪はしばらく身悶えしてから……起き上がり、
「と、と、遠山様は最低です！　最低に不衛生です！　これで心の底からよくわかりました！　遠山様に乱暴されて分かりました！　やはり武偵は悪辣、武偵高は悪の巣窟！　お姉様は一刻も早く帰すよう、星伽にご進言しますーッ！」
20mぐらい離れた所から、抜きはなった守り刀をブンブン振って叫んできた
遠目に見れば、いつの間にかサマーセーターとブラウスの裾はきちんと直してるな。
「こ、今後これ以上私に近づかないこと！　近づいたら刺します！　メノタ刺しにして、丑の刻参りです！　藁人形に五寸釘を乱射しますー！　工業用の釘打ち機でッ！」
刃物で刺した後に藁人形を作るのは、順序がおかしい気もしたが……
星伽巫女の藁人形は本気で人を呪い殺せるとか聞いたことのある俺は、とりあえずこくこくと何度も頷いて了解の意思表示をしておくのであった
――すまん、白雪、お前、本当に星伽へ連れ帰らされるかもな。

（世の中、楽な仕事なんて無いもんだな……）

そんな思いと共に『学園案内』の任務を完了した俺は、教務科宛にメールでレポートを送り……PCの前に陣取って次の仕事を探しにかかった。

ちなみに帰ってきてからの粉雪は、10回ぐらい風呂に入っている。

うちの水をそんなに使うな、水道代だってタダじゃねーんだぞと5回目ぐらいのときに文句をいったら、遠山様に汚されたから御祓が必要なのです！　遠山様の白業自得です！などとバスルームから金切り声を返してきやがった。俺は呪いのアイテムか何かかよ。

まあいいさ、どうせ粉雪は明日星伽に帰るらしいし、好きにさせておこう。

「キンちゃん、粉雪、ただいま帰りました。遅くなってごめんね」

そうこうしている内に、夕食の材料をいっぱい持った白雪が帰ってきた

「お姉様、お帰りなさいー」

ピカピカに洗った体で巫女服を着直した粉雪が、誘導装置つきの地対空ミサイルみたいに勢いよく白雪に抱きついていく。

そして白雪の胸に思いっきり顔を埋め、胸の間から緩みまくり甘えまくりの顔で白雪を見上げている。超・超・幸せそうな笑顔だ。俺と2人の時は一度も笑わなかったくせに。

（ていうか、あの二重人格っぷり……どこかで見たことがあるぞ……？）

と思ったら、白雪の――アリア／俺に対する態度の切り替えに瓜二つだ

白雪と粉雪は義理の姉妹とはいえ、遠縁の親戚でもある。血は争えない、ってやつだな。

力の白雪は「もう、粉雪はお姉ちゃんっ子ですねえ」と粉雪をよしよし撫でているが……白雪、気をつけろ、俺はそっち方面には詳しくないから確証は無いが、粉雪の熱情はただのお姉ちゃんっ子とか姉妹愛とかいったものを超越しているような気がするぞ。

いや、まあ、愛にはいろんな形があるらしいから、差別するつもりはないけどな

というかあまり深く考えないようにしよう。危ないからな。ヒステリア的な意味で。

なっちまったよ――ヒステリアモードに。

だがこれは星伽姉妹の関係に俺が倒錯的な想いを巡らせたとか、そういう理由ではない、……事の顛末はこうだ。

まず、粉雪が8時までに就寝しないのは不衛生だと言って聞かなかったので……俺は、仕方なしに夕食のあとすぐ寝室に入って二段ベッドの下段でゴロゴロしていた。

で、寝ようと思えば何時でも寝られるもので、8時前には浅く眠っていたのだが……

リビングから何やら言い争うような声が聞こえてきて、微妙に目が覚めてしまったのだ。

「――から、お姉様は…遠山様を諦めきれないのですか、いずれ神崎アリアは緋…で死…ことが分かっているから…！」「…を慎みなさい、粉雪。言っていい事と悪い事が…私は彼女の死を望んでなど…ません…どころか…れは…」「…れは…口が過ぎました。でも…

――緋弾は何れ、潰える――」

寝ぼけていたので会話の内容は全然聞き取れなかったが、何やら姉妹ゲンカらしく……

しかしそれは次第に仲直りムードになっていき……

最終的には2人は、姉妹仲良く寝室にやってきて、2段ベッドの上段に入っている

で、この狭いベッドにぎゅうぎゅう詰めになって寝させられる白雪は可哀想だな、なと

と考えつつまたウトウトしていたら……夜の9時頃に……

俺は、さっき強襲科で粉雪を押し倒してしまった時の光景を夢に見てしまったのだ

あの時は即座に目をつぶったつもりだったが、記憶とは恐ろしいものだ

しかもなぜか、押し倒した粉雪が白雪と入れ替わっていた。

それも、例の大人っぽい黒下着バージョンで

――それで、アウト。

だが不幸中の幸いというか、これは俺の分類でいう『夢ヒス』――ヒステリアモードの

中でも安全な部類に入るものである。

なぜならこれは、女の前ではなく、人でベッドにいる時になるもの。つまり、しばらく

安静にしていれば『無かったこと』にできるヒステリアモードなのだ。

というわけで俺は腕組みし、無意味にギンギンと冴えた頭のまま目を閉じていた。

夢は――時に、人の抑圧された無意識を意識上に引き出すというが――

では、今回の夢はどのような意味になるのかな？
その解析はヒステリアモードの頭脳にも、少々難しい問題といえるようだ。
（……）
そして俺は、もう一つの問題に気づいていた。もう少しシリアスな、問題に。
白雪はスヤスヤと寝ているようだが――
粉雪が、いない。
寝息も聞こえないし、気配が無くなっている。
俺が夢にうなされている間に、二段ベッドの2階から姿を消したらしいな。
ヒステリアモード状態で行動するのは避けたかったが、今の俺は女性の安全を最優先で考えてしまう。どこへ行ったのか、ここは年長者として、応探すべきだろう
と、俺は……スパイのように音もなく、ベッドを出るのだった。

探そうと思った矢先に、粉雪は見つかった。
というか、家の中にいたのだ。
ここは元々4人部屋なので、リビングや寝室の他に4人分の狭い小部屋がある。1つは俺の部屋で、あと1つをアリアが勝手に自室にしてしまっているが、残りは空室だ。
その1つに、粉雪のものと思われる気配がする。

（……？）

乙女の秘め事を覗くようで気が引けたが……あれだけ早寝を俺たちに強いていた粉雪が内緒で夜に動くからには、何か俺たちには言えないトラブルを抱えている可能性もある

俺は心の中で軽く謝ってから、小部屋の近くで聞き耳を立ててみた

：ゆ、勇気を出すのです　チャンスは　：今夜しか無いのですから　ファイトです」

中からは、粉雪が自分で自分に決意表明しているような声がする

足音が、扉の方に近づいてきたな　出ようとしているようだ

俺は強襲科で習得した抜き足で足音を殺し、別の空き部屋に移った

その鍵穴から廊下の様子をそっと窺うと……

（……ははっ……）

心の中で、苦笑いが漏れた

小部屋からコソソリ出てきた粉雪は、おしゃれしていたのだ

流行りのレイヤースカート　ちょっと大人っぽいUネックの半袖カットソーにデニムのベストを重ね、バックルの大きなメッシュベルトでキメている

全体的には……ちょっと背伸びして、女子高校生向けのファッション雑誌に載っていたコーディネートをそのままマネたような感じだな

あまり上手とはいえない抜き足差し足で廊下を渡る粉雪は、ちょっとつまずいて尻餅を

ついた。とてん、と音が立ったことに慌てて、薄化粧した顔で心配そうにベッドルームの方を振り返ったりしてる。

そして、しばらく息を殺してから、再びソーっと這うように移動して……

その手に持っていた、これも今風のコサージュ・サンダルを履きかちゃ。

扉の音を殺しつつ、家を出ていった。

素早く制服に着替えた俺は、今度は探偵科で習った尾行術で粉雪を追跡する

粉雪は切符の買い方すら通りかかった武偵高の女子に聞くような箱入り娘っぷりを露呈しつつも、なんとかモノレールに乗車していった。

見つからないよう、俺も、応それについていくと……台場に着いた粉雪は、フセン紙をいっぱいつけたタウンガイド誌を手にちょっと緊張した足取りで街に出ていく。

物陰から見ると、粉雪はキラキラ輝くヴィーナスフォート　女性向けのショッピングテーマパークだ――を、嬉しそうに見上げていた。

そこのイルミネーションにも負けないぐらいの、キラキラした瞳で。

（ああ……）

それで分かった。

粉雪は、街に出てみたかったのだ。
星伽の巫女は、神社と学校から出ることを許されない　いわば『かごのとり』のような生活を実家に強いられている。
白雪は外の世界を恐がっていたが、性格の異なる粉雪は、逆に憧れていたのだろう
テレビでも、ドラマのお買い物シーンにやたら注目してたしな
（『チャンスは今夜しかない』、か……）
普段あれだけ、由緒正しい星伽巫女として気を張っている粉雪だ
たまには街遊びでもしてハメを外してみたいんだろうな
その目的が分かった以上、もう帰ってもいいところだが――あの子はまだ中学生だし、今までずっと星伽に住んでいたおのぼりさんだ
もう少し、陰からガードマンをしてあげよう。念のために、ね

近ごろ不景気対策で深夜営業を始めたヴィーナスフォートを、粉雪は夢の国にでもいるような足取りで歩き回っていた。
初めはウィンドーショッピングだったのが、高級そうなオルゴールを買ってから勢いがついたのか　：その細腕に提げる商品の紙袋を増やしていく　星伽神社はなにげに金持ちの神社ということもあり、粉雪の予算にもかなり余裕があるらしい

雑貨屋、靴屋、そして洋服屋。女性店員しかいない店ばかり選びつつの粉雪は、美人の店員さんたちに囲まれてちょっと赤くなりつつも——心底、幸せそうな笑顔をしてる。

まだ中学生であることを考えるとちょっと不安になるような散財っぷりだが……長年の夢が叶ったあの笑顔をジャマする気にはなれないな。

ここは、とりあえず遠くから見守るだけにしておこう。

とうとう色とりどりの紙袋を両手に提げきれなくなった粉雪は……

休憩しようと思ったらしく、小洒落たオープンカフェに入っていった。

俺もカフェに入り、ブラックコーヒーだけを頼んで（ノン・トゥ・サピス）ＳＰを続ける。

観葉植物の陰から見ていると、粉雪は小さなお城みたいなパフェに瞳をキラキラさせてから……ぱくぱくと食べて、ふにゅーって笑顔になり……ほっぺたを両手で押さえてる。

はは。可愛いもんだな。

いつもは気を張っているようだけど、ああいう表情はやっぱりただの中学生だよ。

思い出したようにパフェをケータイで撮影する粉雪を横目に、俺は足を軽く組んで夜のコスタリカ・コーヒーを愉しむのだった。

手首の内側につけた時計をチラチラ見ながら、粉雪はヴィーナスフォートを後にした。

そろそろ、終電で帰るつもりらしい。

その足取りは自由の女神像を経由してから、ホテル日航を回り込むようにして会場駅に向かうようだ。少し人けのない道を歩くようだから、気をつけないといけないな

――これから秋を迎えようとする東京の夜風は、早くも、少し寂しい

潮の香りのする風にセミロングの黒髪を小さく靡かせて立ち止まった粉雪は、細い月にうっすら照らされた東京の夜景を名残惜しそうに見つめていた

さっきは、子供だなと思ったが……

こうやって夜の街に佇む姿は、もう少し大人びて見えるな

粉雪はとてもキレイな子だから、成長したら白雪みたいな日本美人になるんだろう

その姿を少し先取りして見たような気がして、なんだか、ちょっと得をした気分だな

と、まだヒステリアモードの続いていた俺が苦笑いした時――

「こんばんはー、いっぱいお買い物したねー」

公園の方から、粉雪の方へと数人の若い男たちがやってきた

「あれれェー？　もしかして1人い？　可愛いーのにもったいなーい」

笑いながら、チャラチャラした格好の男たちは後ずさる粉雪をすぐに取り囲んでしまう

見たところ……大学生っぽいな。数は……4人か

「おっ、Max&Co.の袋じゃん　なにげにダミエのベルトだし、もしかしてお嬢様？」

「ラッキー！　お金貸してくんない？」

「ついでにキミ自身も貸してくんない？」
ギャハハ！　と爆笑しながら、男たちは少しずつ粉雪を囲む輪を小さくしていく
粉雪は――毅然とした表情で右左、あるいは後ろを振り向いたが――逃げ場が無いので、その場を動けない状態だ。
「の、退きなさい。星伽の巫女は、悪徒の威迫には応じません！」
キソ！　と粉雪の吊り目に睨み返されると、ヘラヘラしていた人学生たちは――
一斉に態度を変えた。
「ハァ？」
「日本語喋れやガキ！」
「剥くぞオラ！」
拳銃――
ヤツらの1人が尻のポケットから出したそれを見て、俺は軽い頭痛に襲われる
あんなチンピラ以前の連中にも出回ってるんだな　最近は
あれはカ・ラ・式手鎗で旧ソ連のトカレフをコピーした、中国製の粗悪な拳銃だ。
「……！」
粉雪は両手に提げた紙袋を落とし、自分の懐をまさぐるような手つきを、瞬したが……
オシャレな服のそこに、さっきの守り刀は無い

残りの3人もナイフやらスタンガンやらを出したのを見て、粉雪はとうとう気丈な顔を歪ませて、その場にしゃがみこみ……

「……お……お姉様……たすけて……」

あーあ

泣いちゃったよ

仕方ない　俺の出番みたいだな

「――おいお前ら　金が欲しけりゃバイトでもしろよ」

自分も金欠気味なのを棚に上げて、俺は分かりやすく姿を現してやる

俺の声に振り返った粉雪が涙目をまんまるにして驚いているが、まあ、釈明は後回しにさせてもらおう

「ンだテメーは！　消えろ！」

こっちに気づいていきなり銃を向けてきた不良学生に、俺は苦笑を返す

帯銃は、心してきたが、あんなのに抜き返しちゃ俺のヘレノタが泣く想だな

ここは言葉だけで、何とかするか。

「――3・2%だ」

「あァ？」

「ズブの素人が9m半――この交戦距離で、マンンルエノトい命中させられる確率だよ

見た所あんたは興奮してるみたいだから、確率はもっと低くなるけどな」
と言うと残りの3人もこっちを向いて、おーおー、ガンを垂れてきたな。こわいこわいまあ、怖さは綴先生とか蘭豹先生の1%ぐらいだけど。
「何なんだ、テメーは……」
「俺は武偵高の生徒だよ」
顎で軽く学園島の方を示してから、俺は普通に歩いて男たちに近づいていく。
武偵高の方を見て、男達は顔を見合わせた。どうやら俺が武偵だと分かったらしい良くも悪くも有名だからな、武偵高は。
「お、おい。アイツ撃て。お前、人撃った事あんだろ」
銃を持っていた男が、ぽん、とそれを仲間の1人に投げ渡す。
「あ、え、オレのあれはフカシで……」
「いいから撃てよー　アイツぁ武偵だぞー　先手必勝だろうが！」
「オメェが撃てよー　オメェの拳銃だろうが！　オメェが先手必勝やれってー」
どうやら銃を撃ったことがないらしい学生たちが、怒鳴り合ってる。
ていうか、先手必勝は宣言してたら先手必勝にならないんだけどな。
――銃は投げるんじゃなくて、足元を滑らせて渡すようにしろよ。暴発の恐れがある。
特にその五・七式鎗には、安全装置すら付いてないんだからな」

などと言いながら、俺は結局、銃を持ったヤツの真ん前まで歩み寄れてしまった
だが4人はそれぞれ武器を向けてくるだけで、仕掛けてこない
……どうすればいいんだろうな。
ここまでの二下が相手だと、逆にあんまり思いつかないそ
「……」
仕方ないので、俺はトカレフコピーのスライドを握り、トリガーカバーの内側に指を突っ込んだ　指相撲みたいに相手の人差し指を押さえ、まずは発砲できなくさせる
ついでに相手の手首が曲がりにくいほうにちょっと捻ってやったら、簡単に銃を取れてしまった。握力、なさすぎだろ
「あ……そ、それはやる　後ろから撃ったりすんじゃねえぞ」
最初に銃を持ってたヤツがそう言って退くと、それを合図にしたように　ー
4人はダッシュで逃げ出してしまった
逃げ足は速いのが、ああいう輩の特徴だ、みるみるうちに、公園の向こうへ消えていく
……いらないよ、こんなの　と、俺は黒光りする拳銃を手に溜息をつくしかない
「と、遠山様……」
足元にしゃがみ込んでいた粉雪は、俺を見上げてから……
べたぁー。

白雪そっくりの動きで、その場に土下座した。
その背中は、罪の意識のせいか小さく震えている。
「……ほ、星伽にはこの事、な、何とぞ内密にしてください……！」
尾けてたのを怒られるかと思ったけど、逆に謝られちゃったな。
俺は安全装置をかけたベレッタを内ポケットに入れ、九二式をホルスターに収める。
そしてその場に片膝をつくと、粉雪の絹糸みたいな髪をそっと撫でてやった。
「だ、誰にも言わないで……！」
ぼろぼろ泣きながらこっちを見上げた粉雪は、もう夜遊びにはすっかり懲りた顔だな。
「ああ、言わないよ」
「ほ、本当にですか……？」
「ああ。今夜の事は、2人だけの秘密だ」
そう言ってヒステリアモードの俺は、粉雪を安心させるように――微笑みかけてやった。
そんな俺を見た粉雪は……
……かぁ……
と、その雪肌の頬を桜色に染めて、しばし呆然としてから――無言で、頷いた
「――送るよ」
と、俺は粉雪が落としていた紙袋を持ってあげる。

粉雪は真っ赤にした顔をうつむかせたまま立ち上がり、自分でも1つ紙袋を持って……昼には『近づかないこと！』と命令したハズの俺の後ろにちゃんと近寄ってくる。

……まあ、こんな感じでいいですかね？

と、俺は——高い電柱の上に立つ巫女装束の白雪に、さりげなく目配せした。

そう。

白雪も、粉雪が夜中に外出したことにはちゃんと気づいて……粉雪を遠くからちゃんと見守っていたのだ。粉雪がオープンカフェに入った辺りから、な

粉雪はそんな白雪の存在には気づかず、反省しきった感じで俺についてきている

いいお姉ちゃんを持ったね、粉雪　と、俺は心に呟く

俺と目が合った白雪は苦笑いして、「ごめんね、キンちゃん」というカンジに——

小さく、手を合わせるのだった。

翌朝、俺の部屋に星伽の運転手を名乗るえらい美人のお姉さんがやってきた。

寮の車寄せを見下ろすと、そこには冗談みたいに長ーいリムジンが停車している。

金あるなぁ……星伽は。

帰る準備をすっかり済ませていた粉雪は、来た時よりかなり大きくなった風呂敷包みを運転手に渡すと——玄関先で、俺と白雪に折り目正しくお辞儀をついた。

「逗留中、何から何までお世話になりました。遠山様、お姉様、ごきげんよう……」
や、やっぱり絵になるなぁ。巫女装束の日本美人がかしこまってる姿は……
などと、ヒステリアモードの解けた俺はタジタジしながら「ああ、粉雪も元気でな」と言返したが、なんだか収まりが悪いので……車まで見送ることにした。
エレベーターを降りると、粉雪は微妙に歩く速度を変えて俺のそばに寄ってきて――
「遠山様」
こっちを直視せず、ちょっと赤くなりながら話しかけてきた。
「……なんだ？」
「ありがとう……ございました」
俺たちの少し先を歩く白雪に、昨夜の事がまだバレてないと思っているらしくその喋り方は、ここに来たころと同じようにちょっとツンツンしてるな。
まあ、そういう所も含めて年下ってのは可愛いもんだ。
「それと、つ……お謝りしたい事があります」
「謝る……？」
「はい。私は武偵高と武偵を侮辱するような事を言いました」
「あ、ああ」
別にいいよ。そんなこと、謝らなくても。

武偵はまだ、社会的にあまり正しく認知されてない仕事だからな
「でも、その……昨夜、私は思惑を改めました　また好きという気にはなれませんが……
今の世の中には、この仕事も必要になってきているのではないかと」
……そうか　まあ気が向いたら、また見学にでも来いよ」
そして0・3単位、俺に稼がせてくれ
はい　また来ます　次は本当の『学園見学』に
「『本当の』……？」
「はい　お姉様は結局、星伽に帰る御意志は無いと仰るので――私、逆に考えたのです
それなら、私が来ればお姉様と一緒に居られるのではないかと――
と言った粉雪に、俺は頬を思いっきり引きつらせつつ振り向いて……そこで初めて……
粉雪が初めて俺に向けてくれた、笑顔を見ることができたのであった
「今後とも、何とぞよろしくお願いしますね　遠山様
そう、それはまるで――
空から舞い落ちるひとひらの粉雪のように、可憐で、愛らしい笑顔だった

再装填2　マルセイユ・ルーレット

8月25日。粉雪が星伽に帰った翌日――
白雪が永田町の日枝神社に行くと言って家を出てから、すぐドアチャイムが鳴った。
単位になりそうな仕事を探すためにPCを起動していた俺は、
「どうした白雪。忘れ物でもしたか？」
と不用意にドアを開けて――「うっ」と声を上げる。
そこに立っていたのは……
「――荒ぶる理子のポーズ！」
フリフリの改造制服姿で両手を鶴のように広げ、片膝を高く上げた――
峰・理子・リュパン4世だったのだ！
「……」
もう、ハート形の眼帯はしてないな。パトラの呪いは解けたらしい
しかし、どうリアクションすればいいのか。そのナントカ理子のポーズとやらに
俺が黙っていると、
「……教務科の掲示板見たよ！　キーくん大変だ！　落ちこぼれは留年の危機だ！」

理子はその中国武術みたいな構えを解除し、スルリと俺の脇を通って室内に侵入した。
「お、おい」
そして玄関に赤くてちっこい靴をポイポイ脱ぎ散らかすと、たったった、ぴょーんソファーの背を跳び箱のように跳び越して、着席してしまう。
「そこでりこりんが、なんと全学科共通で単位になる任務をお届けに上がりましたよー」
さらにテレビをつけ、しょっていた赤いランドセルから取り出した謎のDVDをシャノとフリスビーっぽく投げた。
すぽっ　それが、DVDデッキの挿入口へとキレイに入る
あ、相変わらず器用なヤツだな
しかし何だ、そのDVDは。武藤が秘蔵しているような、いかがわしい物じゃないだろうな。
と、俺が警戒していると……テレビには海外プロサッカーの映像が再生された
「任務……？」
理子とは他にも話したいことが色々あったが……今は進級の方が重大事だ。
それに理子はこう見えても、情報収集が大得意の怪盗さんだからな。
もしかしたら本当に、いい仕事の話かもしれないぞ。
赤ランドセルからポッキーの箱を取り出していた理子は、その大きなふたえのお目々を

――キュッ、と細めて笑う。
「くふっ。見て見てキーくん」
う。俺の真っ隣に移動してきやがった。
わざわざソファーの、番遠い位置に座ったのに。
ふわふわの髪からバニラみたいな甘ったるいニオイがして、実に理子ぐさい。イヤだな。
「これ、ついさっき武偵高の校内ネットに出てた緊急依頼なんだよ。依頼元は東京武偵高。『サッカー部全員を停学処分としたため、全国高校サッカーCS、次予選に出場する代理選手を11人求む』！」
俺の方に体を傾けてきた理子を避けながら携帯を受け取ると……
確かに、そういうサイトが表示されているな。
「サッカー部、みんなでダムダム弾を密造してたんだって。そんで全員停学2週間」
「おそろしく武偵高らしい理由だな……」
「ここ見て、代理で出場して勝てば1・2単位、負けても0・6単位もらえるんだよ！」
おおっ……！
俺の不足単位は残り0・7。勝てば、気にクリアできる。
それにこの任務は要するにサッカーの試合に出ろという事。実に平凡な高校生らしい。
普通の人間社会から遊離しつつある俺にとっては、いいリハビリにもなるぞ。

「よし……やるか、他に良さそうな仕事も無いし」
「やったぁー」
ポッキーを箱から取り出していた理子はその場でぴょんぴょんジャンプし、ぼふっ。
ソファーに崩れた正座で座り直した
「じゃあキーくん、お仕事持ってきたご褒美にポッキーゲームして」
「ポッキーゲーム……？　なんだそれ」
と俺が訊くと、理子はポッキーを1本くわえて目を閉じ……
「んっ」
と、こっちに先端を突き出してきた。
俺にも……くわえろってことか。
そして両端から一緒に食えってことか。
お前はアホか
俺は掌底一発でポッキーを理子の喉深くに突っ込みつつ、ＤＶＤに向き直る
ふむ…これは往年のフランス人サッカー選手・ジダンのベストプレー集らしいな。
古い映像ではあるが、その足技はまさに天才的だ　この人も、超人だな
まあ最近、超人なんか見慣れちまってるけど
「えほっえほっ、き、キーくんひどいよー　ＤＶだー　デートＤＶだー」

咳き込みつつ、俺の膝上に寝っ転がってきた理子は……

「う～」

アヒル口になって、うなった

「やだ！」

「何がだよ……」

「やだやだ！　なんかご褒美くれなきゃやだ！　やだやだやだやだ～～だ～～！」

ジタバタジタバタ

理子は俺の膝の上で仰向けになって、手足をばたばたさせ始める

か、完全にガキの動きだぞこれ。

「なんかくれなきゃ逃亡で11人集めて、任務を先に取っちゃうぞ！　ぜったい理子が先に11人集められる！　理子には友達がいっぱいいる！　キーくんは友達が少ない！」

友達が少ない！　って、ハッキリ言いやがって。

だが……クラスの人気者・理子より少ないことは確実なので、ここで理子を怒らせるのは得策とはいえなさそうだぞ。

コイツの性格上、本当に嫌がらせで仕事を取っていきかねんし

「わ、分かった、だだっ子パンチするな。じゃあポッキーゲームとやら以外で何か言え」

仕方なしにそう言うと、

「じゃあー、キーくんのしたい事でいいからぁー、理子といいことしよっ」
俺の服を掴んだ理子は、ゴロゴロ甘える猫みたいに俺の腹に頭をすりつけてきた。
……きた。
きたきたきましたよ。理子の擦り寄りが。
ブラドの一件以来、理子は俺に対して普通の女子っぽく——ある程度の距離感を持って接してきていたが……女心と秋の空。女子の気持ちなんて、コロコロ変わるものだ
それにしてもこんなに急に変貌するのは少々ヘンだが……まあ、理子のことだ。理由を深く考えるだけ時間のムダだろう。
と、俺は理子から顔を背けつつソファーの端まで逃げる。
が、理子は俺の服を掴んだままズリズリついてきた。ああ、面倒くせえ。
「ねえキーくん——アリアと、うまくいってる？」
ごろん、と長いソファーに仰向けになった理子が急に——変な事を、聞いてくる。
「うまくいってないよねぇー……？　これ、ゆきちゃんも勘付いてた　ていうかアリア、武偵高から出たっきり忙しく駆け回ってるから……メールもしてないんじゃない？」
「そんなこと……お前に関係ないだろ」
図星だったので少し冷たくあしらった俺に理子は、くしし、と俺の膝の上で笑い……
「手がかかるなぁー」などとワケの分からない独り言を呟いている。

実際――アリアとは俺が入院したっきり、会ってない。
退院した事はメールで連絡しておいたが、返事はまだない
まあ、アイツはあまりメールを使わないからそれ自体はヘンじゃないんだが……
なんか、妙に冷たいよな。最近。
何か俺に話しづらい事でも、一人で抱えているのかな　また。
「ねぇー　今はアリアもゆきちゃんもいないんだから、理子をいっぱい可愛がってぇー
何されても、責任取れとか言わないから、昨日の夜みたいに、激しくしてよう……」
なっ……何だよ昨日の夜って！　と、身に覚えのない俺が振り向こうとすると　―
その首が反対側に、ぐぎぃっ！　と捻られた。
背後から、誰かに耳を引っ張られたのだ。
痛ぇ！　だ、誰だ！
「へぇー　ちょっと放し飼いにしたスキに、すぐそれなのね？　このバカドレイは！」
ぐぃー！　と引っ張り上げられた耳元で叫ばれ、たまらず顔を上げるとそこには――
「あ、アリア!?」
制服姿の、神崎・H・アリア様が仁王立ちしていらっしゃった。
なんかものすごく真っ赤になって、ギリギリと犬歯を食いしばってるぞ。
「い、いつ帰ってきたんだよソ、い、痛い、耳、耳！　ちぎれるだろー」

「さっき理子がやだやだ喚いてる時よ、ふーん。昨日の夜。あっそう。あたしの目がない時はそういうことしてるのね、キンジは。まあしょうがないかもね。かわいいもんねぇ～、理子は」

アリアは赤紫色の目をぎろろろと光らせて、俺の目を3cmぐらいの距離から睨んでくる、し、視線だけで殺されそうだ。

「でもあたし、前に言ったわよねー？『1回ぐらいは許すけど、理子とはあれっきりにしときなさいよ？』って。あの時ちゃんと聞こえなかった？　そう。聞こえなかったのね。聞こえない耳なら、いーらなーいーわーよねぇー!?」

ぎりぎりぎりぃー！

さらに俺の耳をねじり上げたアリアに、俺は強制的に立ち上がらせられる

「み、耳！　本当にちぎれるって！　やめろアリア！　また入院する事になるだろ！」

「おおーアリア、独占欲むきむきのむき出しだぁー！　きゃはは！」

ぱんぱん！　と理子が嬉しそうに手を叩いて笑う。

そうじゃなくて、この傷害行為を止めろよ！

お前アリアと互角に戦えるんだから！

「ど、どくどく独占って、違うわよ！　これは忠誠心の低いドレイへのオシオキなの！」

やっと手を離してくれたアリアは、ぐいっ！

と腰を折って、ソファーにお姫様座りする理子にガンを垂れている
「くふっ　アリアはキーくんが好きなんだねぇー」
「なっ――なんでそうなるのよ！」
「えーだって、好きな人にってイジワルしたくなるじゃーん」
にやーり、と笑った理子にアリアは、ぼぼぼぼぼ
なぜか赤面癖を更なる高みへとレベルアップさせている。
な、なるほど。
理子はアリアが部屋に帰ってきたのに勘付いて……わざと駄々っ子のように騒ぎ、俺の耳をごまかしてから……急にベタベタしてきたのか　アリアを怒らせるために
どんだけ仲悪いんだ、おまえら。
まあホームズとリュパンの曾孫同士、犬猿の仲なのは分からないでもないけどな。
違うわよ好きとかそういうんじゃないわよ絶対絶対むぎぃー　と、アリアはニヤニヤ笑う理子にまんまとノセられてさらに詰め寄っている
ていうか、おでことおでこ、鼻と鼻がくっつくぐらいに詰め寄っているが……　そんなにくっついていいのか。それはアリなのかアリア
理子はそんなアリアの頬に、ちゅっー　と小さくキスして動きを止めてから
ぎゅっ　さっきから袖を掴んでいた俺の左腕に抱きついて、アリアにアカンベーした

「こらっ！　離れろ……！」

と理子を押し退けようとするが、ツーサイドアップの髪がわささっと動いて俺の背中を引っ張り寄せてくる。

や、やめろって！

まるで俺が理子を抱き寄せてるみたいに見えるだろ、そこの鬼武偵から見たら！

さらに背後からヘビのように回ってきた理子の髪が……俺の右手を操作し、アリアに向けてピースさせた。

南無……。

「こ～～～～の～～～～！　キンジ!!　理子!!」

アリアはオモチャを取られた幼児のように、真っ赤っかになって飛びかかってきた。

そしてピースサインをヘシ折る勢いで俺の右腕を抱え、意地になって引っ張ってくる。

理子はニヤノと裏理子の笑みを見せながら、俺を反対側――左に引っ張る。

「――そうだよアリア　お前の前ではこうやって、あたしがお手本を見せてやるから　――もっとキンジとくっつくんだ。あたしが懲したいアリアは、真の能力を発揮するアリア、だからもっとキンジとべったりになって、初代ホームズとワトソンみたいに仲良くしろ。まあ、『仲良し』の意味は違うけどなっ。ふふっ、くふふっ！」

「お、おい！　2人ともやめろ！　ち、ちぎれる……だろ！」

理子の思惑なんか、この際どうでもいい
このままでは、耳どころか全身が左右にちぎられるぞ！
「　ワケの分かんないこと言ってないで、放しなさい！」
ビシッ！
アリアは俺の腕を抱えたまま、黒いニーソックスの足で理子の脇にローキックを放った
「くふっ！　――理子、実は痛いのもイケるクチなんだよね！」
何かにゾクッときた感じの笑顔になった理子も、ビシッ！
さくらんぼみたいな飾りのついた白いソックスの足で、アリアにローを返してる
「いたっ！　この～～～バカ理子！」
アリアが理子に猛然とキックを返し、理子も理子で笑いながら鋭いキックを返している
1発1発がバットでもヘシ折りそうな鋭いキックの応酬だが――
こ、こいつら　いい足をしてるぞ
この脚力、サッカーにも応用できるハズだ……！
などと、悲しいことにこういうバトルの光景に慣れてしまった俺は思うのであった
当然の事だが、サッカーは1人ではできない
教務科にメールして任務を請け負ったからには、メンバーを揃えなければならない

というわけで俺はそれから1日かけて、とにかく予定の空いてる知り合い全員を電話とメールと直接訪問で招集しておいた。2学期、何かの任務に1件無償で付き合ってやるという報酬つきで。

ネットでルールを確認したところ、欠員は1人なら認められるらしい。サッカーは通常11人でやるものなので、最低でも10人必要になる　細則を見れば、男女平等教育の一環ということで女子もメンバーに入れていい事になっていた。そこは幸運だったな。

そして、翌朝――

セミの音ひびく第一グラウンドに、熱き血潮のイレブンが揃う

いや、時間通りには全然揃ってないぞ。まずこの時点で不安になってきた。

まず俺。ポジションは、一番やる気が有る（というか無ければならない）という理由で最前衛のFWだ。一応、キャプテンも務める。

そして理子を監視するという理由で参加してくれることになったアリア　これも非常に好戦的なので攻撃手のFWである。

言い出しっぺの理子は……何かのアニメの影響らしくGKをやると言って聞かないので、適性はともかくとりあえずキーパーということになった。

あと、レキ　こいつは狙撃科棟の屋上で体育座りしていたのを引っ張ってきた。試し

にリフティングをさせたら無限にできるし、パス回しは異様に正確。中盤の繋ぎになるMFにもってこいの器用さだ。

こいつは掘り出し物を見つけたぞ……ー　と喜んだのも束の間、レキにはボールを保持する能力が全くない事がすぐ判明する。生来ボーッとしているので、ちょっと仕掛けられるとすぐボールを取られてしまうのだ。だがまあ、その辺は目をつぶろう。とにかく今は置物でもいいから頭数が必要なのだ。

それと、白雪。

ハナっからアリアと理子を刺殺しかねない目で見てる辺りには早くも仲間割れの予感が漂っていたが、問題は……そこではなかった。

「おい白雪。ちょっとボール転がすから蹴ってみろ」

と、言うと、「はい！」と返事はいいのだが……かるーくボールを足元まで転がすと……

「えいー」

と、ボールが横を通過した後に空振りして、すてんー

「きゃん！」

白いリボンみたいな布で留めた黒髪を大きくなびかせて、真後ろに転びやがった。

まるで見えない誰かにバックドロップでも決められたかのように、後頭部から落ちたぞ。

というかボールが静止してても空振りするし、走らせてみると内股だから異様に遅いし、

たたらを踏んで転ぶし、お前、それでよく女子バレーボール部の部長が務まるな。

……急造チームには、他に……

腐れ縁の男子2人も、助っ人に来てくれた。背の高い武藤は防御を固めるDFに任命したが、コイツは集中力という物が全くない。大きな胸のせいで何度もマジノクテープが外れてしまう白雪のゼッケンばかり見てる。

俺とアリアが一緒にいるのをなぜか笑顔で見守る不知火は、なんと中学ではサッカー部だったという。これは貴重な、というか唯一のマトモな戦力なので、攻守両方に活躍できるMFになってもらおう。

さて、ここまではこれでもまだ常識的な選手たちだ。

普通の体操着に短パンというカッコだし、時間通りに来てたしな。

「遅れてすまない　サッカーとは何なのか書物で調べていたら、手間取ってしまってな」

という不安極まりない第一声と共に現れたのは、情報科のジャンヌ・ダルク30世だ。

長い銀髪を赤いカチューシャで留め、びしっ、と大地に立ったジャンヌは……

スラリと長い美脚を丸出しにさせる、ブルマなんかをはいてやがる……！　なぜだ！

「な……何なんだよそのカッコは！」

俺がツッコむと、ジャンヌは自分の姿を「？」という目で見回した。

「カッコ？　お前は無知だな、遠山　これは日本の伝統的な体育着だ。文献にあったから、

わざわざ特殊捜査研究科の友人に借りてきたのだぞ」

「いつの時代の文献を読んだんだよ……ていうかお前、この前『未婚女性は足を出すな』とか言ってただろっ」

と、『下だけ水着姿』みたいなジャンヌをできるだけ見ないようにしつつ、うが、

「遠山。私は、みだりにこのような服を着ているのではない。競泳なら水着、新体操ならレオタード、いかに肌が出ようと、スポーツウェアは正装として認められるのだ」

どうやら恥ずかしさのツボが常人と少々違うらしいジャンヌに堂々と返されて……

俺はもう、何も反論する気が起きなくなってしまう。

サッカー大国・フランスの出身者だからと、少しだけ期待していたこっちがバカだった。さっきの発言と併せて考えるに、コイツはサッカーを見たことすらないらしいぞ。

「おっはよーですのだー！」

そこに独特な挨拶で現れたのは……おい、小学生が勝手に入ってきちゃダメだよと素で言ってしまいそうなほどにチビっ子な　―装備科の平賀文さんだった。

運動神経は悪いのだ、と言われたが人手不足だったので呼んだんだが……キコキコーとこいでやってきた子供用自転車の、補助輪に見えるあれは何かの装置なのだと信じたい。

まさか本当に本気で補助輪なのか　自転車に乗れないほど運動神経が悪いというのか。

「あやや―！　おっはよー！」

平賀さんの下の名前から作ったらしいあだ名を呼んだ理子が、アリアとのボールの奪い合いを中断して平賀さんの方へ駆け寄っている。

どうやら知り合い、というか仲良しらしいな。さすが友達の多い理子さんだ。

「あー！　理子ちゃぁーん！　いつも毎度ありがとうですのだー！」

理子のそばで自転車を止めた平賀さんは……小学生っぽい見た目はともかく、装備科のエリートである、プロの拳銃技師にもなかなか出来ない複雑な改造を、亀有にある実家の寂れた町工場でアニメを見ながらやってのける。だからみんなに尊敬されて「さん」付けで呼ばれてたりするのだ。

武偵ランクは、実力だけ見れば十分Sなのだが――相場より大幅に高い工賃を無邪気に取ることと、違法改造でも無邪気に請け負ってしまうことからAに格付けされている。

そんな平賀さんは「んしょ」と、ぶきっちょな足つきで自転車を降り……

「あー！　チョウですのだー！」

お目々をキラキラさせながら、いきなり校庭の外へと駆けていってしまった。無邪気に。

「ひ、平賀さんっ　ここでは蝶じゃなくてボールを追ってくれないか……！」

と、こう俺の懇願は虚しく風に消え……

もう蝶しか見えなくなった平賀さんの後ろを、童心に返りまくりの理子が「わーい！」などとボールをドリブルしながらついていく

さらに、その後ろをアリアが「理子！　逃げるんじゃないわよ！　サッカーはあたしの方が上手いんだからね！」とガバメントを手に追っている。

――バスバスッ！

「じゅ、銃は使うなアリア！　サッカーでは反則だ！」

などと叫びつつ、幼児みたいに走る3人の姿を見る俺の意識が――一瞬、遠のく。

サッカーでは飛んだボールをヘディングで奪い合ったりするので、身長はできれば高い方がいい。だがあの3人……143センチ、147センチ、142センチと、アンダー150が3人もいる高校生チームなんて聞いたこともないぞ。

「3人とも、頼むから校庭に戻ってきてくれ……！」

と虚空に手を伸ばしてしまう俺だが、走り回る3人は怒り狂うアリアを鬼にしたリアル鬼ごっこを始めてしまう　俺の指示なんか完全に無視だ。

俺が早くもキャプテンとしての統率力の無さを露呈しかけたところに　――

――ざあっ！

グラウンドに旋風が巻き上がり、砂煙の中から……もう1人、少女が現れた。

「……風魔……！」

一歩後ずさってその名を呼んだ俺と、現れた黒髪少女のツンとした目が合う。

諜報科1年、風魔陽菜。

高名な忍者の末裔だというウワサがある、後輩の女子だ。
直立する風魔は籠手を填めた両手で印を組み、長いマフラーみたいな赤布を風になびかせていた。いつも通り、マンガに出てくる忍者みたいなカノコだな。
まあ、その他の部分はTシャツに短パンなんだが
しかし、ああ……とうとう来ちまったか。非常に面倒なのが。
いやまあ、俺が呼んだんだが。
「――風魔陽菜、只今参上つかまつった！」
……ふざけてないから、逆に困る。
俺は――神奈川武偵高付属中学にいた頃、この風魔と戦闘訓練をしたことがある。
そのとき俺はたまたまヒステリアモードになっていて……かかってくる風魔を、赤子の手を捻るようにやり込めてしまったのだ。
それ以来コイツはなんでか俺を異常に尊敬するようになり、挙げ句『師匠』などと呼ぶ困った後輩になり果てた
「師匠！　長らく修行が忙しくてお会いできず、淋しかったでござるよー！　しかし今、ついに師匠のお役に立てる時が来て――拙者、至福！　至福の想いでござる！」
ポニーテールなのかチョンマゲなのか分からない髪を風に揺らしながら、片膝を突いた風魔は俺を上目遣いに見上げてきた。

その瞳の奥には、ゴゴゴー、と、やる気の炎が燃えている。
うう、相変わらず……暑苦しいヤツ。
だからできれば使いたくなかったんだ。
「…そう思うんなら遅刻すんな、只今参上とか言うがな、お前が一番遅かったんだぞ」
俺に注意された風魔は……余程ショックだったのか、しゅーん
一気に小さくなった。
「も、申し訳ござらぬ……！　拙者、昨晩遅くまでファミレスで修行しておりましたゆえ……今朝、起きれなかったのでござる」
ちなみにコイツの修行とは、たいていバイトを意味する。
風魔は家が貧しいらしく、学費も滞納してるぐらいの赤貧少女なのだ
「まあいい　じゃあ風魔、試しにあれをシュートしてみろ」
と俺がグラウンドに転がるボールを指すと……
「……しゅーと、でござるか。はて」
小首をかしげた。
そして俺の力をチラッと盗み見てから、『こうでござるか？』という表情をしつつ……
……卍形の手裏剣を出した。
どいつもこいつも……なんですぐに武器を出す！

武器を使うんじゃないー　サッカーは武装厳禁だ！　足で、蹴るんだよー」
手裏剣を取り上げて背中を押すと、風魔はボールのそばまで行って・
こっちに蹴ろうとしてきた
やっぱりジャンヌ同様、サッカーを知らないらしいぞ
「あっちのー　ゴールの内側にー　蹴るんだー」
必死に指示すると、ようやく風魔は「忍ー」などと言ってゴールの方に向き直り……
フィギュアスケートのように高々と足を振り上げて……
ぐきゅるー。
ん……？
何か、妙な音を鳴らしたぞ
と、俺が眉を寄せると……風魔はヘナヘナと足を降ろし……
ボールの上に、伏せてしまった　尻を突き上げて
「お、おい」
様子がおかしいので近づくと、目をグルグル回している
ど、どうしたんだ
「：　し、師匠　．に、任務の前に、何か兵糧を・　．
「ひょう……？　食い物のことか？」

「じ、実はかれこれ2日ほど、何も口にしてないのでござる……」
ぐきゅるぅ～。
という異音をまた上げた風魔は、赤くなって腹を押さえた。
どうやらこれ、腹の虫の音らしいな。
「……やき、そば、パン……」
という言葉を最後に、風魔は力尽きた。まだボールを蹴ってすらいないのに。
それを見た俺も……もう、心が折れる。
俺、アリア、理子、レキ、白雪、武藤、不知火、ジャンヌ、平賀さん、風魔なんとか必要な10人が揃ったわけだが、全員がほぼ戦力外じゃねーか。
こんなんで本当に勝てるのか、というかそもそもサッカーができるのか。
試合は8月30日。夏休みの、ほとんど最後の日なんだぞ。
そこで勝てないと、進級できない。
今度こそ――絶体絶命なんじゃないか？　俺。

結局、マトモな練習すらできない間に試合当日が来てしまった。
派手なチアリーダーたちを引き連れてやってきた一般校・港南体育高校のチームは……
て……手強そうだぞ。

それもそのはず、港南のヤツらは去年の都大会で優勝してる強豪チームらしい　しかも、ラフプレーの得意な凶暴チームというウワサもある
武偵高と当たる前の、次予選では、相手選手を3人病院送りにして、4対0で完封勝ちしてきたとか
「おいおい　なんだコイツら　カワイイのばっかり出てきやがったぞ」
「こりゃ当たり甲斐がありそうだぜ」
「ああ、可愛がってやろうぜ、お嬢ちゃんたちをよ」
などと統一したユニフォームでヘラヘラ俺たちを見回す港南の選手は、全員が男子……
というのは仕方ないにせよ、みんな体格もいい　まさに本物の熱き血潮のイレブンだ
ていうかなんだ、あの明らかにブラジル出身と思われる留学生は、ズルいだろそれはと思ったが、こっちも戦力外とはいえフランス人のジャンヌがいるから何も言えない
ユニフォームがないので体操着にゼッケンのみという出で立ちの俺たちは……メンバー同士に身長差があるためデコボコになってしまった円陣を組み、
「いいか、俺たちは……」
とキャプテンの俺が激励のセリフを言いかけたところで、
「俺たちはまだキンジに飽きてないー　一緒に進級させるぞ！」
武藤が勝手に辛辣な号令を叫び、「おー！」と全員が叫んでしまった。

試合開始直後――

まずフィジカル面で圧倒的に劣る平賀さんや風魔が、試合前のヤツらのセリフ通り体当たりで倒された。

敵は女子相手に胸とか太股ばっかり狙って身体を当ててくるので、ヒステリアモードでなくても腹が立ったが――あれは反則じゃないから、文句は言えない。

唯一体格で張り合えそうな武藤も、白雪が頭にボールを当てられて倒されたのを見ると急に立ち止まってしまい、ロドリゴとかいうブラジル人留学生にブチ倒されてしまった。

人数が10対11なのも痛かった　港南チームは不知火の動きだけが優れていることにすぐ気付き、2人で張り付いて動きを封じてきたのだ。

その上……敵は俺や不知火の服をつかんで動きを止めてくるし、ボールの取り合いでは足を引っかけて転ばせてくる。

しかもそれを審判が見てないスキにやるから、反則を取られないのだ。

逆に、俺たちがちょっと仕掛けるとわざと大仰に転んでみせて反則をアピールしやがる。

（……チクショウ。試合慣れしてやがるな……！）

そのせいで、最初に足払いを受けてから動きが悪くなったジャンヌが狙われて――武偵高ゴール前、20mほどの所で反則を取られてしまった。

前半開始5分で、もう敵にフリーキックの大チャンスが与えられてしまったのである。フリーキックでは試合が一旦止められ……港南の代表者が、ジャンヌが反則を取られた場所から狙いすましたシュートを1本打たせてもらえる

もちろん武偵高側もゴールの前方に横並びになり、壁を作って防御するのだが　…

ロドリゴが放ったシュートは、ちびっこアリアの頭上を悠々と越えて――

ジャンプした理子の手も届かない、ゴールのナナメ上側に深々と突き刺さるのだった。

これで、0対1　――終始攻められっぱなしだった武偵高は、FWの俺とアリアがボールに触れてすらいないうちに1点入れられてしまったのだ。

マズいな、力の差は歴然としてる。手も足も出ないカンジだぞ……これは

前半が終わり……港南のヤツらは「今日は10対0の記録を作るぜ！」などと上機嫌で、それぞれの彼女と思われるチアガールたちにキャーキャー言われていた。

このハーフタイム時点で、点差はなんと0対5。

武偵高チームが　－理子風に言うと、フルボッコにされてる状態である。

ボールの占有率は、10対90ぐらいだろう。不知火が敵のマークを振り切って一度俺までパスを繋いだが、決死のシュートはドイツ人GK・ユンカースに止められてしまった。

なにせユンカースは、身長も腕を広げた幅も2mぐらいある大男なのだ。まさに守護神

ってカンジだよ　俺はゴリラそっくりだけどな。
しかし――後半で、5点も取り返せるのか。いや、勝つためには6点必要だぞ
俺はロッカーの立ち並ぶ広い控え室を渡り、誰もいないサノカー部の部室に入って深くうなだれた　キャプテンが沈んでいる姿は、あまり仲間に見せない方がいいからな
「6点か…」
悔しいが、この仔務で進級を決められる事は無さそうだ
いや、というか単純にこの状況が悔しい
ボールをほとんど取れないまま、何度も蹴り転がされて　それが後半も続くのか
――思ったより、精神的にキツいな、スポーツってものは
と、俺がベンチに座って溜息をついていると――
「だーれだ」
いつの間にか部室に侵入していた誰かが、後ろから俺の視界を手で塞いできた
この声
「アリア……
振り返ると、やはり　ゼッケンを外した、アリアだ
目隠しを解除したアリアは、よっ、とベンチの隣に座ってきた
「同じネタを2回やるな　それ、チアの練習の時にもやっただろ」

と俺が言うと、アリアは……自分がこのあいだ『だーれだ』をやったことを忘れたのか、キョトンと目を丸くした。

「え、あ、ああ、うんそうね」

などと言って、ペットボトルからスポーツドリンクを一口飲み、「ちぇ、仲いいなー」などとワケの分からない事を呟いている。

「はい。キンジにもあげる」

飲みさしのペットボトルを笑顔で差し出してきたアリアに、俺は固まってしまう。

4月に間違えて俺とコーラを回し飲みした時は、ブン殴ってきたくせに……

なんだよ　何もかも忘れたのかよ、お前は。

でも……受け取らないのも悪いよな、こういうの。

「……」

少し迷ってから、俺は思い切って一口だけ飲んで返す。

今さっきアリアがあのちっちゃな口をつけたばっかりのものに、俺も……って、あ、マズいぞキンジ。早くも弱いヒステリア性の血流が……今回は、顔面に来たな。

こんなことで赤くなるな。これはスポーツ中の水分補給にすぎないんだ。

目だけでチラッとアリアの方を見ると、その唇がちょっと笑っている。

な、なんだよこのアリアは。いつもと感じが違うな。

なんか、余裕があるというか……
「元気出して、キンジ　もう負けたような顔しないの」
「……もう負けたようなもんだろ」
「まだよ。どんな試合でも、最後まで勝てる可能性はある。どっちが勝つかは分からない。だから、みんな頑張るのよ」
アリアにしては……いい事を言ってるな。
と、俺が少し同意するような顔をすると　アリアは急に素に戻って、照れ笑いした
「って、なんか普通の高校生みたいなこと言ってるね、あたし」
普通の高校生、か。
そういえば自然に見ていたが、試合中のアリアは確かにただのスポーツ少女ってカンジで……まあ、好感が持てたといえば持てたな
「普通にしてると――あたしって、どうかな？」
あまりにも今考えていた通りのことを聞いてきたアリアに、俺はついギクッとする。
「ど、どうかな、って。わかんねーよ。そんな漠然とした質問」
「漠然とした答えでいいよ」
「ん……その、まあ……悪くないんじゃないか……？」
仕方なしに言葉を濁しつつ、これ以上聞くな、という感じにそっぽを向く。

なんで……こんな流れになってんだ　ワケが分からん
だいたい本人を前にして、本人を褒められるワケないだろ
俺はそこまで素直な性格をしちゃいないんだ
「ふぅーん。『悪くない』かぁー……」
ふむふむ、と腕組みして何かを考えたアリアは……
とんとん、と俺の膝をつついてきた
「な、なんだよ」
触られたのでちょっと緊張しながら振り向くと、アリアは再び何かを考えるような顔をして——次の一言を言おうか言うまいか迷うように、少しだけ口ごもった
「じゃあ……理子は？　普通にしてる時の、理子はどう？」
理子？
「なんで……いま理子の話なんだよ」
「な、なんでもいいじゃない！　あの子のことは？　あんたどう思ってんのよ？」
なぜか自分の事を聞いた時以上に赤面しつつ、アリアが問いつめてくる。
この間の事を、まだ怒ってるのか？
まあ……よく分からんが、答えないといけなさそうな空気だな
「……こう言うと、お前が機嫌を損ねるかもしれないけどな……いろんな態度をするから

惑わされる事も多いが、理子は根はそんなに悪いヤツじゃないと思ってる」
アリアはこっちをまっすぐ見て、俺の話をめちゃめちゃ真剣に聞いている
なんだよ。
俺の理子評がなんでそんなに重要なんだ。お前にとって。
「理子は――ああ見えて、実は凄く芯の強いヤツなんじゃないか？　おバカやってるのは趣味みたいなもんで、実際には俺たちより大人って感じがするよ。俺やお前みたいに割と孤立しがちなタイプじゃなくて、クラスでも人気者だしな　それにジャンヌが言ってたが、理子は陰でコツコツ努力するタイプらしい。だから、あいつから学ぶことはいっぱいあるハズだ……お前も　…あんまり、ケンカすんな」
最後の方は――アリアが目を潤ませていることに気づいて、俺は話を打ち切った。
ホームズ家の仇敵・リュパン家の女を褒めたのがマズかったのかな
いや、どこか、感動したような表情にも見えるが……
「で、でも　理子はここでアリア……じゃない、あたしたちをいっぺん殺しかけたよ」
「――4月の『武偵殺し』の事か。まあ……理子とは何度か銃を向け合ったが、そんなの武偵高じゃ日常茶飯事だろ　その後、理子は俺たちを助けてくれたし――このサッカーの仕事だって理子が持ってきてくれたんだ。またいつか戦う事もあるかもしれないが、今はとりあえず休戦中なんだよ。根に持つな」

「……キンジは……」
アリアは顔を伏せて、ぎゅう、と俺のシャツの裾を掴んだ
「ほんとに、優しいね」
そう言って顔を上げたアリアは、「？」という顔をしていた俺に――
くいっ、と背を伸ばすようにして、いきなり
――ちゅ――
短いキスをしてきた
まるで、何かのお礼をするように。
マシュマロみたいな唇の感触と、シロップのように甘い香り――
「……！」
――な、なんでだよ――
と思うが、あまりの事に俺のノドからは声が出ない
「よし！　これで後半、なんとかなるでしょ！」
ばちん、とウィンクしたアリアはツインテールを翻してベンチを立ち、そのまま……
とてとて　小走りに部室を出ていってしまった
あまりに唐突な展開に、ヒステリアモード性の血も……
これは、ワンテンポ遅れて来るタイプの固まり方をしているな

しばらくしてようやく石化が解けた俺が、後を追っかけようと部室を出ると――
いきなり、出くわした。
廊下で、アリアと。
「ア、アリア」
俺は気恥ずかしくなって、つい手の甲で自分の口を隠してしまう。
「？」
と形のいい眉を寄せたアリアは、ちうー、とプラボトルから何か飲んでいる。
ん……？　さっきは、ペットボトルでスポーツドリンクを飲んでたハズだが……
「……な、なんだよ今のは。ワケが分かんねーぞ」
赤くなって詰問すると、アリアは更に眉を寄せた。
「今の？」
「さ、さっきそこの部室で……その、妙な事しやがって。何なんだよ　説明しろ」
「妙な事？　あんたこそ何よ。あたしはずっと、女子更衣室の扇風機でクールダウンしてたの。頭冷やさないと、あのいやらしい港南のヤソらに拳銃使いたくなっちゃうから」
……あ、ああ……
なんとなくだが、分かった。分かってしまった。
さっきの、一連の不可解な流れの裏が。

って、遅えよ俺、もっと早く気づけ　これ、確か2回目か3回目だろ　ひっかかるの……っ」

しかし、ってことは……お、俺は何て恥ずかしい発言をしてしまったんだ……

という気付きと共に、ある程度覚悟していた事態が起きてしまう

ドクン、ドクン……という心拍の音。この感覚

「本当に……」

「っ――」

「仔猫だな」

「は、はい？」

「仔猫みたいに、イタズラ好きな子だよ　それがまた俺を惑わせる」

いきなり虚空を見上げてキモい口調で言った俺に、アリアが頬を引きつらせる。

ああ、アリアは何も気にしなくていい　いま俺は、少し安心したところなんだよ

フッ……って、笑うな　そういう笑い方で　ヒステリアモードの俺よ

目の前のアリアが思いっきり引いてるだろ

ていうかそのアリアを壁際に追い詰めて、さりげなく肩に片手で触れやがるし。

何をしたいんだ、キンジ。

アリアと俺はまだ、ああならなくていい　なにしろ俺たちは今日だけ『普通の高校生

なんだからね。なら、その時間は大切に、ゆっくりと味わうべきだ。そうだろう？」

あーあ……

アリア、「え、なに、なに」とか言いながら真っ赤になってテンパってるじゃねーか。

両腕を胸元で縮こまらせちゃって。かわいそうに。

「ちょ、ちょっとキンジ……！　な、なんで今、こんな所でなのよー　しょ、正気に戻りなさい！　あと5分もしたら、試合に戻らなきゃなんないのよ!?」

べち！　と額を平手で押し退けられ、俺は一旦反省したように身体を離すフリをした。

アリアが少し安心したような顔をしたので、もう一度、気に距離を詰めて奇襲してみる。

うきゅ！　と案の定アリアは壁に全身を押しつけて固まった。はは。

「そうだねアリア――もうハーフタイムのインターバルも終わる　ボール遊びを続けようじゃないか。5点もあげれば、敵へのハンデも十分だろうしね」

俺はアリアのツインテールの片方に頬をつけるようにして、耳打ちした。

「は、ハンデって……」

「反撃だ。勝つぞ」

ここで、更に低く、明瞭な声だ。

次のセリフに、一言も口答えさせないためにな。

「アリア　―黙って俺に、ついてこい」

ロッカールームに一同を集めた俺は――

キャプテンとして、チームに2つだけ指令した。

1つ　今までの自分のポジションや通常のサッカー理論は、全て忘れていい

2つ　自分らしくやれ　ただし港南チームを見習い、反則を取られない程度にな

以上。

いきなり鋭い表情で喋り出した俺に一同は　理子以外は　初め驚いていたが、この2つの指示を聞いて活気づいた。

あとは何人かのメンバーに個別に指示をして……

風の強くなってきた第一グラウンドに戻る、

俺たち10人は、もう最初のようにサッカーの教則本にあるような並び方をしていない

各々が一番やりやすそうな位置に、バラバラに立っている

港南チームはそんな俺たちを見て、吹き出していたが……

――俺は逆に、ここへ来てようやく皆が本気になったのを感じるぞ――

ピピーッ、というホイッスルの音と共に、港南のキックオフで後半戦が始まる

同時に、俺、アリア、小知火、平賀さん、さらにDFだった武藤が敵陣へと飛び出した

さらに自由の権化ことGKの理子も、ゴールを放置して駆けてくる

港南はその動きに爆笑してから、無人となった武偵高ゴールを狙って走り始めた。
「反撃の号砲は受け持とう――私に、続け！」
まずは前半で動きの悪かったジャンヌが……
油断しまくりの港南・ロドリゴから――ひらり。
華麗な足捌きで、ボールを奪い取った。
「――星伽！」
露出させた美脚で白雪にパスを放ったジャンヌは――俺の指示で、眼鏡をかけている。
元々目が悪いジャンヌは乱視用のコンタクトレンズを入れていたのだが、試合開始直後、相手のラフプレーのせいでそれを落としてしまったのだ。
そのせいで彼女の動きが悪くなったことに気づいた俺は、平賀さんに頼んでジャンヌのメガネに即席の落下防止ヒモをつけてもらい……
ジャンヌはメガネ着用でのプレーの危険を承知の上で、それを快くかけてくれたのだ。
ありがとう、ジャンヌ。やはり君にはメガネがよく似合うよ。
「いきますっ！」
ジャンヌがパスしたボールの先には、足を大きく振りかぶった白雪が待っていた。
その黒髪ロングの頭には、いつものリボンみたいな白布がない。
白雪は、短時間しかもたない代わりに瞬発力を向上させる鬼道術を解禁したのだ

「――えいっー」

爆音と共に白雪の足元から飛んだボールは、センターラインをナナメに越えて――港南の選手でさえ避けるような炎の球と化し、どかっ！　とサイドラインの手前で待ち構えていた武藤のドテッ腹によって停止させられた。

顔面を苦痛に……歪ませるどころか何故か恍惚とした表情で倒れた武藤の背後から……小さな体を活かして隠れていた、平賀さんが姿を現す。

「不知火くんの番なのだ！」

平賀さんは小鹿のような足で、センターの不知火まで何とかパスを送る。

前半では2人にマークされていた不知火だが、今は1人にしかマークされていない。

GKの理子が前線に出てきたおかげで、フィールド内の人数が拮抗しているのだ。

ゴールを空にするリスクを冒しても、乾坤一擲の強襲に賭ける。

そのプレッシャーに耐えられる不知火は、さすがに強襲科魂を持ってるな。

ボールを受けた不知火は、器用なシザースで敵をやり過ごし――

「レキさん！」

右サイドのレキに、パスを回した。

レキは狙撃手。気配を消すのが上手……というか、気配というものが生来ほとんど無い。

巧みに人の視線を避けたレキは、完全にノーマークになっていたのだ。

ダイレクトパスで、レキから――
その先に回り込んでいた俺とアリアの中間へ、ボールが正確に転がってくる。
――キンジ！
「合わせろアリア！」
俺とアリアは、ゴールへ向かうボールめがけて左右から駆け込んだ。
敵GK・ユンカースが、横っ飛びに跳ねて――
対する俺とアリアは、ボールを交点にするようなX字に駆けながら――ビシュノー交差しながら、シュートを放った！
ユンカースとは反対側に飛んだボールが、ゴールネットに深々と突き刺さる。
ピピィー！
というホイッスルの音と同時に、武偵高チームは一斉に飛び上がった。
――やった。
1点、返したぞ！
今のシュートは、名付けて『X』。
俺とアリア――長期間パートナーとして戦ってきた2人だからこそできる、息の合った攻撃ってヤツだよ。
さすがの守護神・ユンカースも、最後の瞬間までどっちが蹴るか分からなかっただろう。

「アリア。綺麗なシュートだったよ」
ポン、と軽く背を叩いてやると、『X』のシュートを決めたアリアは――
「キンジ！　この調子でどんどん取るわよ！　ほら、早くセンターラインに戻る！」
とびっきりの笑顔で、キャプテンの俺に命令してくるのであった。

強豪だったハズの港南チームが、たちまち崩れ始めた。
元々がマトモなサッカーチームを相手に訓練してきた彼らだ。セオリーやポジションを無視して変則的な動きをする俺たちに、どう対応していいのか分からないらしい。
その後も、アリア、俺、アリアと、『X』が面白いように決まる。
後半40分時点で、スコアは4対5。あと1点取れば、同点だ。
「悪くないわね、こういうスポーツも」
ハットトリックを達成したアリアが、猫っぽい犬歯を見せて俺に笑いかけてくる。
点差が詰まったのも嬉しいが、一番嬉しいのは――
――君が笑顔になってくれる事だよ、アリア。
だが……残り時間が5分を切った辺りで、呑気にアリアの観賞ばかりもしていられない事態が起こった。
港南が、フォーメーションを変えてきたのだ

ＤＦを5人も配置し、ＭＦもやたら防御的な動きをしている。
ボールが自陣に入ってくると、安全なパス回しばかりして……攻めてこない。
（――逃げ切るつもりか）
残り時間は、3分。
ああやってダラダラと時間を浪費されてしまえば、時間切れでこっちの負けになる。
ルール違反ではないが、一見卑劣にも見えるその行為にキレたのか――
「お前たち――それでも男か！　正々堂々と戦えッ！」
騎駆けする騎士のように、ジャンヌがボールめがけて駆け込んだ。
ペナルティエリア内までゴールに肉薄したジャンヌは港南のパス回しを止め、ボールを奪おうと足技を競っている。
「くふふっ！」
そこに理子が加勢した。
蜂蜜色をしたそのフワフワの髪が風に　いや、風向きとは逆に？　なびいて……
その髪のせいで、俺と、俺の近くにいた審判からジャンヌたちの姿が見えにくくなった時――
「うっ――――！」
敵ＤＦと交錯したらしいジャンヌが、思いっきり転倒した。

「……ジャンヌ！」

俺と審判が駆け寄ると、ジャンヌは膝を押さえて地面に伏せている。

よく見えなかったが、負傷したのか。

「……う……くッ……はぅ……」

「ジャンヌ！　うわぁあ――――んジャンヌの脚が折れたぁーバキッていった――――！」

苦悶の声を上げるジャンヌと、その場に座り込んでびえええええと泣く理子

プレーに必死だった敵のＤＦは、ボールを放って呆然としている

審判はその3人を見回してから　ピッ！　と短くホイッスルを鳴らした。

ジェスチャーを見れば、港南の反則を示している。

「……」

それを見たジャンヌと理子はピタッと沈黙してから：

2人して、ケロッと立ち上がった。

そして、「やったね」とハイタッチなんかをしてる。……ぞ？

（あ……ああ、そういうことか……！）

ジャンヌ・ダルクは　―正々堂々としてるように見えて、実は策士の一族

そしてやたらプライドが高いから、やられた事はやり返す厄介な性格でもある

彼女は自分が前半にやられた「大げさに騒いでファウルを取る」作戦に、今きっちりと

仁返ししたのだ。しかもそれを先読みした埋子が、髪を動かして審判から見えないように目隠しを作って。

あの2人もイ・ウー時代から仲良しだったらしいから、息が合うんだな。

「武偵高、PK（ペナルティ・キック）だ」

審判がそう言う脇から――

アリアが、現れる。

「キンジ。あたしにやらせて。今のあんたなら……分かってるでしょ？」

左足で軽くグラウンドをつついたアリアに、俺は「ああ、任せるよ」と笑顔を見せた。

試合は、一時停止となり……

ゴール正面11m、ペナルティーマークの上にボールが置かれた。

通常PKでは攻撃側が有利なものだが、相手は身長2mの守護神・ユンカースだ。

対し、身長が4分の3もないアリアは

「爆撃機（ユンカース）をやっつけるのは、小回りの利く戦闘機（ファイア）の仕事だからね」

と、ボールから助走距離を取って不敵に笑っている。

ユンカースとアリアの、騎打ちを前に、フィールドは静まりかえった。

甲高いホイッスルの音に続き――たたたたーッ！　と駆けたアリアは――

ビシュッ！

今までずっと右利きのそぶりでプレーしていたのに、初めて左足でシュートした。
アリアは、手も足も両利きなのだ。つまり、右足でも左足でもボールが蹴れる、
ボールはアリアの右足にばかり注目していたユンカースの不意を突いて――
ゴールネットを激しく揺らし、ピ・ピィー！
得点を宣言するホイッスルの音に、武偵高チームは歓声を上げた。
これで5対5。同点だ。
喜びのポーズなのか飛行機みたいに両手を広げてセンターラインに戻るアリアと、同じ姿勢でアリアに続く平賀さんと、さらに真似っこ理子もそれに続く、
アンダー150sが編隊飛行しながらセンターラインに戻った時、時間は後半45分――規定時間を、回った。
だが、すぐに試合終了にはならない。
ここからはAdditional Time　通称・ロスタイム。
負傷者の診断などで中断されていた時間を埋め合わせるための、短い延長戦に入るのだ
俺の体感では、ロスタイムは1分……といったところか。
ここまできたんだ。取るぞ、1分以内に――もう1点！
港南ボールで試合再開となるが、

「――〝こっちだ！　ノールックパス〟！」

敵キャプテンの声を真似て叫んだ理子に騙されて、港南選手はボールを取られてしまう
いいぞ。また延々とパス回しをやられたら、時間切れで引き分けになってしまうからな。
ちなみにこの全国高校サッカーCS（チャンピオンシップ）二次予選に、延長戦は無い。
同点の場合は、一次予選の勝ち点が多い方が勝ち上がるシステムになっている
それじゃあダメなんだ
もちろん単位が欲しいってのもあるが　―今日は、せっかく俺達も普通の高校生みたい
になれたんじゃないか。
その貴重な90分間を、せめて、いい思い出にしたいんだ
思いはみんな同じだったらしく、武偵高チームはもう防御をかなぐり捨てて全員攻撃の
態勢を取っている。
「アリア！」
ボールを頭上にトラップした理子が、宙返りしつつのオーバーヘッドキックでアリアに
パスを送る。
アリアから俺、俺から武藤、不知火、平賀さん、ジャンヌへとボールが繋がる。
俺たちはジグザグにパスを繋ぎながら、少しずつゴールに肉薄していく
このボール、絶対、放しはしない　そして誰も放さないと信じて協力するんだ。

審判が腕時計を見ている。あと、30秒――！
港南も、さすがは昨年度の都大会ベストチームだ。その防御は、最後の最後まで堅牢
俺達とは逆に、ほぼ全員で防御の態勢を取っている。
なかなか、ヤツらのディフェンスを抜けきれない。
時間が無くなっていく、あと20秒
――仕方ない。
ここへ来て、俺は一応のキャプテンとしてイチかバチか防御線の突破を試みる事にした
目の前には港南のDF――キャプテンが立ちはだかる
一騎打ちだな、大将同士の。
審判がホイッスルを咥えた。あと、15秒 ――！
俺のボールをクリアしようと、敵キャプテンが突っ込んでくる。
その時、ヒステリアモードの俺の脳裏に――ある映像が見えた
あの技。見たことがあるだけで、試した事はない
――だが、きっとできる。できなきゃダメなんだ、負けないためには！
俺は――ボールを、突っ込んできた敵キャプテンから離すように――サッ
足の裏で自分の背後に転がした。
俺自身は背後のボールを守りながら、回転扉のようにその場で回りながら相手をいなす。

結果、俺の背中と、俺の横を通り過ぎてしまった敵キャプテンの背中とが合わさり――
ボールは……敵ゴール方向に向かって、まだ俺がキープしている状態になる。
マルセイユ・ルーレット。
理子が持ってきたDVDにあった、往年のフランス代表・ジダンの得意技だ。
見様見真似でやってみたけど、できるもんだな。
というか、銃弾撃ちや真剣白刃取りに比べれば簡単なもんだったよ。
さあ――目の前には、もうキーパーしかいない。
港南の守護神、ユンカースだ。
その窪んだ眼窩は、まっすぐに俺を見据えている。
「もらうぞ！」
俺は大きく振りかぶって、シュートするそぶりを見せてから――
ぽん、と右サイド後方に駆け込んできていた風魔陽菜の頭上へ蹴り上げた。
直接シュートをしなかったのは、まだゴールまで遠かった事もあったが――ユンカースが左サイド、俺側に思いっきり移動してきていたからだ。
風魔の前には、ただ、ぽっかりと口をあけたゴールだけがある。
「――忍！」
俺が上げたボールに、飛び上がった風魔がヘディングを合わせて――

しかし百戦錬磨のユンカースは、それに反応した。
ハエを叩き落とすようなパンチングで、ボールをフィールドに戻してくる。
ボールはセンターで跳ね
「迂闊ソ……！」
悔しそうな顔をした風魔は、着地と同時に――ぼふんっ！
その足元から、濛々と砂煙を上げた。
審判も眉をひそめるギリギリの行為だが、反則は取られない
そして、取らなくて正しいだろう。
あれは火薬でも何でもなく、ただ、足を踏みならしただけなんだからな。
一般人には見ても分からないだろうが、あれは風魔の技・『地撲チ』。頭から足首まで全身の関節を、一斉に少しずつ高速で下げ、激しい衝撃を足の裏に発生させる技だ
ちなみに俺は自損技『桜花』を、あれをヒントに中学のころ開発している
砂煙に囲まれた風魔が見えなくなり――煙が晴れても、その姿はもうそこには無かった。
消えたのだ。風魔が。
だがその事に驚いているヒマはない。
時計はまだ動いている。
残り、10秒を切った――！

宙を泳ぐボールに追いついたのは、足の速いアリアだ。
だがその眼前には、体勢を立て直したユンカースが両腕を広げて立ちはだかっている。
「――！」
壁のようなユンカースを避けるように、アリアはツインテールを跳ねさせつつ――
ヘディングで、パスを放った、誰もいない、ナナメ前方の空間に。
アリア、ここで痛恨のミス……！　かと思ったが、それは違った。
ゴールのすぐ手前から――
砂をかぶって保護色になりつつ、地面を這って移動していた風魔が、バッ
と、再び姿を現したのだ。
「自分で蒔いた種は、自分で刈り取るでござるよ――！」
砂塵のせいで、審判を初め、誰にも何が起こったのか分からなかっただろう
ユンカースは何かを抗議しようとしながらも、さらに横っ飛びしてゴールを守る。
風魔はシュートするようなフェイントを見せてから――
「師匠！　アリア殿！」
目の前のユンカースからボールを遠ざけるように、バレエのように後ろ足を上げ、背面
ボレーシュートを見せた。
その踵から飛んだボールが、再度、ゴールの左側高いところに返ってくる。

「――！」

左サイドの俺とセンターのアリアはX字に飛び上がり、
その交点から放った俺のヘディングが、ばすっ！
――ゴールネットを――
揺らした。
やった……！
名付けるなら『X・エアリアル』――空中で放つ、ヘディングでの『X』だ
とっさの思いつきでやってみたが、できたな……と思ったが、がす！　と同じくヘディ
ングを放とうとしたらしいアリアが俺の後頭部に頭突きを当ててきた。痛えッ！
俺が悶えつつ地面にブッ倒れ、アリアが俺の背中に着地し、風魔が拳を振り上げ――
試合終了のホイッスルが、フィールド内に鳴り響いた。
6対5――なんとかなった、みたいだな。
みんなのおかげで。

試合後、再び帯銃し防弾制服に着替えた俺は、なぜか……
もう誰もいない第二グラウンドに、戻ってきてしまっていた。
そして夕暮れの中、一人で無意味にボールを転がしている。

（普通の、高校生……か）

今、俺がなろうと足掻いている――平凡な人間。

普通の授業を受け、放課後は訓練や任務ではなくスポーツや文化的な部活動を楽しむ

テレビを見て、マンガを読み、ケータイをバチバチ打って青春を謳歌する――

本当にそれが俺に合ってるかどうかは、実は……分からない

でも、挨拶がわりに拳銃を向け合うような高校生活よりはいいに決まってるよな。

だから俺の中には、強い憧れや羨望のようなものがある　普通の高校生、というものに

今口こうやって、普通のサッカーをやってみて……楽しかったしな。

その感情のせいなんだろう。今こうやって、木練がましくボールなんかを蹴ってるのは。

だがこの感情もまた、秋には硝煙の匂いと剣戟の音に塗りつぶされていくんだ。

俺は少なくとも来年3月まで　まだ、武偵高の生徒なのだから。

改めてそんな事を考えた俺はボールを拾い、セミの声を背に……水飲み場で上半身だけ

裸になって、軽く頭に水をかぶった。

そうやって汗を流してから頭を振り、無造作に水を飛ばす。

あとは、夏だから放っておいても乾くだろう。

そう思って、脱いだシャツを再び手に取ると……横から、タオルが突き出された。

「――はいキーくん。使って」

それはもうシャワーを終えて例のヒラヒラ制服に着替えた、理子だった。
あー……今の犬みたいな俺の仕草、見られてたのかよ。
「いるならいるって言えよな、理子」
俺は少し赤くなりつつピンク色のタオルを受け取り……
「……そういえば、理子にお礼を言ってなかったな」
「……お礼？」
「単位の事だよ。この試合……というか任務は、お前のおかげで請け負えたんだからな ありがとう、理子。今日は楽しかったよ。スポーツってのも、たまには悪くないな」
と言いつつ、俺がゴシゴシ頭を拭ったタオルをどうするものか思案していると——
理子はそれを奪い取って、背中の赤ランドセルに押し込んでしまった
そして、俺が足元に置いていたボールをテン、テン……と鞠つきしてグラウンドの中へ歩いて行く。
黙って歩くので、シャツだけ着直した俺も……ついていく。
俺がゴール前まで来ると——理子はゴールエリア内から、
「——勘違いするな。あたしはお前たちと馴れ合うつもりなんか、これっぽっちもない」
急に鋭い口調になって、言った
「スポーツ？　ふざけるな。そんなトラないこと、どうでもいい」

……この、ムード。

裏の方の理子か、どちらかと言えば、理子の本質に近い方の――

俺の身体に、少しずつ緊張感が漲っていく

「この任務は、お前とアリアをより強く結びつけるために拾ってきた道具に過ぎないんだ。お前が3年に上がれなくて、アリアと疎遠になられちゃあたしが困る　あたしが倒したいアリアは、お前というパートナーと結びついて完成する――完全な神崎・H・アリアだ。だから……お前とアリアは、ずっと……今日みたいに、仲良く……」

と言いつつ、理子は言葉を詰まらせた。

そして、キッ――と、普段のおバカな理子からは想像できない鋭い目でこっちを見る。

何かに怒っているのか、悩んでいるのか、その顔は俺かに紅潮している。

相変わらず……感情の流れが読めないヤツだ。

「いいか、覚悟しておけよ、お前たちは　－あたしの獲物だ－

と、いう理子を、俺は黙って見つめ返す。

……ああ、分かってるよ。理子。

今日という日はあくまで、俺たちにとって休憩時間。

お前がこの第一グラウンドで俺とアリアに自走ＵＺＩを向けた時に始まった、俺たちの戦いは――まだ、決着がついてないんだよな

「でも……今日のキーくんは……カッコよかったよ」

くる、とこっちに背を向けた理子の声は……今度は、なんとなく普段の理子の声に近い。

コインストのコインが、くるくると宙を舞うように――

彼女の心が、表と裏の狭間で揺れ動いているのが分かる

そんな自分をごまかすように、理子は両手で持ったボールで顔の下半分を隠していた

「……それと、さっきの部室でのこと……ありがと」

やっぱり、な。

さっき部室で俺に理子の事を聞いてきたアリアは、理子が化けた偽アリアだったのだ。

ややこしい上に、気恥ずかしいこと……しやがって。

「あー……うー……なんか、モヤモヤするっ……」

表・裏・表とクルクル入れ替わった理子は、最後は自分に苛立ったように――落としたボールをぐじぃと踏んづけ、

「こういうの……なんとなく、がおーだぞっ！」

ぴきっ。

両手の人差し指で、頭に二本ツノを作った。

そしてフリルだらけのスカートを翻し、ペナルティー・アークの辺りまでボールをドリブルしていく。

「キーくん！」
くるっ、とゴール前の俺に振り返った理子の愛らしい童顔は！　いつもの理子だな。
なんでかちょっと、キレ気味だけど。
「なんだ！」
かなり離れた俺たちは、叫び合って会話する。
「受け止めて！」
と、ボールを宙に放った理子は――
「キーくんが、好き！」
ぱすっ！
いきなり、ボールを蹴ってきた　ドロワーズ丸見せのボレーシュートで。
「……！　おまっ、えは、なにを――！」
俺の背後のゴールめがけて、放射線を描くボール。
突然の事に、俺は――
一瞬流れたヒステリアモード性の血液を感じるヒマも無いまま
――ばしっ
横っ飛びに飛んで、つい反射的に、ボールを胸の前で受け止めてしまっていた。
夕陽を背に、理子がまるでゴールを決めたかのようにシャンプして――

空中でガッツポーズしてから、着地と共に「きゃはは！　キーくん必死だぁー！　でもでも、うっそだよー！」と小悪魔みたいなアカンベーをしてきた。

理子。理子。

俺は頬を引きつらせ、少し苦笑い混じりに……頭を小さく横に振って、立ち上がる。

理子。お前は本当に――

分からない子なんだよな。どこまでも。いつまでも。

Reload For The NEXT!!

再装填3　グッバイ・アリア

オフサイドというサッカーのルールを知らなかった。
いや、聞いたことはあったのだが正しく理解していなかったのだ。
『原則、GK以外の敵全員よりゴールラインに近づいた味方にパスを出してはダメ』というのがオフサイドの、改めて不知火に教わったのに分かりにくかったルールだ。
で……試合中は砂埃で審判に見えていなかったのだが、港南高校の抗議とチアガールがケータイで撮っていた映像によって……
決勝点に繋がる流れでアリアから風魔に渡ったパスが、オフサイドとされてしまった。
サッカーで試合後に得点が覆ることは通常ありえないのだが、映像ではアシスタント・レフェリーも旗を揚げていた事もあり、特例として抗議は認められてしまった。
従って最後の1点は無効となり、試合は引き分け。
規定により、次予選の勝ち点が多かった港南体育高校の勝利となり――
俺は残り0・7単位必要なところ、0・6単位しかもらえないことになった。
いやいや、『もらえないことになった』じゃ済まないぞ……！
もう、夏休みは明日しかないんだから！

完全に途方に暮れてしまった俺が担任の高天原ゆとり先生に電話すると、さすが彼女は武偵高の良心とあだ名されるだけあり、0・1単位の仕事なら何とか作れるとのこと

というわけで俺は――

最後は先生からのお情け任務、『探偵科棟内の清掃』を請け負わせてもらった。

で、8月31日早朝から1人で始めた清掃の仕事だが……

これがなかなか、骨が折れる。探偵科棟には大きな講義室が1つ、大きめの教室が4つ、小さな分散教室が6つもある　全体ではちょっとした雑居ビルぐらいの広さがあるので、1人でやるとなると深夜までかかりそうなカンジだ

『誰かに手伝ってもらおうかと思ったが、武藤には「ギャルゲーの主人公みてーなヤツをこれ以上丁伝う義理は無え」という意味不明な理由で断られてしまった　不知火は「他に頼むべき人、いるんじゃないかなー？」と笑い混じりに電話を切りやがった

仕方なしにアリアに電話したが、出ない　白雪は明治神宮での祭事があり明朝まで不在、理子は同人誌の即売会とやらにジャンヌを連れて行ってしまっている

風魔は『過日ノ敗戦　貴ハ某ニ有リ　武運拙キヲ恥ジ　辞世ノ句ヲ考案中』という漢文みたいなメールを送ってきて、「師匠に合わせる顔が無いでござる」というムード。平賀さんには　――ある仕事を依頼　しているので、ジャマしたくない

仕方なく俺は、夏休みの最終日を……無人の探偵科棟にモノプがけをし、窓ガラスを拭き、独りぼっちで潰していくのであった

（独り、か……）

なんだろうな、このカンシは。

淋しい……のか？　俺が？

孤独になんか慣れてるハズだが……最近、身の回りに仲間が多かったからなだが、人間は結局のところ本当は独りなんだよいつも一緒にいるたなんて、結婚した夫婦ぐらいのもんだろう

（……結婚）

という言葉で思い出したが……そういえば先週、粉雪に予言されたな

遠山様は、求婚されます　今月中に

……だっけか

当たり前のことだが、まだ俺はプロポーズなんかされていない

今月は今日でおしまいだ　そしてその今日も、俺はこのつまらない仕事で潰れる予定だ

やっぱりハズレだったな　粉雪のトンチンカンな『託』は

（まだまだ、あの子は未熟だな）

と：　笑いしながら、まだ掃除していない小教室のスライド扉を開いた時……

――ぽふっ。

扉に挟んであったらしい黒板消しが落ちてきて、頭上にチョークの粉がミニ雲を作った。

「こんなトラップに引っかかるなんて、未熟ねえ。あんた諜報科には向いてないわ」

小教室の机に腰掛け、足を組んでいたのは――

「アリア……？」

さっき電話をかけても出なかった、アリアだった。

一応『探偵科に来い。こんど何かそうこと聞いてやるから、掃除を手伝え』とダメ元でメールを出しておいたんだが……本当に、来てくれたのか。

アリアは、ぽんっ、と机から床に降り立ち、頭の粉を払う俺の前に来た。

「うっわ　しけた顔してるわねー、いつもの事だけど」

「うるせーな」

「あらあら、淋しかったのねー？　顔にそう書いてあるわよー？　……会いたかった？」

にやー、とイジメっこ顔で笑いかけてくるアリアに、俺は口をへの字に曲げる。

コイツ、ドSだよな　こういうところ。俺が弱ってると調子こきやがる。

だがまあ、ここで否定的な事を言って帰られても困る。ここは一応、肯定しておこう。

「……まあ、ちょっとな」

と答えると、アリアは……にへらー。

なんか知らんがすごいデレデレした笑い顔になった。
なんで俺が『会いたかった？』を肯定しただけで、そこまで勝ち誇ったような顔をする。
「うんうん。正直なキンジはいいキンジよ。じゃあ、アリア様が手伝ってあげる」
アリア様よ　良いキンジと悪いキンジを分けるルールブックを作ってくれ
あんた、悪いキンジを見つけたら耳ちぎろうとするんだからな。
「ああ……正直、助かる。1人だったら深夜までかかりそうだったからな」
「夕方までには終わらせるわよ　それが済んだら、あんた留年しないで済むのよね？」
「ああ　これを完了すればな　でも、よく来てくれたな、アリア」
「え……？　っと……まあ、あんたが単位不足になっちゃったのは……パートナーとして振り回しちゃったあたしのせいもあるからね。責任の割合は2％ぐらいだと思うけど」
いやいや、98％ぐらいお前のせいだと思うぞ。
と思ったが、さっき机で足を組んでいたアリアの太ももに拳銃ホルスターを視認していた俺は何も言わないでおく。
「……ん？」
ふと、アリアがさっきまで座っていた机の上を見た俺は……
そこにピンク色の糸みたいな細かい髪の毛のくずが落ちてる事に気づく。
「あ」

アリアもそれに気付き、スカートのポケットから出したハンカチでサッサッと払うなんか、慌てた手つきだな。

ツインテールを揺らしたアリアから、いつものクチナシみたいな甘酸っぱい香りと……微かな、シャンプーの匂いがした。

「お前、髪切ってきたのか？　あんまり見た目は変わってないけど」

「べっ別に、あんたと2人で会うから――美容院とか行ったワケじゃないんだからねっ」

あ、『べっ別に』って言った。早口だったけど、確かに言ったよな。

埋子がアリアを茶化してマネる時によく言う言葉だから覚えてたが、本当に言うんだな。

アリアは左右の手でツインテールを揉むようにしながら、赤くなって犬歯を剥く。

「これは寝癖を直すためにちょっと切っただけなの。本当よ」

俺に会うからって……それこそ別に、寝癖を直す必要はないだろ

アリアの発言の趣旨がよく分からなかった俺がツッコむと、アリアは「うぐぅ」と呟きを鳴らすような音を上げて黙った。

……本当に、分からんヤツだな。

アリアは自分で掘った墓穴に自分で落ちたような、恥ずかしそうな顔をしてから……

モップを手に、てってってー、と教室の角まで下がり、

「キンジ！」

いきなりビシッ！　と、こっちを指してきた。
「――競争よ！」
……何が。
「ここからあたしが拭くから、あんたはあっちの角から拭きなさい！　教室の真ん中まで先に拭いたほうの勝ち！　負けたらリポビタンDをおごること！　はいヨーイドン！」
用意が全くできてない俺を放って、アリアは何かをごまかすように……てててて！！　コマネズミみたいに足をシャカシャカさせてモップがけを始めてしまった。
アリアのことだ。負けたらどんな非人道的な罰ゲームが待ってるか分からないぞ
俺は慌ててモップを担ぎ、教室の対角線上からダッシュでモップがけを始めた
アリアと俺は長い固定机の端を折り返し地点にして、ジグザグに走る。
右――左、――右――左。
駿足のアリアだが……いっぺんスカートが長机に引っかかってコケたので、俺は最初の遅れを取り戻せている。
よし、イケるぞ。だんだんコツが掴めてきた。
姿勢は低く。視線はモップの先端に集中して、折り返し地点では先端を机に押しつけて固定し、自分だけ大回りするのが一番速い。
アリアめ。勝負を挑み奇襲したのはいいが、武藤に鍛えられた俺の鋭いゲーム勘までは

読み切れなかったようだな。
リポDはいただいたぞ。別に今そんなに飲みたかないが。
（よし――！）
俺が教室の中心をわずかに超え、肉体疲労時の栄養補給をタダで出来ることが確定した直後――
ごちんっっっ！
俺と同じぐらいモノプの先端をガン見していたアリアと、頭同士をぶつけてしまった。
「――ソ！」
「んあっ！」
俺は、のけぞったアリアと――どさっ。
もつれ合うようになって、長机とイスの間にブソ倒れる。
（……い……いかん、レースに集中しすぎた……！）
い、今のは効いたな……アリアめ、俺と同じぐらい石頭でいやがる。クラクラするぞ。頭の周囲に、小さい土星がクルクル飛んでるような錯覚がする。俺は古いアニメかし、しかし……イヤな予感がするぞ　この流れ。
このあいだ、粉雪を押し倒してしまったのと同じで――
「……ん……」

同じく頭の周囲に小さいヒヨコをぴよぴよメリーゴーランドさせていたアリアは……

（……ッ！）

――やっぱり！

あ、あ、仰向けの姿勢になって……俺に、覆い被さられているぞ！

しかも不運なことに、もつれ合った時の混乱で――俺の手は、モップではなくアリアの細い手首を握っていた　本当にどういうわけか、両手で、アリアの両手首を

な、なんてこった　今、この瞬間だけを切り取って見れば、

まるで俺が、アリアをムリヤリ押し倒したような光景じゃねえか！

「……！」

ごくり、

無人の教室で、こいそんな事を考えてしまった俺の全身が硬直する

アリアの……粉雪よりもちっこい体は、すっぽりと俺の下に隠されてしまっている

長いツインテールは床の一に優美な曲線を描き、俺が握りしめてる手首は一周した指が余るほどで、やっぱり　――アリアは女の子なのだという事を再認識させる

頭の中が、真っ白になっていく、

――そして、その意識の空白を……

瞬時に、一個だけの想いが占領していく、

今まで何度も思ったのに、また思ってしまう。
ああ、こいつ　―叮愛い、叮愛い、叮愛い……と。
特定の女子を本当に可愛いと思うと、もう、それしか考えられなくなるんだな、
凶暴でワガママな性格はさておき、アリアの見た目の叮愛さだけには……いつも、俺は言葉を失ってしまうんだ。この感情には、逆らえない感じさえする。
神様がいるのだとしたら、彼はずいぶん残酷な人だな
ヒステリアモードという病を抱えた俺の人生に、こんな子を配置するなんて
「……？」
俺の下のアリアは……
まず、自分の身に何が起きたのか分からないという感じにルビーみたいな赤紫色の目をぱちくりさせた。
ぱちくり。
ぱちぱちくり。
「……！」
そして自分が俺に押さえつけられるような体勢になっている事に気付き、
「……～～～～!!」
今度は、口をぱくぱくさせた。

ぱくぱくぱく！

……言葉が出ないのは、驚きと怒りのあまり絶句しているという事なんだよな。

桜貝みたいな愛らしい唇の動きを読むと、『カ・ザ・ア・ナー！』……

ど、どうしよう。

この手を離したら、速攻で夏の風穴祭りだ。

俺の脳裏に……巣鴨の本妙寺にある遠山家の墓石がイメージされる。

墓前には後追い自殺しようとする白雪、泣きながら墓石にオリジナル戒名をマジックで書く理子、無表情のまま墓石に柄杓で水をかけるレキも見える。全員、喪服。

リアルすぎるその光景に血が凍り――

スッ、と、なりかけだったヒステリアモードがキャンセルされてしまう。

ああ。唯一、この状況から生還できるかもしれなかった奥の手が、封じられてしまった。

いや……いやいや。

これでいいんだ。キンジ。

今俺は、誰もいない教室でアリアと2人っきり。

そんな状況でヒステリアモードなんかになってみろ。

俺は――言葉巧みにアリアを丸め込み、ゴメンじゃ済まない無軌道な行為をしてしまいかねないぞ。

昔は子供だったから、そこまで逸脱した行動には出なかったが……最近俺も大人になりつつあるのか、そろそろなんとなくその辺　――本格的にヤバい予感がするのだ　あまり考えたくない事だが、そもそもこの力は子孫を残すために備わっている物らしいからな。

というわけで、ヒステリアモードが収まって良かったと考えるべきだろう。ここは。

と、死を覚悟した俺が17年間のしみったれた人生の走馬燈を脳内で回していると――

「……？」

アリアの顔色が、悪くなっている。

はっ、はっ、と、何やら苦しそうな吐息を漏らしている……

「お、おい、どこか打ったのか」

手を離して抱き起こすと、アリアは怒るどころか、顔を伏せ――

両手で、平たい左胸を押さえた。

そしてその場に崩れた正座をしたまま、くる、くるる、と俺に背を向けてしまった。

「……大丈夫……か？」

いつものパターンからは考えがたい行動だったので、さすがに……心配になる。

「う、うん、大丈夫……」

アリアは大きく深呼吸しながら、動悸を押さえるような仕草を解いていった

「……なんでだろ。あたし最近、時々……ここが……」

と独り言のようにぼってから、不思議そうに自分の左胸を見ている。
ちょっと……体調が悪いようなカンジだな。
俺は医者じゃないから、詳しくは分からないが。
「アリア、少し休んでろ。ムリはしなくてもいい」
「う……ううん、いいよ。もう治った。ほらキンジ、グズグズしないで掃除に戻るわよ」
と、スカートを直して立ち上がったアリアは……
何かを誤魔化すように、俺に振り返って苦笑いするのだった

実際、さっきの発作みたいなものは大したことがなかったらしく……その後のアリアはすぐ元気になり、書類棚を整理したりホウキがけを手伝ったりしてくれた
俺はアリアと——面白そうな新作映画の話や、マックで好きなハンバーガーは何かとか、強襲科の鬼教官・蘭豹が実は婚活に勤しんでいるウワサ話など、本当にどうでもいいことばかりを話しながら掃除を進めていく。
本来、女子と2人っきりというのは俺にとって好ましくない環境なのだが……
アリアは、その例外のような気がするな。こうしてると。
さっきのようなハプニングさえなければ、実は、アリアは一緒に居てもそんなに気疲れしない希有な女子なのだ。俺にとって。

屈託のない性格をしてるから、まるで男友達に接するように自然に接することができる白雪や理子みたいに女女した女子が一緒だと、俺はヒステリアモードが怖くて緊張してしまうのか　こんなに会話が持たないしな。

駄弁りながらやっていると、つまらない仕事でもそれなりにはかどるもので……

清掃は、アリアが最初に宣言した通り5時には終わってしまった。

これで、今度こそ本当に単位が揃ったわけだ。とりあえず2学期には進めるんだな。

と、綺麗になった大講義室を見渡してから——ふとアリアの方を見ると——

「……」

目が、合った。

アリアも、こっちを見ていたのだ。

少し赤みがかってきた夏の陽光が、誰もいない教室に差し込み……外から漏れ聞こえてくるヒグラシの音が、静けさをより際だたせている。

俺とアリアは、数秒間、なんとなく黙って見つめ合ってしまった。

赤紫色の瞳が——なんだか切なげに見えたのは、錯覚だろうか……？

「……あー……なんか、時間が余っちゃったわね」

アリアはちょっと恥ずかしげにそっぽを向き、きゅっきゅっ、とツインテールを整えたそして、んー、と何か考えてから……

「あんた、そこに座りなさいよ」
と、最前列のイスを指した。
「なんでだよ」
「授業するから」
「授業？」
「そう。先生・生徒ごっこ。あんたが生徒」
おいおい……高校生にもなって、ごっこ遊びって……
とも思ったが、まあ、アリアは今回の清掃任務を手伝ってくれた功労者だ。
少しはごうことを聞いてやるか。誰もいないから、アホだと思われることもないし。
「……じゃあお前が先生か？」
「そうよ、あたしはアリア先生。あんたは生徒の遠山くん。それでは試験を始めます！」
ノリノリだよ、このアリア
6月に紅鳴館でレオポン君ごっこをやった時もそうだったが、アリアはこういうゴノコ遊びが好きなんだよな、とことんガキっぽいやつだ。
「はい遠山くん、着席っ」
うう。
アニメ声で『遠山くん』なんて呼ばれると……気恥ずかしいな、異常に。

頬を引きつらせつつ席に着く俺をよそに、アリアはとてとてと教壇の方に回った。

「……」

だが、背がちびっちゃいので教壇の向こうに回ると顔しか上に出ない

まるで、さらし首だな。

と思ってちょっと吹き出してしまった俺は、すかさず咳をして誤魔化しておく。

アリアは、むー、という顔をしたかと思うと教壇に腰かけ……こっちに背を向けて腕を伸ばし、黒板にカリカリと図を書いた。

家。家の中に倒れている人間。人間の上には「Killed」と筆記体で書き加えている

そして振り返って、教壇に上足で立ち上がり、

「さて、密室殺人が起きました」

重々しく宣言した。

……

……

「……で？」

「――犯人はどうやって被害者を殺したか。　はい遠山くん、答えなさい！」

答えなさい、って。

情報少なすぎだろ、ていうか、そんだけなら図いらねーし

とは思ったが、すっかり先生になりきっているアリア姫のご気分を害すると拳銃さんが出てきかねないので……俺はマジメに考えてやることにする。

「……その家に郵便受けはあるのか」

「あるでしょうね」

「じゃあ、そこから毒性の気体を流入させたんじゃねーのか」

「ぶっぶー」

にやーっと犬歯丸出しで笑い、両手の人差し指で×印を作るアリア

イラッ

「……犯人がまず室内で被害者を殺害し、鍵を持って外に出る」

「それで？」

「外から施錠した後、鍵を郵便受けから室内に放り込んで密室状況を作るんだよ。これは実際にあったケースだ」

「ちっがいまーす」

ちがいまーす、って。

お前の気分一つで正答・誤答を決められるじゃねーか、これ。

「もうちょっとヒントよこせ。被害者は、どうやって殺されたんだ」

「んーとね。ナイフで胸を刺されたの」

いま考えただろ。

「……人間はナイフで胸を刺されても、しばらく生きてるもんだ。被害者は玄関で刺され、相手が入ってこないようにするために扉を閉め、鍵をかけ――そこで息絶えた」

「ハズレよ」

イライラ。

「……殺した後に家を建てたとか言うなよ？」

「あら、それもいいわね。でも違う」

よくねーだろ。自分で答えといて何だが、こんなイジワルクイズみたいな回答。

「じゃあ犯人が第一発見者を装うってパターンか？　警察と一緒に事件現場に駆けつけて、鍵を壊して開けるフリをするだけってやつ。実際には鍵は開いてて、密室ではなかった」

「よく分かんないからハズレ」

「……合い鍵を作っておいて、被害者を殺害後に家を出て施錠して……その合い鍵を捨てちまうって手口も実際にあったが」

「そんなのズルいわ」

「ズルいことするんだよ、犯罪者は」

「とりあえずハズレよ。さあ制限時間が残り少なくなってきました。チッチッチッチッ」

と、時計の音を口で表現するアリア。

それはもはや先生じゃなくて、クイズ番組の出題者だろう。
ていうかそもそも制限時間が何秒なのか教えてくれてないし。
まあ、たぶん気分で決めてるんだろうけど。
「ブゾブー！　はい時間切れ！」
ほら気分だった。
もういいよ、
というか付き合いきれん。
「……で？　答えは？」
溜息をつく俺にアリアは、ぽーん、と教壇からスカートを翻して床に飛び降りると、
「犯人は瞬間移動で逃げたのよ！」
無い胸を張って、高らかに宣言した。
――ずるっ。
俺は脱力し、イスから転げ落ちてしまう。
「ズルいだろそんなの！」
「ズルいことするのよ、犯罪者は」
笑いながら近づいてきたアリアに、俺はもう返す言葉もない。
実際あたしは、モスクワでそれに近い術を使う犯罪者に苦戦したことがあるんだからね。

あんたも気をつけなきゃいけないのよ？」

ぐい、と眉を吊り上げた顔で詰め寄ってきたアリアに――

俺は苦笑しながらも、頷いた。

「……まあ、そうだな。超常現象なんかイヤってほど見てきたもんな、俺たち」

と、このあいだ不思議な光を発したアリアの人差し指を俺がつつくと

アリアは、その指を、指切りみたいに俺の人差し指に絡めてきた。

……指と、指。

お互いのために何百回もトリガーを引いた指同士が、繋がる。

それを見た俺は――胸の奥が小さく鳴るのを感じていた。

（……絡指……？）

強襲科で習ったことがある。

絡指と呼ばれるこの仕草は、強襲を専門とする武偵同士の――別れの、挨拶。

俺の表情が硬くなった事に気づいたアリアは、ふたえの目を閉じ……

「――ちょっと話そっか。屋上あたりで」

静かに、そう言った。

俺たちは誰もいない屋上へ出て、西側のフェンス近くに並んで立った。

夏休み最後の夕陽が、沈んでいく。
爽やかな海風に、掃除の疲れが洗い流されていく。
まだ日中は暑いが、朝や夕方はだいぶ涼しくなってきたな。
――夏――、か。
いろんな事があったな。でももう、それも終わる。
「……すごい夕陽。吸い込まれそうね」
俺の袖にでも掴まっとけ　吸い込まれないようにな」
詩的な事を言ったアリアに俺が少し戯けて返すと……アリアは、おかしそうにクスッと笑って本当に俺の袖を小さく掴んだ。
「……ほんとはね……」
光の灯り始めた東京を見渡しながら、アリアが反対の手でフェンスに触れる。
「今日、手伝いに来たのは……あんたの単位不足の埋め合わせっていうのもあったけど、他にも2つ理由があったの」
「2つ、理由……？」
「うん。1つは、もっと話す時間が欲しかった。あたしはあんたに、もっと話すべき事があったわ。でも、勇気が出なくて……ずっと、どうでもいいことばっかり話しちゃった。まあ、楽しかったからいいんだけど」

「――緋弾の……事か」
俺が切り出してやると、アリアは振り向かないまま……
「まあ、それもね」
「あの後……どうだ？　あの光の弾が出せたり、理子みたいに髪を動かせたりするようになったのか？」
率直に聞くと……アリアは、ふるふる、首を横に振った。
ピンクのツインテールが、いつもどおり自然に揺れる。
「実は、試してみたんだけどね。なんか、できなかった」
「……そうなのか……」
「何か条件があるのかな。あれはあれで、超偵対策には便利かもって思ったんだけど」
肩をすくめて言ったアリアに――
俺は内心、少し安心していた。
アリアの体内には『イロカネ』と呼ばれる未知の金属が埋まっていて……それは白雪やジャンヌが持っているような、不思議な能力を発生させるものらしい。
そんな話、もし俺がアリアの立場だったら……自分が、怖くなるかもしれない。
だが今の口調からして、アリアは少なくとも『緋弾』を恐れてはいないようだった。

それが正しいことなのか、危険なことなのか、俺には判断できないがな。

「あのね……曾お爺さまは……」

アリアのセリフに、俺は振り向いた。

シャーロック・ホームズ卿。

アリアの曾祖父であり、イ・ウーのリーダーだった、世界最高の名探偵――

「ご自分でも言ってた通り、消えたわ。あの後、どこの国にも、何の情報もないの。でも曾お爺さまはご自分を『死んだ』と人々に思わせて、また唐突に現れる癖があるのよ――ライヘンバソハ、香港、カルカッタ、ニューヨーク。過去、何度もそれをやってる」

「つまり……まだ、生きてる」

俺がそう続けてやると、アリアは、こくり。

力強く、うなずいた。

そう信じている――とでも言うように。

「イ・ウーは……組織としては、崩壊したらしいわ。リーダー不在になって、『緋弾』が部外者の手に渡った場合は、解散する事を前もって決めていたみたい。まあ、奴らは元々バラバラの目的を持って集まっていた組織みたいだったからね」

「ああ。それは知ってた。最後は、あっけないもんだったな」

と言いながら、俺は自分のセリフに少なからぬ違和感を感じていた。

イ・ウーの最後は、あっけなかった……あっけなさすぎて、逆に、何というか……

いや――あの組織のことは、もう考えるまい。

「それでね……イ・ウーで証拠が十分揃ったから、もうすぐママの裁判が始まるの」

と言ったアリアに俺は、イ・ウーの一味に無実の罪を背負わされたアリアの母親――神崎かなえさんの事を思い出す。

「下級裁隔意制度が適用されるから、早ければ9月中に高裁判決が出るわ。そこで無罪になって、さらに検察が上訴しなければ――ママは釈放されるの」

「そうか……あと一歩なんだな」

「本当にありがとう、キンジ。ここまで来れたのは、あんたのおかげよ」

振り向いたアリアの笑顔――に弱い俺は、ちょっと照れて顔を逸らす。

「いいよ別に、改まって礼なんか言わなくても。俺は武偵憲章1条を守っただけだ」

つまり、『仲間を助けた』だけ。そういう事にさせてもらおう。

悪いな、武偵憲章を作った偉い人。

今回は、照れ隠しに使わせてもらうよ。

「……ママの無罪判決が出たらね、あたし……」

アリアは、そこまで言ってから……口ごもり……

ぐす……

と、小さく鼻を鳴らすような音をさせた。
「……？」
「あたし、ね……」
俺に向けた、その目が……
ほとんど沈んだ夕陽に、煌めいている。
涙……で。

「――ロンドンに、帰るの」

その言葉に、俺は――
驚きは、しなかった。
いつか……来ることが分かっていたから。この、時が。
「もう学校にも、あまり来ないかもしれない。裁判で忙しくなるから、あんたと会えるのも……もしかしたら、今日が最後かもしれないの」
どこか遠くで鳴くセミの音に被せるようにして、アリアが告げる。
「元々、あんたとの契約は『武偵殺し』の件が片付くまでだった。だから本当は、理子の証言を取れることが決まった6月に満了していたのよね。でも……あたし……ズルズルと

あんたを引っ張っちゃってた。そのせいで、単位不足にさせたりもした」

……アリア。

お前、自分が母親の裁判のために必死で、俺をムリヤリ引っ張り回していたことを……本当は、気にしてくれてたのか。

「でも7月のお祭りで……あんたが『イ・ウーの一件が片付くまでは、付き合ってやる』って言ってくれたときは……涙が出るほど嬉しかったよ。キンジは、なんて……優しい人なんだろう、って思った……」

アリアは小さく顔を伏せ、かしゃん、とフェンスにおでこをつけた。

「イ・ウーでも、バカなあたしのために、命がけで戦ってくれて……あたし、あの時……あんたはやっぱり、あたしの最良のパートナーだって……思った。でも……だからこそ、あんたにこれ以上、迷惑をかけたくないの……」

アリアは顔を上げ、再び東京に視線を戻しながら言葉を続ける。

前髪の下から俺の顔を盗み見るようにしたアリアは、悲しげな顔をしていたが――そこでムリヤリ笑顔を作り、こっちに振り向いて涙声で話しかけてきた。

「なっ、なに世界の終わりみたいな顔してんのよキンジ。ひどい顔」

「し、してねえよ。お前こそ何泣いてんだ」

「泣いてないっ」

犬歯を剥いたアリアの目から、ぽろ、とタイミング良く涙がこぼれ落ちた。
それを空中でキャッチしたアリアは、ほら泣いてない、という顔をする。
アリアルールでは、涙を落とさなければ泣いてないことになるらしい。
「だから……この0・1単位の小さな仕事が……あたしたちの最後の任務だったのよね。まあ、それもあたしたちらしくていいかもしれないけど。そういえば、一番最初に青海で迷子のネコを探した時も0・1単位だったね」
「ああ……そうだったな」
「ほ、ほら。もっと元気出して笑いなさいよ！　これはハッピーエンドなんだから、笑顔で見送ること！」
アリアは俺の頬を両手でつねって引っ張り上げ、笑顔を作らせてきた。
「あは、ひっどい顔」
と、ひどい事を言いつつのアリアは俺の顔が本当に面白かったのか——
泣き止みつつ、あはは、と笑うのであった。
俺もつられて、笑いすると、アリアはそれで気が済んだのか手を離してくれた。
再び、僅かな沈黙の時が流れ——
「ねえ……キンジは来年の3月で、武偵を辞めるのよね。その思いは、変わらないの？」
頭1個半低い位置から、アリアが俺を見上げて問いかけてくる。

俺は――

ひとつ、小さくうなずいた。

アリアは「そう」と答えて、いったん顔を伏せてから……再び、そのくりくりした目で俺を見上げてきた。

「キンジ。でも、ちょっとした提案があるわ」

人差し指を立てて言うアリアの表情は、少し冗談めかした感じだな。

「来年3月まで、あんたもロンドン武偵高に来るの。イギリス武偵局とかSASで研修もできるし、英語はあたしが付きっきりで教えてあげる」

お、おいおい……それは『ちょっとした提案』じゃないだろ、留学しろってのかよ。

という俺の内心が顔に出ていたらしく、アリアは――

「……なんちゃって……ね」

苦笑いして顔を伏せた。

実は少しは期待していたのか、その表情は少し残念そうだ。

2人して視線を戻した夕陽は、遠い高層ビル群の地平線に沈みつつあった。

まるで、何かのタイムリミットを示すかのように。

「あとね、今日来た2つめの理由は……思い出が……欲しかったの」

小声で言ったアリアを、俺は「？」と覗き込むようにする。

だがアリアは、俺の方を見ない。
その顔が赤く見えるのは、夕陽のせいだけ……ではない、みたいだ。
「今まで、あたしと本当のパートナーになれた武偵は――キンジ、あんただけだったわもう、あんた以上の人は、一生見つからないかもしれない。だからキンジの事は忘れないよ。そして……できればキンジにも、あたしの事……忘れられたくない……」
アリアは、ためらいがちにモジモジとして……
「だから、今のうちに少しでも、一緒の時間を過ごして……思い出を……」
と言って、足をちょっと動かそうとするような動きを見せてから……やめて、ぶる。
ぷるる、と、そのちっこい膝を震わせた。
……どうしたんだ。
「あ、あっち向いてて」
アリアは前髪と夕陽が作る濃い影で目を隠すように、ナナメ下に視線を逸らした。仕方がないので、俺も何だか分からないままに視線を横に逸らす。
しばらく、無言の時が流れ……太陽が、また少し沈んでいく。
さらっ……と、何か……
綿毛のように軽く、滑らかなものが、手の甲の肌をくすぐるように撫でた。

振り返ると、アリアはまだ俺から視線を逸らしたままだったが……
僅かに夕陽を透過させてピンクダイヤモンドのように輝く、ツインテールの片方が俺の手に触れていた。
アリアが、一歩、俺に近づいてきていたのだ。
たった一歩だけ。しかし、その一歩で……俺の、真っ隣に。
アリアは何かに焦っているような、覚悟を決めたような顔をしている。
「……」
アリアは、俺から逸らした視線を北側……フェンスの向こうに広がる、『空き地島』の方に向けていた。
その視線に、何かのメッセージを込めているかのように。
「……」
ちょっと心配になってしまうほどアリアが頬を真っ赤にしているので、俺がその視線の先を丁寧に追っていくと……
そこには、4月に俺たちが不時着させたボーイング737の解体工事現場があった。
俺の頭に、あの飛行機の中での出来事がよぎる。
生き延びるためとはいえ、あの時、俺とアリアは——お互い、その……
人生初めての……

キス、を、してしまっているんだよな。

……忘れない。忘れられたくない。思い出。

さっきのアリアの言葉が頭の中を巡り、なぜか、あの時の記憶に繋がっていってしまう

「キ……キンジ、ごめんね。な、なんか……急に、ヘンなこと言って……」

それだけ言うと、アリアは俺の横に立ったまま……黙った。

アリア。

何が言いたいんだよ。

どういう意味なんだ。思い出って。

……いや。

何となく分かる。本当は。

さっき、絡指をした時から　…本当は、分かってた

あの時だって、あの流れから——手と手ぐらい、繋げたかもしれない

ひょっとすると、もしかしたら……アリアは、そうして欲しかったのかもしれない。

だが俺は、敢えてあの指を解いた。

——ヒステリアモード——

一種の病ともいえる、その特異体質を抱えているから。その、せいで。

（……アリア……）

アリアは黙って、俺の反応を――
そして恐らく、行動を、待っている。
それに気づいた時、俺は――

……怖くなった。

（ダメなんだ）
心の奥底から、その声が聞こえてくる。
（……ダメなんだ、俺は……）
俺は……そういう事を、自分に禁止しているんだ。
どんなに些細な行為でも、お互いを男と女として意識させるような事はしたくない。
今まで……戦いの中で、やむを得ずヒステリアモードになった事は何度もある。
だが、誰かが危険に陥ったわけでもないのに自らその引き金を引く勇気は無い。
父さんや兄さんは、ヒステリアモードになっても自分を失わず――女性を傷つけないで接することができていた。衝動を抑え、冷静さを保つ事ができていた。
だがそれは、大人だからできた事なんだろう。
――俺には……

まだ、できないんだ。
あの状態になった自分を、抑えることが
それをきっかけに、俺とアリアが転がる石のようになって……
その果てで、何かアリアを傷つけるような事をしてしまったら…
一生、悔やむことになるだろう　お互いに、
そう思うと、怖くなる。
それでなくても、今夜は俺とアリアは2人きりだ　俺とアリアが一緒にいるのを何かとシャマをしてくる白雪も、俺たちの前でバカな事をしてアリアを怒らせる理子もいない
そういう歯止めになってくれそうな誰かがいない状況で、もしアリアにあと一歩でも近づいてしまったら――
俺は夜をかけて転がる石の、その最初の一押しをしてしまう事になるかもしれない
だから、俺は……
「……」
ただ、黙っていた。
黙ることで、拒絶を示すことしかできなかった
アリアは、1分、2分、俺を静かに待ち続け　：

そして――緋色の夕陽が、沈み切った。

なんとなく……それで時間切れ感が漂い、

「やっぱり……恥ずかしいね、こういう空気」

苦笑いするような声で、アリアがその流れを自ら打ち切った。

「……そうだな」

とだけ答えつつ、俺は自分が結局アリアを傷つけてしまった事に気づいていた。

お子さまアリアは、こういうとき自分ではどうすればいいのか分からなかったから、俺に進行を任せたつもりだったのだろう。

それを俺はただ、無視した形になってしまった。理由すら説明せずに。

なんだか、アリアに恥をかかせたような気分だ。

（……アリア……）

このままじゃ……悪い、よな。

一緒に死線をくぐり抜けた仲間との最後の時間を、ただ傷つけるような形で終わらせるなんて。

理由ぐらいは説明してやらないと、無責任すぎる。

だから……

もう、これで最後なんだから。
正直に話してもいいだろう。
――ヒステリアモードの、ことを。
今までは一緒に生活してたから、言えなかったが……俺も、せめてアリアの心に報いる形で落とし前はつけておくべきだろう。ある種の、説明責任を果たすような形で。
「ゴメンねキンジ。なんか、勝手ばっかり言って……そうよね、あんたにだって好きな人とか――」
などと何か誤解したような事を口走ったアリアに向き直り、真剣な眼差しでそのセリフを止めた俺は――
「アリア。これから話すことに、驚かないでくれ」
と、前置きした。
アリアは自分も真剣な表情になって――小さく頷いた。
俺は小さく深呼吸してから、
「実は、俺は……」
ヒステリアモードの事を切りだそうとした――
その時。
「……？」

俺とアリアが、全く同時にその異変を感じた。
――セミの声が、止んでいる。
アブラゼミ、ニイニイゼミ、ヒグラシ　今までのセミが、鳴き止んでいるのだ。
これは日没だけが原因じゃないだろう、最近は電灯の下で、晩中鳴くセミだって少なくないのだから
そう、まるで半径2キロ以内の全てのセミが……
同時に何かを感じ取って、一斉に声を潜めたかのように――
――次の瞬間、何かの気配がした。
俺とアリアが、揃って東側に振り向く
屋上の東側、フェンスの上には――
平均台に立つようにして、1人の少女が直立不動の姿勢でこっちを向いていた
彼女がその肩に掛けているのは、鈍色に輝く、ドラグノフ、
細身・軽量で耐久性に優れる、戦場での運用を理念に設計された実戦的な狙撃銃だ
「……レキ」
その名を、呼ぶ。
あれは狙撃科のSランク武偵――レキ、だ。
あんな所に立って、何をしていたんだ。

いや、というか……いつからいたんだ。
いたことに全く気づかなかった。俺も、Sランク武偵であるアリアでさえも。
「……あ、あ……えっと、レキっ。ち、ちがうのよ？　これは……その……」
ちょっと慌てた足取りで俺から歩離れたアリアが、あせあせ、と俺を指した。
ぽ、ぽぽぽぽっ。
と、薄闇の中でも分かるくらいに、その顔を更に赤らめて頭から湯気を上げている。
「こっ、これは別になんでもないの、い、一緒に仕事してただけなの、だからその……」
どうやら、俺と2人っきりでいたのをレキに覗かれていた……と思ったらしい。
いや、実際そうなのかもしれないな。前にレキは、俺の部屋を狙撃銃のスコープで覗いていた事があったし。
無くて七癖だ。無趣味に見えて、レキにはノゾキ癖があるのかもしれないぞ
「……」
レキを見る俺の横で、アリアはテンパり気味の足踏みをし、
「あ……リポビタンD！」
と、魔法の呪文を唱えるように叫んだ。
「あ、あんたにさっきのモップがけ競争で負けたから、買ってこなきゃ……だねー」
それを口実に、一刻も早くこの恥ずかしさから逃れたいという顔をしたアリアは――

とた、たた、たったったー！　と、何度か俺の方を振り返りつつ、足をもつれさせつつ、屋上を横切る。

そして、ツインテールをなびかせて早足に階段を下りていった。

「……」

レキは、黙っていた。

その背後、東の空には、西に沈んだ緋色の太陽と入れ替わるようにしてやけに大きく見える月が、輝きを放っていた。

眩いような、瑠璃色の、輝きを。

……お邪魔でしたか」
アリアの背を見送った月下のレキが、ようやく呟いた
そして、トコトコとフェンスの上を猫のように歩いて渡ってくる
俺はその問いには答えず、
……何してたんだよ」
すぐ頭上の辺りまでやってきたレキに、逆に問いかけた
「読んでいました」
「読んでた……？　本なんか持ってないだろ、お前」
「本ではありません」
「じゃあ、何を読んでたんだよ」
レキの不可解な発言に、再び質問する
「――風を」
と答えたレキの短い髪を――肌寒いような海風が僅かに揺らした。
ひら、と制服の短いスカートも揺れたので……

俺は高いところに立つレキから、少し赤くなって視線を逸らす。
「……降りろよ。良くないぞ、人を見下ろしながら話すのは」
と言って……
しばらく何の反応も感じられなかったので、再びチラッとフェンスの上を見ると……
レキは、もうそこにはいなかった。
「……！」
振り返った俺は、小さく息を呑む。
いつの間にか――
音もなくフェンスを降りたレキが、俺の背後、すぐそばに立っていたのだ。
「風が、狂い始めている　――」
そのレキが、独り言する。
「……何だって？」
つい聞き返しながら、俺は背筋に何か寒いものを感じていた。
レキの目が、どこか遠い虚空を見ているようなムードだったからだ。
こいつも……なんというか、電波系だよな。
「キンジさん」
ガラス細工のような目が、俺の方を向く。

な、なんだよ。
俺が少したじろいだ、その時――
俺に詰め寄って距離をゼロにしたレキは、つっ――と背伸びして
――――

――キス――

してきた
(……ウソ、だろ――っ…)
あまりにも……
あまりにも、意外で。
俺は呆然としながら……自分の唇に、シリコンみたいになめらかなレキの唇が重なっている事を、ただ感じることしかできずにいる
ほのかにミントのような香りのする、レキの――キス
――がちゃんッー
ガラスの割れる音に、レキの両肩を掴んで放しながら振り向くと――
アリア、が。

屋上への階段を上りきった所で、ドリンクのビンを2本まとめて落っことしていた。
そのスニーカーの足元に落ちたビン同士がぶつかって、割れている。
「……あ……」
赤紫色の瞳をまんまるに見開いて、言葉を失っていたアリアは――
俺と目が合うと、わぐ、わぐ、と口を動かして、
「ご、ごめんっ。あたし、その……それ、し、知らなかったから……！」
ようやく喉の奥からアニメ声を絞り出した。
「……そ、そうだったのねキンジ。ごめん、あたし……そ、そういうこと分かんないから、あ、ううん、別にその、悪いとかいうんじゃないの。だってその、もう、高校生だもん、あんたにも好きな人ぐらい……だ、だからさっき……あんたは、ああだったのね――」
慌てまくりのアリアは、ぷるぷると小刻みに震えてから――
俺が状況を説明しようとするより先に、ツインテールを翻して踵を返す。
「ご……ごめん！　本当にごめん、キンジ……！」
裏返った甲高い声でそう言い捨て、脱兎のごとく逃げ出してしまうアリア。
たんたんたんたん……！　と、階段を駆け下りる音が遠ざかっていく。
「……アリア……！」
それを追おうとした俺の背後で――

ちゃき、という音がした。
強襲科でイヤというほど鍛えられた感覚が、俺を強制的に振り返らせる。
見ればそこでは、耳で判断した通り……レキが、銃を肩から下ろしていた。
銃床を足元につき、銃身のグリップを握り、全長１２０㎝もある長い狙撃銃を杖みたいに立てている。
まるで、見えない門を守る兵士のように。
「キンジさん」
再び俺の名を呼んだレキは、きろっ、とまたカメラのレンズを向けるように俺を見た。
その視線に、俺は本能的に意識をレキに集中させてしまう。
この、目。
まるで　―狩人が、獲物を見るような――
「あなたはアリアさんと結ばれてはならない」
「……なっ……」
何だ。
何の話だ。レキ。
「これからは私が、あなたのパートナーになります」
「お、おい……」

ドクン――

という、あのイヤな鼓動を体の中心・中央に感じた俺は……

さっきのキスを封じるように口を手の甲で押さえながら、レキから、歩退いた。

「あなたたちは強くなった」

録音された言葉をただ再生するかのように、レキが抑揚のない声で語ってくる。

「イ・ウー程度の敵が相手なら、それでも十分だった事でしょう。実際、そのキンジさんと私が素手で戦えば――十中八九、キンジさんが勝つ」

コイツ――知っているのか。

イ・ウーの、事を。

俺の、事も。

「でも、これからの敵は、ただの力比べでは斃せない。だからあなたは、やり方次第ではあなたたちを簡単に殺せる人間がいることを知るべきです」

これからの……敵だって？

聞き捨てならないその言葉に――

俺が反応する間もなく、レキは言葉を続けた。

「たとえば、狙撃手。永い時間を潜み、彼方の距離から射る私たちは……偉かな時間しか戦えない超能力者を、僅かな距離でしか戦えない拳銃手を、容易く仕留められる」

そう言い放ったレキは、セーラー服の胸ポケットから銃弾を取り出す。
「――装甲貫通弾……」
それを見て呟いた俺に、レキは何も答えない。
弾頭の形状と輝き方が通常の狙撃弾と異なる、それは――
シャーロックがカナを撃ったのと同じ、装甲貫通弾だろう。
「今から私が、それを教えて差し上げます」
流れるような手つきで抜いた弾倉に――ぱちん、と必殺の銃弾を籠めたレキの前で……
俺は自分の体に、とうとうあの力が漲ってくるのを感じていた。
――ヒステリアモード。
性的興奮をトリガーに、常人の30倍の能力を発揮させるあの力が。
「そろそろ頃合いのようですね」
と、弾倉を再びセットした狙撃銃を抱えたレキを見て――
俺は心の中で、自分のマヌケさを自分で毒づいていた。
そう、これは俺の人生のパターンみたいなものなんだよな。
何かの事件を解決して、一件落着――と気を抜いていると、新たなトラブルメーカーが現れるんだ。白雪の時も理子の時もこうだったのに、また気を抜いてたよ
まあ、まさか次にレキが来るとは思ってなかったけどな

ちゃき　と、狙撃銃を俺に向けて構えたレキを見て俺は苦笑する
「キンジさん」
「……何だ」
「私と結婚してください」
余りにも意外な言葉に――
はっ!?
俺の口から、声にならない声が漏れた。
「……レキ、聞き間違いだとは思うが……今、何を……？」
「プロポーズしたのです。あなたに」
……
……
こ……粉雪。疑って悪かった。
君は正しかった。俺は今月中に……求婚される、か。確かに今はまだ、8月31日だよ。
「ま、待ってくれ、レキ。いきなりすぎる。少し前置きをして欲しかったところだよ」
「前置きしたつもりです。『これからは私が、あなたのパートナーになります』と」
しれっ、と言ったレキの言葉に――今やPC並に回転が速くなったらしい俺の脳内で『掠奪婚』とか『ショットガン・マリッジ』とかいう単語が検索ヒットした。

まあ、どっちかというと男がする事だけどな。それは。

「こ、光栄な話だが……レキ。それは、人に銃を向けながら言うことじゃないと思うよ」

ヒステリアモードの血が頭に回り、できるだけ穏やかに対応しつつ、歩退いた俺に

「逃げられませんよ」

もはやドラグノフと、体化した感すらあるレキが、銃口を向け直してくる。

い、意外と情熱的なタイプだったんだな。きみは。

たじろぐ俺を射貫くような双眸で見据えたレキは、

「もし断るというのなら――」

この日、この時から始まってしまった大事件の、新たな幕開けを告げるのだった。

アリアのお株を奪う、あのセリフで。

「――風穴を開けます」

あとがき

メリークリスマス！　今年も赤松サンタがやってきましたよ！

というわけで『緋弾のアリア』、V巻をお届けできてとっても幸せな赤松です。

今回のアリアは、なんと自分の曾祖父・名探偵シャーロック・ホームズと出会います。

激動の展開に「もしかして、『緋弾のアリア』はもうすぐ終わってしまうのでは？」と心配された読者さんもいたかもしれませんが……なんのなんの！　とんでもない！

まだだ、まだ終わらんよ！

といいますか、ここまでは長いプロローグで……

アリアたちの冒険は、これから本編が始まるのです。

そうしないと私、まだ出番の少ないあの子に狙撃されちゃいますからね！（汗）

さて、V巻には――アリアのキャラクターたちと世界観を気に入って下さった皆様への感謝の気持ちを込めて、本編に加えて短編小説を3つ書きました。

あなたはぜひ、キンジと一緒に……白雪の妹がやってきたり、理子とサッカーをしたり、アリアとモップがけレースをしたりする楽しい日常編を満喫していって下さいね。

さて、ところで……

5冊も続いた『緋弾のアリア』ですが、この作品、まだまだ謎が多いですよねぇ。

そこで今回、あとがきに『緋弾のアリアQ&Aコーナー』を開設しちゃいます！

キャラクターに関すること、武偵高に関すること、銃や技のこと、なんでもOKです。

みなさんの『緋弾のアリア』に関するご質問を、どしどしご応募下さい！

ご質問は296ページに描かれたQRコードからアクセスできるモバイルアンケートのメッセージ欄、もしくはその上に書いてある住所まで郵送でお届け下さいね。

その中から選ばれたご質問に――赤松が、お答えします！

お試し版として、今回は月刊コミックアライブで連載中のマンガ版『緋弾のアリア』の制作チームの皆さんからいただいたご質問にお答えしましょう。

Q：『キンジの部屋って、一体どういう間取りをしてるんですか？』

ああ！　これは確かに、文章だけでは分かりにくい事ですよねえ……！

キンジは武偵高の第3男子寮に住んでいるんですが、この寮には、ほそながーい廊下のある部屋が幾つかあります。廊下に面した扉までの距離を覚えておき、日常生活の中でも直線距離を目測する訓練ができるようになってるんですね。キンジの部屋も、そんな訓練部屋の一つなのです。ご参考までに……次のページに、間取り図をつけておきますね！

といったところでV巻もおしまいです。また、次の季節にお会いしましょう。では！

2009年12月吉日　赤松中学（あかまつちゅうがく）

こんにちはこぶいちです。
今回は本編でも衝撃発言を
連発したくれたレキ。
せっかくのおまけページなので
髪型も変えてみました。

レキは常にヘッドフォンと
ドラグノフがセットなので
地味に手のかかる子なのですが
その分描いた後の達成感は
一番だったりします。

今後どう活躍してくれるのか
非常に楽しみですね！